

久造は舐めるやうに酒を味はひながら、

「なあ、輝一。私此頃は酒も飲めんやうになつたよ。この六年の間、無論酒類などは一滴もやらんので自然嗜好も變つてしまつたのぢやねえ。だがしかしかうして寛いで飲ると、實にうまいのう。はゝゝゝ」と云つて、あいた盃を佐藤にさしながら、「何うぢや、お前もひとつ遣らんか。私一人では氣がさすからなあ。はゝゝゝゝ。」

佐藤も嬉しさに受けて、

「いや、お父さん。僕は相變らずこの方は少しも上達しません、併し今夜は心祝ひにお相手を致しませう。」と云つて、芳江に酌をして貰ふ。久造は煙草をとつて、

「お前は私の息子ぢやが、併し酒はなるべく飲らん方がえゝぞ。實際悪い習慣ぢや。一度これに染むともうなかなか盃を擲つことは出来んからなあ。私も六年間盃を持たんから、今度はきつと禁酒が出来るぢやらうと思つてをつたが、矢張り駄目ぢや。佐世保へ出て來た晩に、塚口がやつぱり心祝ひぢやと云つて、あれの官舎で御馳走をして呉れたが、その晩には私も非常に酔うてのう。僅三本ばかりの酒で、可笑しい程參つてしまつたよ。はゝゝゝゝ。」と云つて、佐藤が返す盃を受けながら、「全く私もあの塚口には、今度は大變に厄介になつたよ。あれは今時の人間にしては珍らしい情誼の厚い男ぢや。今度でも私の身のまはりのことは一切彼奴がやつて呉れたのぢやからなあ。」と、しみく云ふ。佐藤も

合點して、

「僕もその點では、非常に敬服もしてをりますし、又感謝の念も持つてゐるのです。僕はその方からの度々のお手紙を拜見して、實際泣きました。あんな人は全く珍らしいですよ。」と云つて、父親の顔をぢつと見ながら、「ねえ、お父さん。それはさうと、お父さんの今後の御方針はもうお極りになつてをりますんでせうか。塚口さんからのお手紙で大體のことだけは承知してをりますが、併し海軍省との將來の關係は何うなるんでございませう。」と熱心に訊く。父親は盃を持つたまゝ、

「いや、もうその事なら私一個の決心は極つてをるのぢや。海軍省の方では何ういふ考へを持つてをるか知らんが、併し私はもう今後一切公人としての權利も、名譽も、總てを擲つて、出来ることなら、ほんの一個の市井の人となつてしまひたいのぢや。つまり佐藤久造はもう今から六年前に死んでしまつたものとして、これからは唯お前の力に絶つて、人間としての正しい道を履んで靜かに餘生を送りたいばかりなのぢや。」と、嚴肅な語調で云ふ。披かつた彼の胸には嘗つて、國家に對する義憤から我れと我が生を斷たうとして、軍刀で自盡しようとした時の大きな創痕が酔ひと一緒に紅くつきりと浮き上つて見えた。それを見てゐると佐藤の胸には又悲壯な心持ちが一杯に漲り渡つてくるのであつた。

久造はやがて莊重な顔になつて、

「輝一。それに、お前達若いものゝ解釋は何うであるか知らんが、併し私も六年の間の長い試練に依つ

て、確かに私自身の思想は或意味に於て純化されたものと信じてをるのぢや。つまり極端な國家主義者であつた私が、少くとも個人といふものゝ價値と、權利とを認めることが出来たゞけでも、私にとつては大きな變化だと云はなけりやならんのだ。なあ、輝一。私は昔はお前の考へをいつも輕蔑してをつたが、併し今度は大分お前に接近することが出来るぢやらうと思つてをるのだ。人間の作つた或規定の爲めに、個人がその生涯も名譽も、それから骨肉も總てを失つてしまはんけりやならんとすれば、これ程不合理極まることはなからうぢやないか。私は或の意味で、確かに魁つたのぢや。或若い思想に眼覺めたのぢや。六年間の囹圄の苦しみが、確かに私を人間にして呉れたんぢやよ。はゝゝゝゝ。」と、彼は會心の笑みを洩らしながら、「併し輝一。私はもう何も云はんぞ。刑餘の私はもう既に一種の去勢された人間にされてしまつてをるのぢや。唯自分としては正しい考へに服し、正しい道に依つてこの餘生を終ることが出来れば、それでも、何も望むところは無いのぢや。過去の片々たる經驗は、浮べる雲の如きものさ。いかなる功業も、罪惡も、今から振返つてみれば、まるで他愛のない烟のやうなものぢや。なあ、輝一、私も全く今度ばかりは悟つたよ。はゝゝゝゝ。」

佐藤はひどく昂奮しながら、
「いや、お父さん。僕はこの間のお手紙を拜見して、大體のお考へだけは分りました。僕もこの呪ふべき六年の歲月が、お父さんにさういふいゝ影響を與へたとすれば、この上もない喜びだと思ひます。少

くともお父さんがもう名利の外に立つて、これからの御生涯を安らかに正しく、お送りにならうといふお考へになられただけでも、非常に愉快なことだと思ふのです。人間は全くお父さんの仰しやるやうに絶えず境遇に應じて變つて行かなけりやならんものだと思ひます。」

「さうだとも、私には従つてもう悔恨も何もないのぢや。過去に對する執着もなければ又つまらん願望ももう既に忘れてしまつてをるのぢや。清風明月といふやうな興懷を私は今こそこの胸に感ずることが出来るのぢや。唯私は今から思ふと亡なつたあの津奈が氣の毒でならんのぢや。私はあれを苦しみから苦しみのうちに死なせてしまつたのが、實に殘念でならんのぢや。併しそれももう今から何を云うたつて及ぶことではないが。……」と、黯然とする。佐藤も亡き母のことを云ひ出されると、悲しげに眼を落して、

「お父さん、どうかもうそれは仰しやらないで下さい。僕もお母さんに對しては絶えず或る思慕の情に悩まされてをるのです。丁度時機があゝいふ時機でしたから、僕も濟まないと思ひながら、心の中で思つてをる百分の一もお盡し申すことが出来ずに、全く殘念なことをしてしまひました。」

久造はそれを押へて、
「いや、お前は何も云ふことはないさ。お前が津奈に盡して呉れたことは、私もはるかに聞いて、非常に嬉しく思つてをつた。まあえゝ。もうそんな亡なつた人間の話は今夜は止さう。はゝゝゝゝ。」と力めて

笑つて「なあ、輝一。それよりもお前のしてをる仕事の方は何ういふ成績ぢや。この頃では大分お前の名も世間に聞えて来たさうぢやが、私はそれを聞く度に、お前が一步步地歩を踏み堅めながら社會へ乗り出して行く勇ましさを蔭ながら想像してをつたんぢや。何んでも聞けば「新理想」といふ雑誌はお前が經營してをるのださうだな。何うぢや。あれは言論界でもどしどし權威を占めつゝあるのかな？ 實は私も汽車の中で一部買つて見たが、なか／＼面白い主張を持つてをる雑誌ぢやのう。」と、又にこにこしながら云ふ。佐藤もやつと氣を取直して、

「やあ、お父さん。それではもう雑誌を読んで下さつたんですか。どうも有難うございます。それぢや何うか僕のやつてをる仕事の話を見せて下さいまし。僕はそれが早くお話したくつて實はもう先刻からうづ／＼してをつたんですよ。は／＼。」と笑ふ。彼の頬にも浅い酔ひが上つて来た。

佐藤はやがて久造に「新理想」の話や、今度蘭部子爵といふ又と得難い友の助力を得て、愈々社會事業の一端に着手する筋道を搔い摘んで物語つた。先づ第一にその足拵へとして、言論界に鞏固な地歩を占め、それから徐々に基本の事業に取懸つていく道程を先から先と物語つて行つた。久造は自分も眉をあげたり、眼を睜つたりしながら、さも愉快さうに聞いてゐたが、大體の話が分ると、ひどく感じ入つたやうに、

「ほう、それはすばらしい仕事ぢやのう。かうやつて聞いてをつても、私は胸が躍るやうだぞ。お前の

考へはたしかに私の考へに合致してをる。お前のその事業は現今の日本の社會が最も痛切に要求してをるものなんだ。えゝ處へ心がついた。私はもう双手を舉げて賛成せずにはをれんよ。」と云つて、又盃をふくみながら、「併しそれにしても、その蘭部子爵といふ人も實に勇敢な男ぢやのう。年の若いのに似合はん痛快な男ぢや。さういふ人の助力があれば、お前は屹度成功するぞ。まあえゝ、大いに遣つて呉れ。私も蔭ながらお前達の旗擧げの日を首を長くして待つてをる。もう今日ではお前達若い者が全生命をあげて活躍せにやならん時代なのぢや。實に愉快ぢやのう。」と、久造は老いの胸にも血が湧くやうに云ふ。

佐藤も父久造が思ひもかけない心持ちを示して呉れたので、益々昂奮して、先から先と、將來の計畫に就いて物語つた。それが一層又久造を喜ばせて、彼は力強い言葉で頻りに佐藤を勵ました。佐藤も久造にその晩は、又再び以前のやうな熱血の燃える青年の氣概に充たされて来たのであつた。

久造はさうしてゐるうちに、ふつと鹽谷大將のことに話頭を轉じていつて、
「なあ、輝一。お前はそれで鹽谷さんには始終逢つてをるのぢやな。この頃は何うぢや。相變らず元氣かな？」と訊く。佐藤はそれを云ひ出されると、妙に聲を落として、

「いや、お父さん。お父さんは新聞などもお讀みになる機會がなかつたでせうから、或は御存じないかも知れませんが、鹽谷大將は實にお氣の毒なことになりましたなあ。」と云つて、彼は大將の失脚のこと

を同情的に溢れた語調で父久造に語つた。久造は深い感慨を眼に現はしてちいツと聞入つてゐたが、嘆息を吐いて、

「ふむ。それではあの人ももういよく政治界を隠退することになつたのか。いや、併しそれも宜からう。やつぱり時代がつまりあの人を置き去りにしていつたのぢや。それは一方から云へば自然の數ぢやからなあ。」と云つて、さも懐しさに、「それで、今は矢張り此方の邸にをられるのかな？」

佐藤は眼を落しながら、

「は、まだ多分此方におゐるでだらうと思ひますが、併し今朝の新聞で見ますと、何でも近いうちにお嬢さん達をお連れになつて、何處か海岸地方へ引籠られるとかいふ話ですが、僕は何んだかさういふことを聞くと、悲壯な心持ちがしてならんです。大將はもうあのお年ですが、併し僕等に云はせると、あの方の政治的生命は、まだあと十年や十五年は十分持續す可きものだと思ふのです。あの方もこの頃では随分讀書などもされますし、又思想のうへから云つても、抱負の上から云つても反對派の連中よりはるかに深いものを持つてゐられるのですからなあ。時代が大將を置いてきぼりにして行くといふよりも日本の政治界の墮落が清廉な君子としての大將を容れ得なくなつたといふ方が適切かも知れませんよ。いづれにせよ、今度の事件は日本の憲政史上に、閥族罪惡篇の一章を附加したものだと思ひます。一般の輿論も確かに大將の方に味方をしてゐると思ふのですが、併し多數黨の勢力には實際に於て勝つこと

は出来んのですからなあ。もう何うあつても大將は矢張り隠退されるより他に道がないのかも知れませぬ。」と、佐藤は慷慨の氣を帯びて云つた。

久造はその話を黙つて合點きながら聞入つてゐたが、やがて嘆息を洩らして、

「全く政治界のことはいつ何うなるか分らんもんぢやのう。殊にこの頃のやうに動搖の激しい時には、政治家個人の勢力などといふものは萍よりも頼りないものぢやなあ。はゝゝゝ。」と寂しく笑つて、

「それで、大將はこの頃健康の方は何うぢやな。少しは丈夫になられたかな。」

佐藤はもうひとつ芳江に酌をして貰つて飲みながら、

「いや、健康の方も餘りおよろしくはないらしいのです。例の御持病があるうへに、腎臓もあまり良くないので、その方から云つても、もう大將はとても激務には耐へられまいと思はれるのです。ですから何處か氣候のいい海岸地方へ移られるといふことは、甚だ結構なことだと思ふのですが……」

久造はふつと思ひ出した様に、

「それで娘さん方は何うぢやな。もう二人ともいづれ結婚はされたらうが、孫さんの出来た人もあるぢやらうなあ。」

佐藤はさう云はれると、妙に遠慮がましい様子になつて、久造に澄子の不幸な結婚のことを話して聞かせた。久造は眉を擡めて、

「ほう、それではその方は離婚になるのか？ 困つたもんぢやのう。それは重ねぐ〜どうもお氣の毒なことぢや。」と云つたが、佐藤はそれを押へて、

「お父さん。併しそれはまだ極つた話ぢやないですから、何うか御他言は御無用になすつて頂き度いのです。もう日ならずして龍岡少佐も歸朝して來るとかいふ話ですから、これからひと騒動起るだらうと思つて、僕も大いに心配してをるのですよ。全く誰れが考へても澄子さんには同情を持たずにはをられないのですからなあ。この頃ではもうすつかり絶望して、ひどいヒステリーになつてゐられるとかいふ話ですが、全く僕はお氣の毒でならんのですよ。」と、しんみりした調子で云ふ。久造も深く合點いて、「それではもう大將の將來の希望はつまり春子さん一人に懸つてをる譯ぢやなあ。春子さんは一體幾歳になつたんぢやね？」

佐藤は眼を据ゑて、

「さあ、確か二十歳位だと思ひますが……」

久造は遠くを願望するやうに、

「ほう、もうあの娘さんもさうなるかなあ。は〜、は〜。自分が年を老つていくのも早いもんぢやが、併しあの位の娘さんは見る間に成人してしまふのう。は〜、は〜。」と笑つて、「併しあの春子さんは昔から可愛い子であつたから、さぞ美しくなつたらう。鹽谷家と云へば、我々と違つて、譬へ大將は失脚

しても、爵位はあるし、富裕ではあるし、兎に角名門ぢやから縁談もそれこそえゝのが降る程あるぢやらうのう。まあ大將もこれからは春子さんに依つて、老後の慰めを得る譯ぢやなあ。運命は人間を悲運に陥れても、何か一つは残して置くものぢや。は〜、は〜。」

佐藤は黙つて腕を拱んで、深い思ひに沈んでゐたが、彼の瞳にはその時、燃える焔のやうな激しい感情が絶えず消えたり、現はれたりしてゐた。久しく思ひ出さなかつた懐かしい人の面影はそれと同時にくつきりと心象の面に描き出されて、彼は胸を絞られるやうな思慕の情の切なさに、少時の間は我を忘れてしまつてゐたのであつた。

ふぢ子はいつの間にか又臥床へ入つて、もうその頃にはすやく〜と安らかな寢息を立て、寢入つてゐた。芳江は親子の物語りを、さも羨ましさうにうつとり聞入つてゐたが、彼女も遠い故郷の空でも思ひ出すのか、いつかしら首を垂れて人知れぬ涙を呑んでゐた。

久造は少時すると、もう陶然としたやうに、盃を伏せて、「おい、婆やそれではひとつ飯にして貰はうか。久振りで飲つたので、すつかり酔つてしまつたよ。は〜、は〜。」と笑つて、餉臺の前で居坐ひを直した。

その日は朝から滅切り涼しい風が吹いて、樹立の多い屋敷町には一夜のうちに慌たしい秋が来たのがはつきりと感じられるやうな日柄であつた。照る日の影も何處となく薄黄ろくほのめいて、空を流れてゆく白い雲の群にも澄み渡つた明麗な寂しさがそれとなく見透かされるのであつた。

蘭部子爵は晝飯を済ますと、書齋の腕椅子に倚つて午後の日課である讀書にかゝつたが、併しその日は妙に氣が進まなくて、文字の行から行を追つていくうちにも、何となく名状することの出来ないやうな憂愁が心の底の底から油のやうに湧き上つてくる。それは既に絞首臺に上る日の決定した死刑囚が感じるやうな苦悶の反射で、それこそ遣り場のない、暗い焦悶の思ひに似た佗しさであつた。子爵はやがて自棄にばかりと大きな洋書を伏せて、葉巻を取上げながら、今度はひとつ處へちいつと眼を据ゑて、何事か深い沈思に耽りだした。

子爵もこの頃では、何處かしらに面壁れがみえて、美しい顔には絶えず神經的な不安やら、心の動揺やらが傷ましい程印せられてゐるのであつた。悲しげに濡れ輝いてゐるその瞳にも、以前には滅多に見られなかつたやうな異様な心の苦悶が映つて、それが時々絶望的な放縱さへあらはに見せてゐることがあるのであつた。

子爵はやがて窓帷に映る午後の日射しへ眼を移しながら、それから一時間ばかりの間、もう身動きさへしらずに沈思を續けてゐた。そこへ突然扉を叩く音が聞えたので、彼は可笑しいほどぎくりとしなが

ら、入つていふ合圖をした。

扉を開けて入つて来たのは、若い小間使の一人であつた。小間使は小さな盆の上に載せた一封の角封の書状をもつて子爵の椅子の傍へ近寄つて来て、無言のまゝそれを子爵に示した。

子爵は一寸合點いて、それを受取ると、直ぐに裏を打返して見た。と、裏には差出人の名前は書いてなくて、唯Sの字がたつた一字隅の方に書いてある。そのサインをひと目見ただけで子爵にはもう誰れからの手紙であるかといふことは分るのであつた。この頃では毎日一度は必ずかうした手紙が子爵の書齋を訪れるのであつた。唯Sの一字に隠れて、胸に餘る思ひのたけを書いて送るその人は、澄子でなくて誰であらう。

子爵は小間使を立去らせてしまふと、やがて指先に總ての力を集めてゐるやうな様子で、その封を切つて見た。と、中からは薄い肉色をした小型のレター・ペーパーが三枚ほど出て来て、それにはまるで戀を知り初めた處女のやうな淨い、美しい感情が細々と認めてある。

「……もう私、今日でちやうど一週間貴方にお目にかゝりません。私はお目にかゝりたくてお目にかゝり度くてたまりませんのです。明夜は私ちよつと用事がございまして、銀座まで出ることになつてをりますから、どうか又彼處の家でお目にかゝらして下さいました。私、七時頃にあちらへ參つて、お待申上げてをります。私、あの事で實はもう一度是非貴方に御相談致さなければ

ふので、何うしても固くとつて降らんです。で、僕もちやんと用意をしてをつたので、もう到底妥協の餘地はないものと認めて、最後の手段を執ることに決心をいたしましたよ。」と、肩を聳やかしながら、子爵も合點いて微笑みを含みながら、

「それでは矢張り第一案の方を止めて、第二案の方へ取懸らなければならんですなあ。此方の豫期した通りだつたのですなあ。」と云ふ。佐藤はひどく意氣込んで、「さうですとも。ですからもうかうなつたら、何も馬杉などは眼中に置く必要はないと思ふのです。僕も昨日はもう三時間もかゝつて、彼を説いてみたのですが、實に分らんことばかり云ふので、僕も腹が立ちましてなあ。實は少し矯激な手段だとは思ひましたけれど、最後に社員を全部編輯へ集めまして、皆の輿論を聞いてみたのです。處が意外にも一人残らず我々の意見に賛成して、もし馬杉が我々の主張に妥協しなければ、皆は擧つて現在の社を脱退し、我々の旗下に馳せ參ずるといふ形勢になつて來たのです。若い連中が多いもんですから、終ひにはもう殺氣立つてしまひましてなあ。その騒ぎといつたらないのです。中でも一番過激な連中は平常から馬杉に對して不平をもつてをるもんですから、この機會だといはんばかりに、危くすると馬杉に鐵拳制裁を加へさうな勢ひなので、今度は反對に僕がそれを有めて歩くといふやうな有様で、實にどうも愉快でしたよ。僕は何だか事業の幸先がいゝやうな氣がして、嬉しくて耐まらんですよ。」と、さも緊張しきつてゐるやうな顔色をしながら云ふ。

子爵もにこ／＼口先だけで笑つてゐた。

子爵はやがて佐藤の顔を見て、

「いや、兎に角それはまあ結構でした。それで、貴方は今後何ういふ方針を執つていかれるつもりですか。」と徐かに訊く。佐藤はその顔を見返して、分り切つたことをいふやうに、

「子爵、それはもう一昨日ちやんとお打合せがしてあるぢやございませんか。この形勢なら、何うあつても馬杉とは當然手を切らなければならんですから、一昨日作製した第二案の根本條件に返つて、兎に角新たに新理想社を組織するのが焦眉の急務だらうと思ひます。さうして此方は此方で着々準備を整へていつて、來年の新年號から堂々と打つて出るより他はないと思ひます。何しろ社員全部が此方の味方で、しかも即刻現在の社から脱退してしまふといふんですから、いくら馬杉がじたばたしても、到底この先事業を續けていくことは出來んことになるんですもの。もう何を云つたつて、勝利は僕等の上にあるんです。」と、さも痛快さうに云つて、「それで子爵、實は今夜、社員の中の重だつた者達を四人ばかり此邸へ呼んで、今夜のうちにすつかり此方の陣立てと手配とを極めてしまひ度いと思ひまして、實は午前中にすつかり皆の處へ通告して置きましたから、甚だ專斷で失禮ですがどうか此邸でもその準備をして頂きたいのですが、如何でせうか。」

子爵はそれを聞くと急に當惑したやうに、「今夜ですか?」と云つて、稍たぢろ／＼。

佐藤はそれを抑へるやうに、「いや、どうも此邸の都合も伺はずに勝手に取極めてしまつて、甚だ何ですが、しかしもう一刻を争ふ問題だと思ひますので、僕一人でさう極めてしまひましたんですから、どうかお許しが願ひ度いのです。實は何處か他の處でと思つたのですが、何にしろ社員達も僕の説明に依つて、もう一も二もなく貴方の御意見に感激してしまつてをるので、今夕貴方御自身が皆にお逢ひ下すつて、腹藏のない話をなすつて下すつたら、此程有効なことはあるまいと思ひますんです。ですから何うかそのお心算で、今日こそ、貴方も十分肚をお極めになつて頂き度いのです。」と、激勵するやうに云ふ。

子爵はさう云はれると、眉を擡めて、少時の間ちいと深い思ひに暮れてゐたが、やがてさも云ひ憎やうに、

「いや、佐藤さん。貴方にこんなことを云つて、まことに濟まんですが、實は、私、今夜は、據處ない用事があつて、一寸出なけりやならんので、私のこの書齋なり、應接室なり何處でも開放しますから、貴方が座長になつて、どうか一昨日の晩お打合せした條件を中心にして、皆さんと御相談を取極めて下さらんですか。無論私も早く歸れば皆さんにもお目に懸りますが……」と、氣の毒で耐らないやうに云ふ。佐藤はそれを聞くと、ひどく失望して、

「子爵、それでは貴方は今夕はお留守なんですか。そりや困つたですなあ。」と云つたが、やがてひどく

眞面目な顔になつて、「子爵、こんなことを申上げて、甚だ失敬ではありますが、一體貴方は何んですか、急に我々の事業に對して熱がなくなつてしまつたやうにお見受しますのですが、果してそれは僕の誤解でせうか。實は僕一昨日の晩も、さういふ感じを懐かせられたんですが、子爵、貴方御自身ではさうはお考へになりませんか。」と詰るやうな口調になつて云ふ。子爵はその一言で、顔色も神経的に打沈んで、妙に臆病な眼付をしながら顔を伏せてしまつた。彼は何か云はふとして一度は唇を開いたが、そのまゝ意氣地もなく又言葉を呑んでしまふのであつた。

子爵はやがて漸う顔を上げて、強ひてそぐはぬ笑ひを浮かべながら、云ふ可き言葉に窮してゐるやうに「いや、佐藤さん。貴方にさう云はれると、私は甚だ面目次第ありませんが、併し貴方御自身がさう感じられる位なら私も隠してゐても仕様がなから、いつそ率直にお話してしまひませう。」と云つて、居坐ひを直しながら「佐藤さん。私は實は私自身としては別に今度の事業に對して熱がなくなつた譯でも何でもないですが、實を云ふと、私に對するその筋の壓迫が益々甚だしくなつて來たのです。實は貴方にもまだお話する自由をもつては居らんのですが、併し正當な諒解を求める爲めに、私は絶對祕密にして頂くとお説する条件下に、お洩らしするのですが、昨日突然その筋から或人を介して私に恐ろしい嚴命が下つたのです。と云ふのは他でもないですが、もし私が正面から爵位を拜辭する運動を起して、社會の輿論を楯に、今度の「新理想」の事業を起すなら、その筋では斷然たる處置を執つて、私を

再びヨーロッパへ追ふといふのですなあ。私はそれを聞いて、實に横暴な、無意義な干渉だと思つたものですから、いろ／＼反駁もすれば、又辯明もしたのですが、併し向うでは一切それに耳を藉して呉れんです。それといふのもつまり例のブルモン夫人の一件はありますし、それに今度の長山さんの陰謀の飛沫を受けて、私の身邊には聞くも恐ろしいやうな疑惑が置かれてゐるのです。ですから私としては實に意氣地のない話ではあります、實際に於て手も足も出なくなつてしまつたのですよ。」と、絶望的な語調で云ふ。

佐藤もそれを聞くと、稍呆れたやうに、眼をまじ／＼させて、

「ほう、それではとう／＼その筋では鋭鋒を現はして來た譯ですな。實に困つたことになりましたなあ。」と云つて、それでも逸り立つ元氣を見せながら、「併し子爵、我々の「新理想」は決してその筋の疑つてゐるやうな、そんな危険思想を根本の主張にしてゐるのではなくて、寧ろその反對の立場に立つて大いに社會の民心を鼓舞しようとしてゐるのが、何うして彼等に理解されないものでせうか。この間も子爵があれ程微に入り、細に入り、説明されたのに、それが分らんとは何といふ無理解な人達でせう。」

子爵はそれを押へて、

「いや、それが正當に理解される位なら、この日本にはもつと、もつといふ政治が施かれてゐる筈です。唯單に理解如何といふ問題よりも、私の解釋に依ると、政策といふ問題から深い因縁をひいて來てをる

としきや思はれんですから、到底私一個の力位では何うすることも出來んのです。ですから、實は私も決心しまして、今度の事業でも出來ることなら、私は當面に立たんで、總ての物質上の問題などは私が蔭ながら責任を負ふことにして、何事も皆佐藤さん、貴方の御活躍に待つより他はないと思ふのです。貴方なら爵位はなし、それに私のやうに父の代からの政治上の面倒な關係などはなし、眞面目な思想家の一人として、自由に、何等の束縛もなく最初の計畫を遂行することが出來ると思ふんです。それで實は私は、さういふ風にして頂かうと思つて、それを私から云ひ出し度かつたのですが、あんまり自分としても臆病な話なので、實は今迄黙つて居つたのですが……。」と、さも云ひ憎さうに云ふ。

佐藤はさういふ子爵の顔をぢいつと見てゐたが、やがて、

「いや、よく分りました。貴方のお考へは僕にも或點までは理解出來ますが、併し子爵、それだけの理由で、貴方がこの事業の蔭に韜晦なさうといふのは、僕には少し賛成が出來んのです。それではあんまり無意義ぢやありませんか。最初の貴方の御主張から推してゆくと貴方御自身の仰しやるやうに、餘りに臆病ぢやないかと思ふのです。ねえ、子爵、甚だ露骨な云ひ方かも知れませんが、もつと他に重大な理由があつて、それで貴方はさういふ態度におなりになつたんぢやありませんのでせうか。」と、突ツ込むやうに云ふ。

子爵は思はず眼を睜つて、佐藤の顔を見返した。子爵はやがて陰鬱な遺瀨ないやうな調子になつて、

「佐藤さん、貴方は一體どういふ意味で、さういふことを云はれるのですか？」と、相手の胸中を捜るやうに云ふ。佐藤は直情徑行を露骨に見せて、

「子爵、何うせもうこゝまで申上げたんですから、譬へ貴方が御立腹になつても已むを得ません。もう何も彼も申上げてしまひませう。」と云つて、吸ひさしの煙草を灰皿へ突き刺して、

「子爵、僕が申上げる意味はかうなんです。子爵が僅な時間の間に我々の事業に對して少しでも興味を失つておしまひなすつた眞の原因は、貴方御自身のお心持ちの變化にあるんぢやないでせうか。もつと露骨に申すと貴方は最近になつて、戀愛の問題か何かで深い／＼苦悶を経験なすつてゐらつしやる爲めに、もう御自身の前途のことも、將來の事業のことも總て眼中になくなつてしまつたんぢやないでせうか。少くとも僕はさう解釋しなければならぬ事實を或る程度まで僕の手握つてをるのですが……」

と、もう一生懸命になつてゐるやうに、顔色を緊張させて云ふ。

子爵はさう云はれると、頬の色も蒼白になつて、暗い眼付になりながら、思切つたやうに、

「いや、佐藤さん。貴方がそれまでに云はれるのなら、私はその事實も拒否しますまい。まだ私はその事實の爲めに自分の將來を抛つ程昂奮もしてゐなければ、又絶望もしてはゐませんけれど、併し私にとつてはそれが可成重大な問題になつてゐることは私自身も承認してをるのです。」と、重々しく云ふ。佐藤は急に感奮して、

「いや、子爵、よく云つて下さいました。僕は、さういふ風に何事も率直に仰しやつて頂くことが一番貴方を尊敬する道になるのです。僕は實際のことを申すと、もうずつと以前から、その事實に對しては非常に同情ももつてをりました。又危惧の念も懷いてをつたのです。ところが最近になつて、いろいろな噂やら、出来事やらを綜合して考へてみますと、いろんな點で大分切迫して來てゐるのが、僕にも直覺されて來たのです。實は今だから申上げますが、僕は全くのところ昨夜もその事を考へて非常に憂慮してをつたのです。」と、眞實を面に現はしながら云ふ。

子爵も感動して、思はず顔を伏せながら、

「いや、佐藤さん、有難う。貴方のそのお言葉を聞いて、私も慚愧に耐へんのです。貴方のやうな方です。私は今更詳しく説明はしませんが、併し全く私は今或る人生の危機に立つてをると云つても決して過言ではないと信じてをるのです。私は實際に於て過つた道を歩いて來たのです。靈魂の聲が眞實であるといふことを私は餘りに信じ過ぎたために、私は却つて自分を暗い不幸に導いて來てしまつたのです。もう幾ら跪いても問えても私はもう到底救はれることはないのです。私の心の一部に蟠つてをった暗い思想はとう／＼今になつて私の全生を征服してしまつたのです。佐藤さん私はもう自分の運命の總てを自覺してをるのです。ですからどうかその點で私を責めるのは止して貰ひ度いのです。」と、言々血の滲むやうな悲痛な調子で云ふ。佐藤は耐らなくなつたやうに、

「いや、お察しします。僕にはその御苦痛はよく分るのです。倫理的な考察や、或は是非の批判は姑らく措いて僕は貴方がさういふ處まで深入りなすつたことに對しては、衷心から御同情を申してをるのです。貴方はかうやつてお顔を見てをつても、初めて箱根でお目にかゝつた時分とはまるで違つておしまひなさいました。この頃は殊に何だか暗い陰影が始終お眼の中に漂つてゐるやうに思はれて、僕は貴方にお目に懸る度に自分までが苦痛で耐らんのです。」と云つて、彼はもう涙含ましいやうな眼付になつてきた。

子爵は少時すると突然眼を濕ませて、「いや、佐藤さん、もう何うか何も云はないで下さい。私は決してこのまゝ自己の運命を決定してしまふ程の馬鹿ぢやないつもりです。普通の人間が人妻に戀をして、そのまゝ無反省に陥つていくやうな恐ろしい危険には、決して陥ちてはいかんつもりでをるのです。私にはもつと反省もあれば、冷たい理智もあると私は確信してをるのです。ですから何うかこの際、貴方は貴方で事業を起して頂き度いのです。私に代つて、總ての計畫と、作戦を立て、大いに時運に乗じて活躍して頂き度いのです。さうすれば私も、この私も近い將來には何等かの血路を見出して、屹度又貴方と行動を共にする日が来るだらうと思ひます。私の煩悶の日は決してさう長くは續きません。私はそれだけは自分でも深く確信してをるのです。」と、自分で自分にいふやうに云ふ。佐藤は少時の間黙々としてゐたが、やがて熱心の溢れた聲音で、

「子爵、よく云つて下さいました。僕は誰れが何ういふ觀察を下さうと、僕自身としては貴方の冷靜な理智に飽迄も信賴することが出来るのです。ですからお言葉の通りに、僕は今夕此邸のこのお書齋を拜借して、兎に角事業に對する方針をすつかり決定してしまひませう。さうしてせめてそれに依つて僕はどうかして貴方を今の御苦悶からお救ひすることが出来れば、僕としてもこれより幸福なことはないのです。どうか子爵、我々が最初に誓つたあの言葉をもう一度お思ひ返しになつて下さい。僕はそればかりお祈り申してをるのです。」と、心から鞭撻するやうに云ふ。

子爵はさも切なさうに面を伏せて少時の間深く、嗟嘆してゐたが、やがて、
 「佐藤さん、貴方の誠實なお心持ちは有難くお受けします。私が何等かの意味で再び眼覺ることが出来たら、それは屹度貴方のお力だと信ずるやうにし度いと思つてをるのです。」と云つて、今度は獻釈のやうな聲になりながら「佐藤さん、併し貴方だから告白しますが、全く戀愛といふもの程不可思議な魅力を持つてゐるものはありません。私はこの年になるまで唯自分の生活と、野心の爲めに、性の問題などはまるで顧みてをる隙がなかつたのです。處が私は最近の自分の心の經驗に依つて、もうすつかり戀愛の不思議な力が分つてしまつたのです。よく人は戀愛の爲めに自己の生命まで喪つてしまふ愚かさを嘲笑しますが、現在の私には、もうそれさへ否認することが出来なくなつてしまつてをるのです。限られた或境遇にゐる處女でない女に戀をするといふことは、この人生で一番悲惨な、不幸な出来

事であると同時に、又一方から考へると、これ程恐ろしい意義をもつてゐる事實はないと思ふのです。それは確かに罪悪です。併しそれが罪悪であると斷ずる眞の規準を考へてくると、私は何うしてもこの人間の社會が作った總ての範疇を肯定する氣になれんです。夫婦といふ形式の下に結び付いた男と女でも、永久に同じ心持ちで生活していくことが出来ないといふことが事實である以上は、良人ばかりの心の自由を認めて妻の自由を認めないのは何といふ不合理なこととせう。戀愛は絶對です。人間の心の推移は全く自然そのものと同じやうに、決して偽ることの出来ないものです。私はさういふ點から考へて見て、何うしても私の心の動き方を是認しない譯にはいかんです。」と云つて、俄に反省したやうに、「併しそれはそれとして置いて、私は佐藤さん、貴方には是非一言云つて置き度いことがあるのです。戀愛といふものに對して、苦悶を経験してゐるのは私ばかりではなくて、貴方も現在何等かの意味に於てやつぱりその苦悶を経験してゐられるのだらうと信じてゐるのです。佐藤さん、どうかその點に就いて、一言私に云はして頂き度いのです。」と、或狂熱を示しながら云ふ。

子爵は猶も言葉を續けて、

「佐藤さん、もうこれほどお互ひに打明け合つてお話ししたので私にも何うか云はして頂き度いのです。」と云つて、濕んだ眼を睜りながら、「ねえ、貴方、貴方はあの鹽谷の春子さんを何う思つてゐられるのですか。私は貴方があの人に對して、或深い感情を懷いてゐられるものと解釋してゐるのですが

私のその觀察は間違つてゐるでせうか。」と思ひ切つて云ふ。

と、佐藤はその咄嗟可笑しい程頬を紅くして、妙に含羞みながら、

「いや、子爵、それは間違つてゐます。さういふ風に解釋して頂いては、實際困ります。」と慌てゝ云つたが、子爵は眞顔でそれを押へて、

「いや、佐藤さん、今更になつてお隠しになるのは水臭いですよ。私はもう何も彼も知つてゐるのです。」と云つて、まじ／＼しながら、「ねえ、貴方、私は今だから何事も打明てお話ししますが、あの春子さんは貴方も御存じの通り、たしかに私を戀してゐました。自分の口からこんなことを云ふのは、貴方に對しても非常に禮を缺くとは思ひますが、併し、事實は、事實としてお話しして置かなければなりません。その爲めに屹度貴方は、一時御自分を不幸だと思ひになつたことがあるだらうと思ひます。そこで貴方は屹度あの、今貴方のお宅にゐる萩野さんとかいふ人に別な満足を見出さうとなすつたのでせうが、併し私にはそれが残念で耐らんのです。貴方があの萩野といふ人に對して、春子さんに對する心持ちのやうな純眞な、いや、それ以上にもつと純眞な或物をお見出しになつたのなら、もう何も云ふことはありませんが、併しさうでなかつたとしたら、私は決して貴方の取られた道を是認する譯にはいけません。私の考へによると戀愛といふものは、この世の中の如何なるものよりも純眞で、しかも唯一無二のものでなければならぬと思ふのです。その考へが貴方に依つて裏切られるといふことが、私にと

つては何よりも苦痛なのです。」と云ふ。

佐藤はさう云はれると、ひどく不愉快さうな面色になつて、

「子爵、それは全く貴方の誤解です。僕はあの萩野の事をさういふ風に解釋されるのは、僕にとつて一種の侮辱だと考へ度いのです。僕は全くそんな意味であの女を自分の傍に置いてゐるのではないのです。」と云つて、彼は極力その事實を否定したあとで、ひどく昂奮して來ながら、「子爵、貴方がさういふ風に考へてゐられるとすれば、僕も眞實のことを告白させよう。僕は、僕は、今でもあの春子さんに對しては、僕として生れて初めてといつてもいい位な純眞な愛情を捧げてゐるのです。併し僕はさういふ點では卑怯かも知れませんが自己を知るだけの冷靜さをもつてゐるのです。この戀愛が決して幸福に終らないといふことを豫覺した以上は、たとへ僕の心が何う燃えやうとも、その燃える力を自分の仕事の方へ切り換へていき度いといふのが僕の努力でもあり、美德でもあると信じてゐるのです。幸ひにして僕はもうこの頃では、何等かの意味で斷念もつきさうですから、何うか今更その問題に觸れて頂き度くないのです。僕には妹も復活して呉れました。父も歸つて來て呉れました。もう肉親に對する愛情で僕の心は一杯になつてゐるのです。このうへ僕は何を望みませう。はゝゝゝ。」と笑つて、佐藤は何とも云へない寂しい笑ひをその頬に浮べた。子爵は何うしたのか双眼に一杯涙含んで、

「佐藤さん。あの萩野さんのことが私の誤解であつたとすれば、此れより幸福なことはありません。併し

しそれと同時に貴方には、貴方には重大な或使命が新たに負はされて來なけりやならんと思ふのです。佐藤さん、私は、私は、何うあつても、あの春子さんを救つて下さるのは貴方だと思ひます。佐藤さん、貴方は今あの春子さんが落ちていつてゐる恐ろしい境遇を御存じぢやないのでせうなあ。」と力を罩めて云ふ。佐藤もそれを聞くと怪訝さうに眼を輝かして來た。

佐藤はやがて子爵の思ひ懸けない言葉で、肚胸を衝かれたやうに、

「子爵、それではあの、春子さんは今何うしてゐられるのですか。何んでも近いうちに澄子さんも春子さんも大將と御一緒に何處か海岸地方へ引籠られるとかいふ噂は聞いてをりますが……。」と、息を呑みながら訊く。

子爵は異様な感情を眼に輝かして、

「いや、大將が澄子さんを連れて最近房州の船形へ隠退されるといふのは事實ですが、併し春子さんは恐らくは一緒ではあるまいと思ふのです。といふのは、實はまだ祕密になつてゐるのですが、あの春子さんは先頃から家出をして、今では邸にはゐないのですよ。」

佐藤はそれを聞くと、思はず顔色を變へて、

「えッ家出をされた？」と云つたが、やがて傷ましい顔になつて、「いや、僕が妹の病氣や父の歸京で久しく御無沙汰をしてゐる間に、鹽谷さんではそんな意外な事實が起つてをつたんですか。實に驚きま

したなあ。」と眉を擧げる。

子爵は春子が家出をした顛末をその時初めて佐藤にすつかり物語つて聞かせたのであつた。春子が長山邸へ拉し去られてからは、もと子のあるまじい亂行の犠牲になつて、この頃ではさまざまに思まはしい噂が子爵の耳にまで入つてくるので、子爵は實際身を切られるよりも辛い思ひに責められてゐるのであつた。あの春子のことであるから、自發的にさうした淺猿しい社會の汚濁になづんでいくのではないことはよく分つてゐたが、それだけに子爵には猶一層情なくて耐らないのであつた。鹽谷大將や澄子はその爲めにもう二六時中暗い不安と憂慮に掩はれて、今度大將が隱退の機を早めたのも一つにはそれが原因をなしてゐるとさへ云はれてゐるのであつた。

それを聞くと、佐藤はもう口もきけない程感動させられて、少時の間は黙々として腕拱みをしてゐたが、やがてふつと涙を浮べて、

「子爵、僕はそんなことゝは夢にも知りませんでした。實に何うも、何んといふ恐ろしいことでせう。」と云つて、ひどく昂奮して來ながら、「子爵、僕はさうと知つては、もう此儘にして置くことは出来ません。僕は愛情の可能性といふものを何うかして信じませう。あの春子さんをあんな長山家のやうな穢れた空氣の中に置いて、みす／＼悪魔のやうなあのもと子夫人の犠牲にさせてしまつては、僕が神に對して恥ぢなければなりません。それではまるで僕自身が自分の愛情の偽りであつたことを皆さんの前で告

白してゐるのも同じ結果になつてしまひます。僕はそんな卑怯な男ではありません。子爵、ほんといふことを聞かせて下さいました。僕はもう明日から總ゆる手段を盡して春子さんを恐る可き墮落の淵から救ひ出させよう。たとへ僕は自分の戀愛には成功しなくても、男性としての義務が果したいのです。愛情の純眞さと、力量さを僕は切て貴方や大將や澄子さんの前で誇りたいのです。」と、彼は若々しい男兒の熱血に燃えてゐるやうに云ふ。彼の頬は紅く輝き、斷乎とした覺悟はその眉宇にあり／＼と現はれて來た。

二人はそれから先々と春子の事を語合つた。佐藤は時と共に人道的な義務に燃えて譬へ自分は戀愛の勝利者にはなり得なくても、何うかして愛するものゝ、誠實な義務だけは盡したいと云つて、それを子爵に誓つたのであつた。子爵も自分の云つたことが何等の女々しい誤解もなしに佐藤に受け入れられたのをひどく喜んで、今後は更に二人の間により好き理解を持ち合つて、何うかして現在の苦境と危機とを脱し、少しでもお互に幸福になることが出来るやうに最善の力を盡し合はふと堅く／＼誓つたのであつた。

午後の五時になると、佐藤が云つたやうに新理想社の重だつた社員達は四人一緒に誘ひ合はせて子爵邸へ訪ねて來た。子爵は佐藤ともよく談合した後で、彼等を書齋へ通させ、一應皆に引見して、やがて彼は自分で自動車を運轉して何處へともなく飄然と出懸けていつてしまつた。

佐藤達はそれから額を鳩めて新たな「新理想社」の建設に就いて熟議を凝らした。子爵が警へ陰ながらにもせよ十分の責任をもつて起つて呉れるのではあるし、その上物質上の援助も有り餘る程あるので彼等はどう何等の顧慮なしに事業創始の議案を闘はすことが出来たのであつた。

やつと大體の方針が決定して、午後の九時過ぎに佐藤は皆と一緒に子爵邸を辭去したが、子爵はその時になつてもまだ歸邸しなかつた。

十七

房州の船形の停車場から六町ほど離れた海岸の松林の中に、まだ建てゝからさほど年月の経たない一棟の立派な洋風の別荘があつた。それは平家ではあつたが、そこいらにしては珍らしく堂々とした建物で、間敷は六つか、七つしかなかつたが、それでもいかにも様式の氣の利いた、金に飽した普請であつた。丁度そこは海岸から聳えたつた二百尺ばかりの小丘の中腹にあつて、可成手廣くとつた前庭の彼方は斷崖になつてゐて、東京灣の煙波は絶えずその裾を洗つてゐた。そこから見ると、松林を越して向うには三浦半島の青螺も一眸のもとに見渡され、日に幾艘となく出入りする大汽船の姿や、點々たる白帆の影も手にとるやうに指呼された。殊に別荘の建物も、庭もすべて南向になつてゐるので、肅殺とした秋風の身にしむ今日この頃でも日中は家中の窓を開放つて置ける程暖かかつた。夜になると斷崖の裾か

ら濤聲が佗しく通つて来て、咽ぶやうな松籟の音に紛れながら、汽船の汽笛が何とない哀愁を湧かせるのであつた。

その別荘は鹽谷大將の莫逆の友である速水中將の建てたもので、中將の愛嬢が病を養ふ爲に態々そこへ地を相して土工を起し、一昨年の冬、やつと竣成したものであるが、不幸にしてその愛嬢は、この建物が出来上る前に世を早めてしまつたので、それから中將一家の人々も妙に思ひ出が残つてゐるやうな氣がして、却つて別荘へ來るのを厭つてそのまゝ住む人もなく空けてあつたのであつた。中將は公正俱樂部で鹽谷大將と事を共にした關係上、もし大將が隱棲を構へるならこの別荘を提供しようといふので今度大將はそれを借りることになつたのであつた。もし氣に入つたらそつくりそのまゝ讓つて貰ふ考へで、大將は丁度二週間程前に、東京の本邸を引拂つて、殆ど半永住の心算で澄子を連れてこの別荘へ引移つたのであつた。此地へ來て見ると地の利は稍不便であつたが、併し氣候はよし、それに家の中の設備も何ひとつ間然する處がないので、大將もすつかり氣に入つてひどく喜んでゐるのであつた。東京の本邸からは小間使が二人と、それに下働きの婢が二人、料理が一人、書生が一人、それだけの人数がやつて來て萬事を取仕切つたのであつた。

大將は午過ぎになると、きまつて日課のやうに別荘の附近を散歩して歩いた。その日も彼は澄子たつた一人を連れて、海岸から松林の方を散歩して、もう三時頃になつて、不自由な足を引摺りながらやつ

と別荘へ歸つて來たのであつた。

大將は別荘へ上るなだらかな坂路へかゝると、十歩上つては立止まり、また十歩上つてはひと休みといふ風にしながら松林の中を上つていつたが、上をみあげて、

「なあ、澄子。どうもこの坂だけが難儀ぢやなあ。これがないと申分はないのだが……」と、笑ひながら云ふ。彼は僅の間に、健康が滅切衰へたとみえて、顔の色光澤も悪く、眼の色にも力がなかつた。政治上の大任を了へて閑地に就いたといふよりも、矢盡き、劍折れてしまつた敗軍の將のやうに、何處か果敢ない勢ひのなさをを見せてゐた。

澄子も力なく喘ぎながら、

「ほんとにさうでございますのねえ。お御足さへお達者なら何ですけれど……」と、父親の足を傷はしさに見ながら言葉少に云ふ。彼女も以前とは見違へるほど面糞れがして、眼ばかりが異様な熱を帯びてゐるやうにみえ、ひと目見ても、彼女は胸の中に激しい精神的な苦悶を包んでゐるのがまざざと看取されるのであつた。

直ぐうへの松の繁みの間からは、純白な窓枠をもつた薄鼠色の建物と、燃えるやうな赤瓦がちらちらと隠見して、自然石を積んだ瀟洒な門がやがて坂の頂きに現はれて來た。

大將はやつとのこととでその門を入ると、そこから庭へ通ふ木戸から別荘の芝庭へ入つて、角のベエエ

ンダへ上つた。そこには二三の盆栽と三脚の籐椅子が置いてあつて、温かい海の風が潮の香を含んで颯々と吹いて通つた。大將はさも草臥れたやうに、どつかと籐椅子に腰を下ろして、

「なあ、澄子。お前氣の毒だが、靜にさういうて、葉巻と紅茶をもつて來させて呉れんか。」と云ふ。澄子は合點いて、

「畏りました。どうか少々お待ち遊ばして……」と云つて、そのまゝ碇子戸を開けて、奥へ入つていつた。

大將は椅子の椅背へ脊中を伸ばしながら幾度か深い息を吸入して、靜かに沈みかけてゆく夕陽をぢいツと眺めてゐた。もう三浦三崎の山々は蒼茫と紫色に煙つて、一望の海面には白鳥の群のやうに白帆が點々と動いて、眞紅な夕陽は赫と一條の金蛇を躍らせてゐた。

澄子は少時すると、自分で葉巻の入つた銀製の箱を持つて出て來ながら、

「ねえ、お父様、お煙草は私がつて参りました。」と云つて、それを籐製の小卓のうへに置いて、「ねえ、お父様。少し風が強くて當り過ぎや致しますまいか。此方だけ碇子戸を閉めませうか。」と、いたはるやうに云ふ。大將も合點いて、

「さうだなあ。夕方になると、いくら此地でも風が冷えてくるなあ。」

澄子はやがて側の碇子戸を閉めて、自分も別の碇椅子へいつて、力なく腰を下ろしながら、「お父様。

もう今日もこれで日が暮れてしまひますのねえ。」と、嘆息を吐くやうに云ふ。
大將も頼りなげに葉巻に火をつけながら、

「いや、全くかういふ生活をしてをると、一日といふものは實に長いもんぢやなあ。」と云つて、聲を落しながら、「なあ、澄子。お前もさぞ寂しいぢやらうなあ。」と云ふ。澄子は眼を落して、

「あの、そりや寂しいと思へば寂しうございますけれど、でもかうやつてをりましたら、今に馴れてしまふだらうと思ひますわ。」

「ふむ、馴れるか。」と、大將は眼を瞬きながら呟やいて、「併しせめてかうなると、東京から誰れか客でも来て呉れるといふなあ。私は何よりも今迄よく逢つてをつた人達の顔を見ることが出来るのが、實に寂しいのぢや。」

澄子はふつと眼をあげて、

「ねえ、お父様。それはさうとこの間春子にやりました手紙の返事が、もう參つてもよろしい時分でございますわねえ。やつぱりあゝ申してやりましても、駄目なのでございませうか。」

大將は葉巻の煙の行方を見送りながら、

「いや、澄子、もうその話は止めにして呉れ。私は、もう何をしても駄目だと思ふんだ。もしあれに良心があるならば、もういゝ加減に眼が覺めてえゝ頃ぢや。此方から手紙をやらんでも彼方から寄越すの

が當然ぢや。私達が此地へ引移つたことは、もう三度も報らせてあるのぢやもの。」

澄子はもう涙含んで、少時の間は悲しさうに眼瞬きばかりしてゐたが、やがて消え入るやうな聲で、「ほんとに何うしたといふんでございませうねえ。あの春子ばかりは私、もう少し綺麗な心をもつてゐて呉れるかと思つてをりましたのに、何うしてまアあんな風に變つてしまひましたんでございませう。私、いろんな忌な噂を聞く度に、もうほんとに私までが死に度くなつてしまひますわ。せめてお父様のことだけでも思ひ出して呉れましたらねえ。」その聲はやがて涙に打濕めつて來た。

大將は澄子の横顔をさもいたはしさうに見遣りながら、

「澄子、もう何も云うて呉れるな。私は春子のことを思ひ出すと、もうこの胸が一杯になつて來るのぢや何も彼もちやんと筋道が分つてをるだけに、私はもう自分としては何も云ふことはないのぢや。かうなつては唯何事も斷念さへすればそれでえゝのぢや。それでなくても、彼女はもう當然近いうちに私の手許を離れて他家へ縁づいて行かなけりやならん身のうへなのぢやもの。」と、涙含ましい聲で云つて、「澄子、それよりも佐藤は何うしてをるだらうなあ。ついでこの間の手紙には大變昂奮して、いろいろなことが書いてあつたが、彼も考へて見ると、ほんとに純良な、竹を割つたやうなえゝ男だ。私は何だかこの頃非常にあの男が懐かしくてならんだ。心から信頼が出来るやうな氣がして、私は逢ひたくて耐らんのだ。」と、感傷的な心持ちをみせながらいふ。澄子もやつと涙を押へて、

「ほんとでございますわねえ。私もこの頃になつて、やつとあの方のほんたうの價値が分つて来たやうな心持ちが致しますわ。男らしい、さつぱりしたあの方の御氣性が私、ほんとに好きになりましたの。あの方はそれこそ心の底の底からあの春子のことを思つてゐて下さるんでございますわ。それを考へますと、私、もし春子の地位にをりましたら、勿體ないやうな氣持ちがするだらうと思ひますわ。」

大將も髯を撫でながら、
 「併し、彼も、今度は中將が此地へ歸つて来たのだから、生活のことなどで、さぞ心を勞してをるだらう。あの男位眞實な意味で幸福といふことを考へてをる人間はないのだからなあ。まあ幸ひにして「新理想」の方も何うやら計畫の目鼻がついたとかいふ話だから、私は何よりぢやと思つてをるのぢや。今度の仕事こそ彼にとつては畢生の大事業だからなあ。」と云つて、又葉巻の煙をふうつと吐き出す。

さうしてゐるところへ、向うの廊下から、忽如人の足音がして、やがて小間使のお靜がヴェランダへ下りる扉口から顔だけ出して、丁寧に辭儀をしながら、

「あの、御前、唯今東京から佐藤様がおみえになりましたが、此方へお通し申しまして宜しうございませうか。」と、つゝましまやかに云ふ。大將はそれを聞くと、怪乎としたやうに俄かに椅子から腰を浮かして、

「なに、佐藤が来た？ それは珍らしい。直に此方へ通して呉れ。」と、さも嬉しさに云ふ。

お靜は一禮して、又玄關の方へ歸つて行つたが、大將は椅子の向きを直して、

「澄子。噂をすれば影ぢやなあ。はゝゝゝ。併しいゝ處へ来て呉れた。なあ澄子、どうせ今夜は此方へ泊るぢやらうから、お前、向うへいつて萬事よろしく頼むぞ。さうして直ぐに風呂をたてゝなあ。」といぢらしいほいそゝしだす。

澄子も思ひ懸けない人の訪問ですつかり氣分が變つたやうに、そのまゝ小走りに向うへ入つていつてしまつた。

やがて間もなく廊下の方からお靜に案内されて、足音が此方へ近づいて来た。と見ると、それは佐藤輝一と思ひの他、父親の佐藤中將であつた。彼は無雑作な木綿の單衣を着て、古びた袴を穿いて、まるで村夫子のやうな見窄らしい風姿をしてゐた。

大將はそれを見ると二度吃驚して、「お、佐藤さん！」と云つたきり、椅子から立ち上つて、ぢいツと凝視した。久造も瘦せた頬に溢れるやうな笑ひをみせながら、さも懐かしさに、

「やあ……。」と、大きな聲で云つて、つか／＼ヴェランダへ下りて来た。
 大將はヴェランダへ下りて来る佐藤中將を迎へて、もう嬉しくて耐らないやうに満面に笑みを湛へながら、

「やあ、佐藤さん、ほんとに久濶ぢやつたなあ。はゝゝゝ。お變りがなくて何よりぢや。さあ、何う

かこゝへ懸けて下さい。』

久造は無雑作な挨拶を返して、すゝめられるまゝに大將の向うの籐椅子へ腰を下ろしながら、
「やあ、どうもほんとに久潤でした。どうもいつも御無沙汰ばかりしてをつて。はゝゝゝゝ。」と大きく
笑つて、

「實は此地へ歸つて來ると直ぐに一度お禮やら何やらでお訪ねせんけりやならんと思つてをつて、つひ
どうも出億劫だもんですから、失禮ばかりしました。」と云つて、ぢいツと大將の顔を見ながら、「併し
かうしてお目に懸つて見ると、思つたよりも貴方は老けられたですなあ。確か御健康もよくないとかい
ふお話であつたが、此方へおいでになつてから如何ですか。少しはお加減がえゝですか。」と、氣遣はし
さうに訊く。大將は頬を撫でながら、

「いや、有難う。もう私もいよゝ年だよ。どうせこんな風では長生きは出來んと思つてをるが、併し
せて息の通うてをる間は、少しでも健康でゐたいと思ふもんぢやからな。はゝゝゝゝ。」と、力めて快
潤に笑つて、「併し貴方は私と違つて、大層元氣のやうぢやなあ。あの時分より瘦せては見えるが、併し
却つて筋肉が緊つて、元氣さうぢやないですか。」と云ふ。久造は袂から朝日の袋を取出しながら、
「いや、私も御同様に、もうかう年を老つては駄目ですよ。佐世保から歸つて來てからは眼に見えるや
うに元氣はついて來たですが、それにしてもとても昔のやうな譯にはいかんですよ。はゝゝゝゝ。」と云

つて煙草に火をつけながら、「併しまあ、かうやつて息のあるうちにお目にかゝれて私も非常に嬉しいで
す。もうお別れしてから六年の餘になるですからなあ。」

大將も感慨深さうな顔になつて、

「さう、六年になるなあ。考へてみれば早いもんぢや。貴方もさぞ苦しかつたであらう。私は時々貴方
の事を思ひ出しては、一人でいろんなことを考へてをつたが、いかに廻り合せが悪かつたと云ひ條、ほ
んとに詰らん経験であつたなあ。はゝゝゝゝ。」

久造は一寸眉を慄はして、「いや、どうかもうそれは仰しやらんで下さい。この六年の間の月日は私に
とつて決して無駄ではなかつたですよ。私はその試練に依つて、全く生れ變ることが出來たのですか
ら。」と云つて、態と話題を轉するやうに、「鹽谷さん、それはさうと又留守の間は輝一が大變にお世話
になつて、私は何んとお禮を致したらええかと思つてをるのですよ。何から何迄御厄介をかけて、ほん
たうに有難かつたです。」と云ふ。大將は笑つて、

「いや、そのお禮では却つて痛み入るですよ。併しまあ、幸ひにして貴方も無事に歸つて來られたし、
これからは貴方の家には大きな幸福が來るのぢや、輝一君も今迄長い間随分苦しい日を送りつゞけて來
たのぢやから、これからはあらゆる意味の幸福を樂しんでえゝのぢや。はゝゝゝゝ。」と寂しく笑つ
て、彼は又海の方へ眼を遣つた。

久造は煙草の煙をぶかり／＼吐きながら、大將の横顔に見入つてゐたが、その眼には健康の衰へ果た
大將をいとほしむ感情が明らかにみえてゐた。六年の長い月日はかうまでに人を變らせてしまふものか
とその眼が悲しげに云つてゐた。

久造は少時すると氣を變へて、四邊を見廻しながら、

「鹽谷さん。この別荘は速水のごやとかいふ話ですが、あの男にしては又大層ハイカラな立派なものを
建てたもんですな。速水は私とは最初の踏み出しから歩んでゆく道が違つてをつたが、併しかうなつて
みるとやつぱりあの男の方が世渡りの上では成功したことになるすな。はゝゝゝゝ。私などはも
う住む家もない。僅に息子に頼つて、これからの餘生を寂しく送つていかんけりやなんのですから、
かういふ豪華な生活を見るにつけても、何んだか今昔の感に耐へんすよ。」と云ふ。大將もヴェランダ
の中を見廻して、うすく笑ひながら、

「いや、そのお言葉を聞いて、私などもやつぱり恐縮しなけりやなん側の人間です。私も何んだか
この頃になつて、もう總てが無意義になつてしまつて、生活とか、過去の閱歴とかいふものが何から何
まで呪ふ可きものゝやうな氣がしてならんすよ。私はその點ではもう一から十まで輝一君達の主張す
る哲理に推服してをるのぢや、實にあゝいふ新時代の人間は我々よりも遙に勝れた頭腦を持つて居る。
私はそれが羨ましくて耐らんぢや。それだけに私はもう自分達が時代から遅れてしまつた事を痛切に

感じるのですよ。」と、沈痛な顔になつて云ふ。久造も合點いて、

「いや、貴方などはその點ではまだえゝです。つい昨日まで大きな政治上の功業をたて、少くとも
國家社會の進運に參與してをられたのですから、まだ瞑するに足るものがあるですが、私を御覽なさ
い。牢獄の中で暮らした六年の間はまるで盪けらが穴の中に籠つて春の光を待つてゐるよりもつと慘
めな目を見てをつたんですからなあ。社會にどんな大きな出來事が起つても、亦、どんな大きな思潮の
變動があつても、それは冷たい壁の中へは聞えても來んのですからなあ。私は自分が過去五十幾年の間
營々として築きあげて來たものを、一時に失つてしまつたも同様で、往時夢の如しといふよりも、一度
死んで再び又この世の中へ生れ出て來たやうな頼りなさをこの胸の底の底から感じてをるんですもの。
何が寂しいと云うて、こんな寂しい心境が又とあるであらうかと、私は思つてをるのです。」と云つて、
煙草の吸殻を灰皿へ捨てながら「併し鹽谷さん、もうお互にその事は話さんことにしようぢやありませんか。
失禮ながら貴方ももう社會の大きな渦から落伍されてしまつたのです。私に至つては、もう既に
個人として生存の能力さへ奪はれてしまつた憐な廢人も同様です。結局かうなつて見ると、又これで人
生といふものゝ眞實も見えるし、又社會の大きな推移や歸向も自から達觀することが出来るぢやらうと
思ふのです。まあ、それをせめてもの慰めに、靜かに生命の燃え盡きていくのを待つより他はないです
なあ。はゝゝゝゝ。」と、寂しい聲をたてゝ笑ふ、

大將はその言葉を味はふやうに、ぢいツと瞑目して身動きもしなかつたが、やがて静かに口を切つて、
 「いや、貴方の言はれる通りぢや。我々はもうさうするより他に仕様がなないのぢやからなあ。時代は大きな波を打つて先へ先へと進んでゆく。狂瀾怒濤にも比す可き思想の變動はいつの間にかもう我々を取残して、はるか彼方の岸へいつて轟々と立騒いでをる。それと同時に我々の背後には暗い死の闇がもう刻々に迫つて来てをるのぢやからなあ。我々は何等かの信仰なり断念なりをもつて、その恐ろしい時を待つてゐなければならんのだ。實に人間の一生といふものは果敢ないものぢや。私達のやうに匆々として生きて来たものは、墓石の前に立つて、初めて何んの爲めに生き、何んの爲めに死ぬるか、といふ疑ひに逢着せんけりやならんぢやからなあ。」さういふ大將の眼には一種の恐怖に似た感情さへ閃めいてゐるのであつた。

久造はそれを聞くと、深い嘆息を吐きながら大將の顔を凝視して、

「鹽谷さん、貴方のやうな方でも矢張りそんなことをお考へになるのですか。生涯の間、總てが意の儘になつて、國家の元勳として榮位榮爵は授けられる、社會民衆の尊崇は一身に集められる。その上又どんな豪華な生活をしても悠々と老後を楽しめるだけの家産も持つてをられる。普通一般の人間から考へると、最も光榮ある末路と云うてもええやうな地位にゐられても、矢張り貴方はこの人生を果敢ないものだとお考へになるのですか。」と、考へ深い調子で云ふ。

大將は自ら恥ぢるやうな苦笑ひを洩らして、

「いや、佐藤さん、人間は一度死といふ事實に直面すると、もう此世に初めて呱呱の聲を揚げた赤兒の昔と同じになつてしまふのぢやなからうか。榮位榮爵もなければ、權勢もない。富もない。唯もう總ゆるものが、無價値に、無意義になつてしまふのぢや。貧しい者も、富める者も、賢い者も、強い者も皆一様に冷たい、暗い大地の底へ埋められてしまはんけりやならんのだ。そこには何等の差別もなければ特殊な救ひの光も射しては來んのだ。それを思ふと、私は息が塞るやうな氣がして來る。もう神でもええ、佛でもええ。科學でも哲學でも何んでもええから、唯人生といふものゝ眞實の意義を語つて呉れるものがありさへすれば、それで私は救はれるのぢや。」と、熱意の溢れた焦悶しさうな聲で云つたが、やがて不意に狂ほしげに笑ひ出して「はゝゝゝ。まあええ、もうさう云ふことを考へ初めると限りがないから、佐藤さん、そんな恐ろしい話は止めにして、せめて子供達のことでも話さうぢやないか。我々の持つてをる最後のものは子供ぢやからなあ。はゝゝゝ。」と、獻釈するやうな聲音で云ふ。
 久造は自分も何か深い感銘に打たれたやうに堅く腕拱みをしたまゝ、更に深い沈思に落ちていつてしまつた。

と、見ると、もう夕陽はいつかしら三浦半島の翠巒の彼方へ半ば没しかゝつてゐた。帯のやうに長く西空に低迷した夕雲の群はその反映を受けて、まるで魔神の巨大な渦の中に蕩めく鐵火のやうに炎々と

燃え熾つてゐる。鏡のやうな海面にもその雲の影は落ちて、空も水も一様に恐ろしい猛火となつて世界創造の日の幻夢を再現するかと思はれるばかりの壮大な光景を呈して來た。ヴェランダの中にもその餘光が赫と射し渡つて來たので、大將も久造も我にもなく眼を上げて海の方を眺め遣つた。夕陽の色は老たる二人の大提督の白髪を染めて、彼等の人間としての勳功や長い閱歷を飾る最後の光榮の王冠の如くに赫耀として輝き渡つたが、少時すると、その光の蔭には、やがて落日が忍び音に歌ふ悲しい輓歌の聲がそれとなく響いて來るやうに思はれるのであつた。

二人は互ひに黙々として顔を見合はせた。

「あゝもう日が暮れるなあ。」と云ふ、一語は互ひの唇が語るよりも猶一層慘ましい意味をもつて二人の胸に刻まれてくるのであつた。

夕雲の影はやがて刻一刻に色褪せてゆく。猛火の色から漸次と灰ばんだ赭色に變つて、それが今度は冷たい茜色に沈んでゆくと、海面は俄に暗く、寂しく暮れかゝつて、遠い沖の彼方からは蒼茫とした涙ぐましい程感傷的な黄昏の薄明が空の一部を引包んで來る。その薄明の中には海の鳥の白い翼が點々と浮き出してきて、或るものは高く、或るものは低く、悲しい聲で啼き交はしながら、何處へともなく、眼も遙な水天彷彿の境へ翔り去つてゆくのであつた。

久造はその光景を飽かず眺めてゐたが、やがて何うしたのか、何か奇蹟でも見たやうに大きく眼を睜

つて、「お、鹽谷さん、あれ、あれ、あれを御覽なさい。あれを。」と叫びながら、はるかな沖合を指さす。大將もその聲に驚かされて、力なく上半身を起しながら、沖の方へ眼を遣つた。

丁度その時、西岬から一里ばかりの沖合に當つて、いつの間に現はれたのか、超弩級型の偉大なる艦が約四隻ほど單縦陣をつくつて、兩側に驅逐艦隊を率ゐながら舳艫相衝んで堂々と航進して來た。黒煙は眞暗に空を壓し、衝角によつて蹴られる海波は奔馬のやうに洶湧して、いかにも國家的感激を強るやうな勇壯な姿をしながら急速力で此方へ向つて入つて來た。薄暮の海上に動いてくるその巨怪は、自然を壓し、昏黄が奏でる微妙な頌歌を嘲笑ふやうな威容を示して、みる／＼うちに鏡ヶ浦の沖合へ殺到してくる。

大將はそれを見ると、突如椅子から腰を浮かして、

「お、第一艦隊が愈々歸つて來たな。もう十日程前に土佐沖の大演習へ参加するといふので、一晚館山灣へ假泊して、その翌朝夜の引明け方に勇ましい汽笛を鳴らして出港していつたが、いや、無事で歸つて來たなあ。はゝゝゝ。」と笑つて、まるで自分の愛兒でも迎へるやうに、

「お、旗艦は陸奥ぢや。司令の宮殿下が乗つて居られると見えて、皇族旗を掲揚して居るぢやないか。ほ、二番艦は金剛ぢや。その次が長門か。實にかうして見ると勇壯ぢやなあ。」と、思はず言葉が迸り出るやうに云ふ。久造も耐らなくなつたやうに、窓のところへ伸び上つて、

「鹽谷さん、それではあれが陸奥ですか。いや、實に見事な鑑ですなあ。うむ、立派だ。いゝ速力だ。」と、夢中になつて云ひながら、「併しかうして見ると、私が入獄する前とはまるで艦型から何から變つてしまつてをるですなあ。鹽谷さん。こんなのが一艘でもあつたらあの日本海海戦の時にはなあ。」と、大將の方を顧みながら、さも感激したやうに云ふ。

大將は涙含ましいやうな顔になつて、

「佐藤さん、お互ひにくら年は老つても、あの時のことだけは忘れられんな。あの海戦は實にすばらしかつた。恐らく我々の一生涯の中に、あれほどの大海戦はもう到底二度と再び來んと思ふ。今でも私は丁度今日のやうな日の入方に隱岐の島の近くまで敵艦を追撃していつたあの時のことは何うしても忘れられんのぢや。實に世界絶滅の日のやうな凄じい光景であつたなあ。」と異常な感慨に熱した語調で云ふ。佐藤も軍人らしい直立不動の姿勢になつて、

「いや、もうあれが恐らく人類の悲惨な戦争の最後の記録になるでせう。今度の世界戦争でも屹度あれ程慘澹たる海戦は演じられなかつたに相違ないですよ。不完全な武器をもつて闘ふ戦ひは、唯無暗に恐ろしい犠牲をつくるばかりでしたからなあ。あの時に戦死した同僚のことを思ふと、私は今でもひと晩眠れんやうなことがあるですよ。殊に私は監獄に居る間は、あの血腥い海戦の追憶にばかり悩まされて居つたです。軍人以外の人間には到底あゝいふ恐ろしい経験は味はひ度くも味はへんですからなあ。」

と、肩を聳やかしながら云ふ。

大將は嘆息を吐いて、

「いや、私とて御同様だ。私は併しそこに絶えず疑問をもつてをるぢや。我々が血をもつて國家に奉仕して來たその功業が、時勢の進展と共に、何等の意味もないものになつてしまふ時代が來ようとは、我々は夢にも想像せんかつたからなあ。佐藤さん、まあ、見て御覽。あの偉大なる艦隊もいづれは空しく解體されて、再びもとの鐵塊となつてしまふ時が來るのぢや。それは決して夢ではないのぢや。全く歴史ほど恐ろしいものはないと同時に、時勢の推移はその歴史までも刻々に變化させてゆくのぢやからなあ。」

久造は兩腕を拱んで、投出すやうに、

「いや、もう私等には何も分らんですよ。唯時をして行くがまゝに行かしかめよです。人も國家もこの世界も、唯幻から幻へ動いてゆく單なる現象ぢやと思つて居れば斷念もつくのです。馬鹿々々しいと思へばこれほど馬鹿々々しい夢はないですなあ。はゝゝゝゝゝ。」久造は態と大きな聲をたて、笑つた。

さうしてゐるうちに、大艦隊は鏡ヶ浦の沖合から今度は稍西北へ向つて針路を轉換して、そのまゝ横須賀の軍港へ入港していくのか、眞一文字に船形の岬を掠めて、又いつともなく一隻づつ宵闇の海上へ姿を消してしまつた。あとには黒烟が幾條となく空に残つて、夕陽の殘紅をひと際ほの明るく描き出

す滯が海面に果敢なく漂ふばかり、海には夜の暗がそれと一緒にとつぷりと落ちて来た。はるか沖合に海堡の燈臺が心細げに明滅したす頃には、もう見渡す限りそこいらは一色の闇に閉ざされて、斷崖の裾に碎ける波の音が嘆くやうに悲しく聞えて来た。

大將と久造は又椅子に腰を下ろして、少時の間は黙々として煙草ばかり吸つてゐたが、そこへひよつくら澄子が出て来て、

「あら、お父様、お燈りもお點け遊ばさないで、何う遊ばしましたんでございますの。」と云つて、「あの、まだお夕飯のお支度が出来るまでには一寸間がございませうけれど、どうか此方へお入り遊ばしてお紅茶でも召上つて下さいませう。」

大將はそれを聞くと、待ち兼ねてゐたやうに、椅子から立上つて、

「いや、澄子、もうお前が来て呉れるだらうと思つて、待つてをつたんだらう。さ、佐藤さん。まあ、どうか此方へ来て下さい。」と云つて、そこから廊下傳ひに客間の方へ久造を案内してゆく。久造は澄子の方へ歩み寄りながら、

「やあ、澄子さんか。ほんとに久潤でしたのう？」と云ふ。澄子も薄暗い中で丁寧に挨拶をして、

「あら、小父様、私、あの、先程から一寸御挨拶に出ようと思つてをりましたんでございますけれど、臺所の方がごたくしてをりましたんで、ほんとに失禮を致してしまいました。まあ、何より御無事で

お歸り遊ばして、ほんとに私共までが嬉しうございますわ。」と、感情をこめて云ふ。久造はやさしい調子で、

「いや、有難う。私もこんな身體になつてしまつて、貴女がたには會はず顔もないが、併し皆さんもお達者で何よりぢや。は、は、は。」

やがて大將と久造は明るい電燈の點つた應接室風の廣間へ入つて、そこで卓布の眞新らしい卓の前で打寛ぎながら、少時の間澄子を相手に懐かしい昔話などをした。

澄子は昔を思ひ出してゐるやうにいろ／＼と受け答へをしてゐたが、やがて、

「ねえ、小父様。今日は何うして輝一様やふち子様を御一緒に連れ遊ばしませんでしたの。實は先程も、東京から佐藤様がお越しだと申して参りましたんで、きつと輝一様だらうと存じましてねえ。父も大喜びだつたんでございますよ。ほ、ほ、ほ。」と、力めて快潤に座を浮かせやうとする。久造も笑つて、

「いや、私もさう思はんでなかつたのですが、實は一寸その譯がありましたなあ。ほ、ほ、ほ。それに輝一も今度雑誌社の建物もいよく借込みましたし、それに印刷所の方の交渉やら、原稿の依頼やらで、もう朝から晩まで獨樂のやうに働き廻つてをるので、少しも隙といふものがないのですよ。それで此方へもきつと御無沙汰をしてをるだらうと思ふですが、どうか不悪許してやつて下さい。は、は、は。」

澄子も雑誌の方の事業が愈々緒に就いたことを心から祝つたりして、いかに面白さうに話してゐた

が、やがて又夕飯の支度があるからと云つて、氣忙はしさうに臺所の方へ出ていつてしまつた。大將と久造はまたたつた二人きりになつてしまつた。

久造は大將とたつた二人にはとうまさうに紅茶を飲みながら急にしんみりした顔になつて、

「鹽谷さん。いや、私も噂にな聞いてをりましたが、澄子さんももうすつかり夫人になつてしまはれたですな。佐世保時代によく貴方の膝のうへで遊んでをられた頃のことを思ふと、まるで嘘のやうですな。はゝゝゝ。」と笑ふ。大將も笑つて、

「いや、どうも自分達の年を老つていくのは分らんが、子供達は一才見んうちに直ぐ育つてしまふもんぢやなあ。貴方の處の輝一君だつて、中學時代のことを思ふと、可笑しいやうな氣がするからなあ。はゝゝゝ。」と笑つて、葉巻に火を點けながら、「併しそれにしても、かう年を老つて見ると、何よりも一番子供達が頼りになるですなあ。私はこの頃ではもう子供の愛より他には、何も認めることが出来んやうな氣がするですよ。もし今澄子がゐてくれなかつたら、私は到底寂しくて生きてはをれんと思ふのです。」と、もう恥も外聞もなくなつたやうな顔をしながらか云ふ。久造も眼を据ゑて、

「いや、お察し申します。その點に於ては、私も全く御同感ですよ。」と云つて、さも云ひ憎さうに、「いや、こんなことを云うては甚だ失禮ぢやが、それにつけてもお妹さんの春子さんは何うしたもんでせうなあ。春子さんのことに就いては、私も輝一からすつかり話を聞きましたよ。私も入獄中であつたの

で、貴方の奥さんのことも今度初めて耳にするやうな次第で、實にもう局外者でゐながら、あの長山一家のものゝ惡辣極まる遣方には憤慨に耐へんかつたですよ。春子さんも聞けばその犠牲になつて、彼方の家へ拉せられていつてしまはれたのださうですが、これは私が考へても貴方にとつては確かに致命的な痛手に相違ないと思ふのですよ。」と、同情に充ちた調子で云ふ。

大將はもう譯もなく悲しげな眼色になつて、

「いや、お察しの通りぢや。私は何が辛いと云うて、今になつてあの春子を仇敵にも等しい長山の家へ奪ひ去られたのが、眞實のところ口惜しくて耐らんのですよ。併しいくら口惜しく思つても、肝腎の本人がもうその心になつてしまつてを何うすることも出来ないので、實は私も何うかしてもう諦めてしまはふと思つてをるのぢやが、そこがやつぱり凡夫の淺猿しさでなあ。死んだ子の年を數へると云ふことをよく世間でいふが、併し此方は生きてをるだけに猶ほ斷念めきれんでなあ。はゝゝゝ。」

久造はその顔が見てゐられないやうに眼を逸らして、

「いや、御尤もぢや、御尤もですとも。」と云つて、何か深い思惑があるやうに、「いや、實は今日私がかうしてお邪魔に出たのも、旁その事で少しお願ひがあつて伺つたのですが。うむ、これは久の口からは一寸申し憎いことぢやが、實はその、息子の輝一のこととしてのう。輝一の云ふにはもう何事も大將や澄子さんは皆御存じに相違ないから、どうかひとつお父さんから打割つてお願ひしてみても呉れま

せんかと云ふので、私もまあ厚顔しい顔をして伺つたのですが、はゝゝゝゝ。」と、てれたやうに笑ふ。大將は葉巻を口に銜へたまゝ黙然として床を見詰めてゐたが、やがて彼の方から口を切つて、「いや、佐藤さん。もうそのお話なら伺はんでも分つてをる。つまりあの輝一君は春子を妻に貰ひ度いといはれるのぢやらう。そのことなら私にはもう疾うから分つてをったのですよ。」と云つて、それなり口を噤んでしまつた。

久造は先を越されたので、きよとりとした顔で唯困つたやうににや笑つてゐた。子を思ふ親の純真な心持ちはその眼にはつきりと現はれてゐるのであつた。

久造はやがて又氣の毒さうに大將の顔を見て、

「いや、鹽谷さん。輝一も實は貴方のお家とはまるで身分も違ふし、それに春子さんとしても今世に時めく貴方の愛嬢であるから、どんな権門豪族のところへでも嫁いでいかれるお身のうへでもあるしするので、いろ／＼に思ひ諦めようとして随分苦悶もして來たらしいのですが、やつぱり一途な若氣でしてのう。私もこの頃ではあんまり煩悶してをるのでどう／＼見るに見兼ねて、まあかうして恥を忍んでお願ひに伺つたやうな譯なのですが、……」

大將はそれを皆迄云はせずに、

「まあ、佐藤さん、どうかそんな家の地位や境遇のことは云はんで下さい。私はもう昔からそんな卑し

い野心は毛頭持つてをらんかつた。それに第一貴方と私の仲ぢやないか。貴方は不幸にして中途で蹉跌はしたが、併し貴方と私は今でも決してそんな身分が何うのかうのといふやうな水臭い仲ではないと思ふ。もし輝一君が貰つて呉れると云ふのなら私は、喜んであの春子を差上げよう。唯併し此處で困るのは、あの春子がもう私の自由にならん處へ行つてしまつてをることぢや。私も實はもうずつと以前から輝一君の心を察して、何うかして春子の心がさう傾いてくれればええがと思つて蔭ながらそれを祈つてをったのぢや。だからもし輝一君が何うかしてあの春子を今の境遇から救ひ出して、彼女の心を輝一君のものにしてくれれば、この私にとつてもこの上の幸福はないのぢや。なあ佐藤さん。それだからもうこの問題は常人同士の考へに任せた方がえゝぢやないですか。」と、さつぱり打明けて云ふ。

久造はその言葉でひどく感激して眼を濕ませながら、

「いや、鹽谷さん、私は感謝します。よう云うて下すつた。こんな刑餘の私を少しも蔑まずによく貴方は云うて下すつた。そのお言葉を聞いたら輝一は何と云うて喜ぶでせう。」と云つて、眼を瞬きながら「實は、それに就いて輝一も今大に心を悩ましてをるのです。輝一は蘭部子爵に非常に激勵されたとか云うて、今實は何うかしてあの春子さんを長山の家から救ひ出す方法を考へてをるのです。もし夫が成功したら、一旦貴方のお側へ春子さんをお連れ申して、その後で自分の存念をすつかり、貴方に打明けてお話しすると云うてをるのですが、何うか若しその時になつて春子さんが幸ひにして息子さんの心を受入

れて下さるやうでしたら、どうか鹽谷さん、貴方も今仰しやつたことを必ず履行して頂き度いのです。さうすれば息子の一生はどんなに幸福になるか知れんのですから。」

大將は深く合點いて、

「いや、そりや云ふ迄もないことぢや。彼女を長山の家から再び私の手へ返して下さるだけでも、私は大いに輝一君に感謝しなかりやならんのですからなあ。」と云つて、ふつと何か思ひ出したやうに、「併し佐藤さん、それはさうと貴方の家に置いてあつたあの萩野とか云ふ女は何うしたですか？」と訊く。久造は笑つて、

「いや、あの女のことではいろ／＼皆さんのお疑ひを受けたさうで、息子も大變に恐縮してをつたですが、併しもと／＼何もそんな怪しい筋の人間ではないので、實はつい一昨日やつと宥め賺して郷里の方へ引取らせたのです。息子もあの萩野の胸中を察して泣いてをつたですよ。殊にふぢ子は非常にあの萩野に懐いてをつたもんですから、いざ家を立つといふ時には、二人でもう泣いて泣いて、私達もほとほと手古摺つたですよ。私もあの萩野の話は詳しく聞いてをるので、實に氣の毒で見てもられんかつたですよ。」と、しみ／＼した調子で云ふ。

大將はさうと聞くと、何かなしに悲しげな顔になつて茫然と久造の顔を見守つてゐた。

大將と久造はそれから先々と輝一や春子のことを語り合つて、二人の間にはもしあの春子がもう一度

長山の家から救ひ出されて來たら、その時こそ周圍から何んとか協力して輝一との間に結婚が成立するやうに取計らはうと云ふ默契が出来たのであつた。久造は大將の本心を聞くと寧ろ餘に意外であつたのもう眼に涙を浮べて狂喜したやうな顔をしてゐた。

そのうちに風呂が沸いたと云ふので、大將は先づ久造を浴場の方へ案内させた。そして彼が入浴を済まして歸つて來る迄に食堂の支度をすつかり整へさせて待つてゐたが、久造は間もなく上つて來て、そのまま食卓へつくと、もう嬉しくて耐らないやうに、

「いや、どうも至れり盡せりの御款待で却つて恐縮です。かうして食卓を共にするのも、随分長年振りですのう。は／＼／＼。」大將もにつこりして、

「いや、こんな不便な處で、何も御馳走は出來んが、まあ、どうか今夜は悠くり寛いで昔話でもやりながら飯を食らうと思つてなあ。は／＼／＼。」

食卓では宮中からの御下賜品の白葡萄酒なども抜かれて、久造には何も彼もが箸を置けない程うまく食べられた。

大將はふつと思ひ出したやうに、給仕に出てゐる小間使のお静の方を見て、

「お、静。澄子はもう臺所の方には用がなからうから、此方へ出て來て一緒に食卓へ着くやうにさう云うてくれ。」と云ふ。

と、お静は困つたやうな顔になつて、

「あの、あの、澄子様は唯今一寸御用がなくなり遊ばしまして、あの、そこまでお出懸けになりましたございませぬ。」

大將は眉を擧げて、

「何に？ 出懸けた？ 今頃可怪しな奴ぢやなあ。何處へ行つたのかお前は知らんのか？」

お静はひどく云ひ渡んで、

「あの、私はよく存じませぬでございますけれど、一寸そこまで行つて来ると仰しやつてお出ましになりましたのでございますから、もう程なくお歸り遊ばしますだらうと存じますが、……」

大將はうつかりフオークを置いて、さも訝かしさうに眼をまじくさせてゐたが、それでも何んとも云はなかつた。

久造も變な顔になつて洋盃ばかりあげてゐたが、やがて我慢がしきれなくなつたやうに、澄子と龍岡の問題をそれとなく話題に持ちだしたりして、

「何んでも息子の話では龍岡少佐ももう近々に此方へ歸朝されるとかいふことですが、私も息子からいろ／＼此方の御事情も聞いて非常に心配してをるのですよ。」などと云つたりした。大將は言葉少に、

「いや、ほんとに困つたことばかりであらう。龍岡もいよくこの三十日には横濱へ入ることになつて居

るのだが、……」と、云つたきり口を噤んでしまつた。

それからは海軍省のことやら、公正倶楽部の内訌の真相やら、軍備縮小の問題などが話頭に上つたが併し鹽谷大將はともすると弾まない調子になつて廊下の方で聞える足音ばかり氣にしてゐるやうな様子

をみせてゐた。

それでも晚餐は二時間ばかりかゝつてやつと済んだが、丁度腹を退き終る頃になつて、澄子はひよつこり歸つて来た。大將が何處へ行つたと訊くと、澄子は唯、

「一寸爺やを連れて、郵便を出しに参りましたの。」と答へるばかりで、あとは何んにも云はなかつた。思ひなしか彼女の顔は妙に蒼ざめてゐて、何を云はれても茫然してはき／＼返事も出来ないやうであつた。

その晩は十時過ぎまで皆で話して、久造も久振りで波の音を聞きながらゆる／＼寝られると云つて、寢室の方へ案内されていつたのであつた。大將は何故か澄子のこと氣懸りになつて、その夜は夜つびでベッドの上でまじくしながら、直ぐ向側のベットに寝た澄子をそれとなく監視してゐた。澄子も何うしたのか眠られないと見えて、苦しさに寝返りばかり打つてゐたが、眞夜半過ぎになると、しくしく歎息するやうな聲が少時の間彼女のベッドの中から漏れて聞えて来た。大將は自分も胸に餘る苦悶をやつと押へながら、態と眠つた風をして、そのまゝ聞流してしまつたのであつた。

その翌日は別荘のものは早く起きた。久造も大將も朝から庭へ出たり、すつと海濱の方へ下りたりして、何時になく大きな笑ひ聲などをたてながら楽しさうに時を消した。その日は朝からかりと晴れて吹く風もなく、廣々とした海面には秋らしい明麗な濃碧の色が一面に浮んで見えた。何處の航路へ出てゆく船か、眞黒に塗られた大汽船が二艘も三艘も引續いて西岬の方へ姿を隠していつたりした。

午飯が済んでしばらくすると、大將と久造は日向りのいゝヴェランダへ出て、そこで煙草を吸ひながら親しげな調子で頻に四方山のことを話しあつてゐたが、久造はやがてそはくした顔になつて、「なあ、鹽谷さん、これから東京へ歸る汽車は何時が一番都合がえうでせうかなあ。」と訊く。大將はその顔を見て、

「佐藤さん、それぢやあんたはもう歸るつもりか。それは可かん。折角やつて来てくれたんぢやもの、せめてもう二三日は遊んでいつてくてもえうぢやないですか。それとも何か東京の方で退引きのならん用でもあるかな。」

久造は頭を搔いて、

「いや、別に用もないんですが、しかし實は明後日、息子の社が引越しをするので、私も車位挽いて手

傳つてやらうかと思ひましてなあ。はゝゝゝゝ。」

大將も羨ましさうに微笑んで、

「車を挽くか。實に元氣で羨ましいなあ。それで今度の社は何處ですか。」

「いや、それはいづれ息子が一度近々に此方へ来て、一切を貴方にお話しすると云うて楽しんでをるのですが、實は今度京橋の第一生命の四階を三部屋ほど借りましなあ。そこで當分の間事務をとることになつたんですが、何にしる創刊號のことですから、まるで見當がつかないので、息子ももう一生懸命なですよ。それで私も若いものと一緒になつて働かなりやばならん義務があるので、もう此處のところ一昨日などは古道具屋を廻つて机を買つて歩くやら、椅子を買つて歩くやら、實に我ながらかうも變れるものかと思ふやうに働いたですよ。はゝゝゝゝ。今に雑誌が出るやうになりましたら、私はせめて社の小使にでも雇つてくれと云うて、一昨日も息子と大笑ひをしたですよ。はゝゝゝゝ。」

大將も合點いて、

「いや、それはえゝ。それは結構ぢや。貴方がさうやつて働いて見せると、若い者はどんなに鞭撻されるか分らんからなあ。いや、私も健康さへ許せば、どうせもう表だつた社會には用のない身體ぢやからせめて貴方と二人で、「新理想社」の小使にでもなり度いもんぢやなあ。はゝゝゝゝ。」と笑つて、「それでもう社員なぞの顔觸れはすつかり定つたですか。」

「それはもうすつかり定つてしまつたです。先づ全部で十二人ばかりの人数で、蘭部さんが第一期の事業費として、取敢ず十萬圓だけ出して下すつたので、人選や印刷所の方の交渉などは極めて理想的にやることが出来たんです。それに社員も大部分は今迄の社の人間が皆向うを脱退して入つて來ましたのでまことに都合がえいのです。それに第一少壯評論家で有名なあの津端秀峰も入社しましたのですから、息子としては全くこのうへもない成功でしたよ。」

大將は兩腕を拱んで、

「ふむ、それは蚊龍が翼を得たやうなものぢや。何より幸先がえい。その調子でやつていけばもういよ／＼本當の事業にかゝるやうになるのも遠い將來ではあるまい。實に結構ぢや。」

さう云つてゐるところへ、廊下の方で足音がして、澄子が扉をそつと開けて、しよんぼりヴェランダへ下りて來た。

大將は澄子が入つてくるのを見ると、端で見てもいぢらしい程心配さうな顔になつて、

「お、澄子。まあ、此處へ來い。」と云つて、自分で隣の籐椅子を示しながら、「澄子、今靜から聞いたら、お前は頭痛がするとかいふぢやないか。何うしたんぢや。風邪でも引いたんぢやないのか。」といたはるやうに云ふ。澄子は籐椅子の側へ來て立ちながら、悄然とした様子で、

「私、別に風邪でもないやうなんでございますけれど、今しがたから少し頭痛が致しまして。」

久造はそれを引取つて、

「それは可かんのう。さう云へば大層顔色もよくないし、第一眼の色が汚えんですよ。秋口だから無理をせんやうにせんと、今年の風邪は恐ろしいからのう。」と云ふ。大將はそれでも眉根を寄せて、

「澄子。どうもその顔付では熱でもありさうだぞ。まあ、此方へ來て見い。」と云つて、まるで子供にでもするやうに、澄子の額に觸つてみながら、「ふむ、額は別に熱くもないが、併し一度検温器で測つて見たら何うだ。さうして少しでも熱があるやうだつたら、構はんから今日は一日寝て居れ。」澄子はもぢ／＼して、

「有難うございます。ですけど、私、熱はなさうな心持が致しますから……。」と言葉少に云つて、「ねえ、お父様、それよりもあの、唯今これが参りました。」と云ひながら、一通の電報を袂から取出して、大將に示す。それには附箋がつけてあつて、もう封が切つてあつた。

大將はその電報を受取つて、開いて見ながら、

「お、これは東京の本邸から廻送して寄越したものぢやないか。何んぢや、龍岡からか。」と云つて、ぢいツと電文を讀んでゐたが、やがて何とも名狀することの出来ない顔付になつて、「これは昨日の發電ぢやから、龍岡はもう今朝は神戸へ入つて居るのぢやなあ。さうすると、今夜の急行に乗るとすると、明日の朝は東京へ着くんぢやなあ。さうなると、つまり豫定よりも三日早く歸る譯か。」と云ふ。澄子は隠

しきれない悲しさを眼に現はしながら、

「さうでございますの。この前の香港からの電報では、横濱まで汽船で来るやうに申して寄越しましたが、予定を變へて汽車にしたらしいでございますねえ。」と云つて、耐らなさうな顔になりながら、「あの、お父様。私、やつぱり東京まで迎ひに参らなかりやありませんでございますか。」

大將は電報を膝の上へ置いて、ぢいツと考へてゐたが、やがて低い聲で、

「澄子、そりやまあせめて驛まで迎へに出た方が、私は穩當だらうと思ふのぢや、さうすれば龍岡だつて、いゝ感情を持つだらうからな。」と、態と澄子の顔は見ずに云ふ。

澄子はさう云はれると取附き場がなくなつたやうに、眼をしばたきながら茫然と海の方を見てゐたが、少時すると涙聲になつて、

「お父様、私、實を申しますと、こんな、唯今のやうな心持ちで、龍岡に逢ひましたら、何うなるかと思ひまして、それが心配で耐らないのでございますわ。それを考へますと、私、何でございますか、東京へ歸るのが厭で、厭でならないのでございます。ですからもういつそのこと、この儘此地にをりまして、龍岡に此地へ來て貰つた方がよくなるかと思ひますわ。お父様が一緒にゐらして下さるところでなければ、私、とても龍岡に逢ふだけの勇氣はないのでございますもの。」と云つて、何うしたのか、急に手帛を取出して顔を掩ひながら、悲しげにしくく、歎息をしましてしまふ。

大將も久造も互に顔を見合はせて、三人は少時の間涙ぐましい沈黙につままれてしまつたのであつた。大將はやがていたはるやうなやさしい調子になつて、

「澄子。お前にさう云はれると、私も決して無理ではないと思ふ。併し、龍岡の身になつて考へて見ると、彼は汽船で歸る予定を汽車に変更してまでも歸京を急いでをるのぢやから、私は彼にも何か思惑があるのだらうと思ふのだ。もしさうであるとすると、お前の立場としてなるべく彼にいゝ感情を持たせた方が、後々の爲めにもなりやせんかと思ふのだ。まあ、お前も東京へは歸り憎いぢやらうが、併しそこは十分考へて、何とかして迎ひにだけ行つてやつて呉れんか。」と、哀願するやうに云ふ。

久造はそれを聞くと、横合から口を入れて、

「いや、澄子さん。局外者の私が餘計な口を出して、まことに相濟まんが、併し私も昨夜鹽谷さんからいろく、貴女の身邊に纏綿してをる事情も伺つて、非常に私はお氣の毒ぢやと思つてをるので。」と云つて、改まつた咳拂ひをしながら、「それで、私の考へもやつぱりお父さんと同じで、貴女はお父さんの云はれる通り、先づ一應は龍岡少佐に逢はれて、その後でお互に喧嘩腰でなく、双方ともに理解を持つて、最後の解決をつけた方が得策ぢやないでせうか。かういふ場合には、あなたも老人の云ふことを聞いた方が私は萬全の策ぢやと思つてよ。」と、諄々と訓すやうに云ふ。澄子は頻に泣き欝りながら、「ほんとに小父様にまでいろく、御心配をかけまして、私、申譯もございません。私、それに致し

まして、どうも自分では、……」と、云ひながら、あとは嗚咽に言葉を奪はれてしまふ。
久造はまるで慈父のやうに大きく合點いて、

「いや、貴女の胸中は、私にもよく分つとる。併しこの際ぢやからまあ何事も云はんで、兎に角お父さんの云はれるやうに、停車場まで出迎ひにだけは出た方がえゝですよ。さうせんと、お父さんがあとで困られるやうな事が起らんとも限らんからなあ。」と云つて、煙草の煙をふうツと日光の中へ吐き出しながら、「それに、幸ひ私も夕方の四時頃の汽車で、東京へ歸り度いと思つてをるから、もし何んだつたら私が一緒にお伴をしよう。さうして又何か面倒なことでもあつたら、私がお邸へ伺つて、御用に立つ範圍で御相談にも乗らうぢやないですか。」

大將はさう云はれるとひどく喜んで、

「いや、それがえゝ、それがえゝ。澄子、佐藤さんがあんなに親切に云うて下さるのぢやから、お前もどうかさうしてくれ。佐藤さんが従いてゐて下されば、お前も千人力ぢやないか。はゝゝゝ……」と、力めて事もなげに笑つて、「ほんたうなら私が一緒に行つてやるのぢやが、何にしろこの身體では一寸東京まで歸るのも億劫でなあ。だからまあ、明日は一人で龍岡に逢つて、その時の様子で、又直ぐに龍岡を此地へ引張つて来てくれてよし、それが出来んやうであつたら、お前ひとりで歸つて来てもらへんのぢやから、澄子、どうか私の云ふことを聞いて、四時の汽車でも、五時の汽車でもえゝから、今夜

のうちに東京へ歸つてをつてくれ。」

澄子はさう云はれれば云はれる程悲しくなるのか、もう聲を呑んで、子供のやうにひた泣きに泣いてゐた。大將も久造もさう泣かれると、一寸宥めやうに困つて、互に眼と眼を見合はせながら、どうしていゝかといふやうな顔をしてゐたが、その時、玄關の方では忽如、人聲がして、誰かゞ訪問して来たやうな氣勢であつた。

小間使は奥からばた／＼玄關の方へ駈け出して行つた。

大將はその物音を聞きつけると、眼を翳だて、

「お、誰れか客が来たやうぢやなあ。」と、眩きがらぢいツと廊下の方を見てゐたが、澄子はそれと一緒に、何うしたのか急に落着いてゐられないやうにそは／＼しだして、慌てゝ涙を押し拭ひながら、扉のところにまで出てゆく。その顔には不思議な不安が閃いてゐた。

やゝ少時すると、今度はだしぬけに、芝庭の向うの庭木戸のところでは人聲がして、

「此方から入ればよろしいんですか？」と、若い男の聲が聞えたかと思ふと、そこから思ひもかけない佐藤輝一が、脊廣を着たまゝの身輕ないでたちで、ステッキを小脇にはさみながらついと入つて来た。輝一ばかりと思ひの他、その背後からは春子が洋傘をつぼめながら、さも面目ないやうにしよんぼり首を垂れて入つて来た。

三人は一齊にそれを認めて、いづれもあまりに意外であつたので、少時口もきけないやうに眼ばかりまじくさせてゐたが、佐藤輝一は皆がヴェランダにゐるのを見付けだすと、もう押へ切れないやうに満面に笑みを含んで、遠くから、「やあ。」と云つて、帽子をとる。

大將は前後を打忘れたやうに、窓のところから顔を出して、「お、輝一君か、やあよろこそ。さ、そこから上つて下さい。」と、大きな聲で云ふ。

久造も澄子も唯呆れたやうな顔をして見てゐた。

やがて輝一は石階のところまで歩み寄つて来て、春子をいたはるやうにしながらヴェランダへ上つて来たが、大將はそれを上口のところで迎へて、

「やあ、ほんとによく来て呉れた。あんまり意外であつたので、私は……」と云ひかけると、その時、春子はもう我慢が出来なくなつたやうに、突然、洋傘を石階の處へ置き捨て、

「お父様！」と叫んで、そのまゝ大將の胸へ縋りついて、聲を呑んで泣き出してしまふ。

大將は不意だつたので、一歩後へ退つて、何とも名状することの出来ない顔付をしてゐたが、やがて自分でも感情が制しきれなくなつたやうに、

「春子、もう何も云ふな。私は御前が前非を悔いて、私の傍へ歸つて来て呉れさへすればそれでえゝのぢや。」と、腹の底から出るやうな聲で云つて、その肩へ手をかける。

春子はもう身體を木の葉のやうにぶる／＼打慄はせながら、頻に嗚咽を呑んで、

「お父様、お父様、私、ほんとに申譯もございませんでした。一時の迷ひで、お父様のことも何も忘れてしまひまして、ほんとに何んてお詫びを申し上げたらいかと思ひまして……」と、顔も上げ得ずに、泣き沈んでしまふ。大將は眼を瞬きながら、

「春子。もう、私には何も彼も分つてをる。もう泣くな。そんなに泣かんでも、私はお前を許してやるぞ。」と云つて、自分も急に涙聲になりながら、「春子、ほんとによく歸つて来て呉れた。私はお前がもう一度、私のことを思ひ出してくれる日を待つてをつたんぢや。私は、私は、お前を信じてをつたんぢや。春子もうえゝ。もう泣くな。」と、やさしく宥めるやうに云ふ。

春子は情味の深いその言葉を聞くと、却つて悲しさは胸を裂かんばかりに込み上げて来て、身も世もあらぬやうに歎息してゐた。父に背いた罪を悔いて、又再び海にも山にも譬へ難い父親の慈愛の下に歸つて来た彼女は、端で見ても、まるで傷ついた小禽のやうに又なくいぢらしかつた。久造も、澄子も、輝一も涙含んだ眼を据ゑて、黙つてその様を眺めてゐた。

大將はやつと春子を宥めて、澄子が持つて来た籐椅子へ腰を下ろさせると、今度は態と涙を押隠すやうに笑ひながら、

「輝一君。私は貴方に何と云うて感謝してえゝか分らんぢや。貴方のお父さんから、私は昨夜すつか

り話を聞いたのぢや。私は、あなたの何時に變らぬ、誠實な、正しい心持ちを非常に嬉しく思うてをつた。ほんとに輝一さん。あなたはよくこの春子を私のところへ連れ戻つて下さつた。私はあなたに心からの禮を云ひ度いのぢや。」と、輝一の顔を眞面に凝視しながら、言葉にはつくせぬ感謝の念に溢れて云ふ。

輝一はその時やつと帽子とステッキを傍の卓へ置いて、もう挨拶をする餘裕もなく、

「いや、さう仰しやられると、僕、恐縮ですが、僕も實はこの間蘭部子爵からいろ／＼なお話を伺つて非常に感奮してしまひましたんです。で、もう何うあつても春子さんを長山さんの家から救ひ出さなければ、僕の面目が立たんと考へまして、それからもう毎日のやうに、春子さんに手紙を上げたり、又僕自身で長山さんのお宅を訪問したりして、それこそ死身になつて力を盡して見ましたのですが、彼方もなか／＼警戒が嚴重で、僕のすることはその都度不成功に終つてしまつたのです。そこで僕ももうかうやつて徒らに遷延してをつては、どんな恐ろしい結果がくるか分らんと思ひまして、昨日はいよく覺悟を極めまして、蘭部子爵の名を借りて、とう／＼春子さんを精養軒へ誘き出したんです。さうしてお目にかゝつて見ると、春子さんももうとうから長山邸を脱け出して、どうかして此方へ歸りたいといふ御希望を持つてゐられることが分りましたので、實は今日兩國の停車場で落合ふ手筈をきめて、やつと春子さんを此方へお連れ申すことが出来たんです。」と、ひどく昂奮しながらいふ。

大將は深く合點きながら、

「いや、貴方も忙しい昨今であるのに、どうもいろ／＼お骨折りで、全くお禮の言葉もない。私は佐藤さんから貴方が春子のことについて非常に心配してゐて呉れると聞いて、きつと近い將來に貴方は春子を救ひ出してくれること、確信してをつたのぢや。貴方はほんとに、私に對して此うへもないえゝ事をしてくれたのぢや。私はこの春子さへ歸つてくれれば、もう他に何も望むところはないのぢやから。」と云つて、まだしく／＼忍び泣きをしてゐる春子の方を見て、「おい、春子。もう泣いてくれるな。お前が歸つて来てくれたんで、私はもう嬉しくてならんのぢや。おい、澄子。どうか春子を宥めてやつて呉れ。お前も春子が歸つて来てくれたことを、きつと喜んでくれるぢやらうから。」

澄子もその時、春子の椅子の背後へ立つて、双眼に溢れる程涙を湛へながら父大將と輝一との話を聞いてゐたが、さう云はれると、春子の肩へ手をかけて、

「春子さん。ほんとに貴女よく歸つて来てくれたわねえ。でも、私、もうお父様のお心を思ふと、あなたのしたことがほんとに憎かつたわ。私、どうかしてあなたに反省をさせようと思つて此方へ来てからも何度あなたの處へ手紙を出したか知れやしないわ。それだのにあなたは、あなたは返事もくれないんですもの。」と泣きながら云ふ。春子も涙を拭いて、「お姉様。私、何ともお詫の致しやうもございませんわ。どうか、どうかお許し遊ばして下さいました。私、皆さんのお手紙やお電話は一切取次がな

いことになつてをりましたんで、まるで知らなかつたんでございますもの。何も彼も皆私が悪かつたんでございます。私、それを思ひますと、かうしてをりましたも、面目なくていつそ死んでしまひたいやうな心持が致しますんですわ。」と云つて、又悲しげに泣き沈んでしまふ。

大將はその様子を横合からぢいつと見てゐたが、やがて可哀さうで耐なくなつたやうに、澄子の方へ眼配ばせして、

「おい、澄子も、春子ももうえゝぢやないか。どうせ過ぎ去つたことぢや。今更云うたつて何うにもなりやせんぢやないか。はゝゝゝ。」と無理に笑つて、「おい、澄子。それよりもお前はそろ／＼東京へ歸る準備をしたら何うぢや。六時半の汽車が終列車ぢやから、東京へ着くのは遅くなつても、まあそれに乗ることにして、その前に今夜は皆一緒に、芽出度く夕飯を食はうぢやないか。今日のやうに顔の揃つたことはないからなあ。」と、さも嬉れしやうに云ふ。

輝一はそれを聞き咎めて、大將の方を見ながら、

「あの、それぢや澄子さんは今日東京へお歸りなんですか。」と怪訝さうに訊く。大將は合點いて、

「うむ、實は今しがた龍岡から電報が来てなあ。横濱まで汽船で来る豫定を變更して、明日の朝早く汽車で東京へ入ると云うて来たんぢや。それでまあ何かのことはあとでゆつくり解決をつけるとして、兎に角澄子は東京驛までゝも出迎へに出た方がよからうと思つて、實はもう先刻から佐藤さんと二人で口

を酸くしてすゝめてをるんぢや。」

輝一はさう云はれると、何か深い考へに引入れられたやうに少時の間黙してゐたが、やがてさも傷ましやうに澄子の方を見詰めて、

「ふむ、さうですか。龍岡さんいよく／＼それではもう歸つて見えるんですなあ。」と云つて、急に久造の方へ瞳を轉じて、「ねえ、お父さん、お父さんはいつまで此方へ御厄介になつてゐらつしやるお心算なんでしょうか？」と訊く。久造は煙草を置いて、

「いや、私も實は、今夜のうちに東京へ歸らうと思つてをるんぢや。大將はもう一日二日をれと云うて下さるんぢやが、併し例の引越しはあるし、それに澄子さんと一緒に歸れれば、好都合ぢやと思つてのう。」

輝一は合點いて、

「それなら、僕も御一緒にその六時半の終列車で歸りませう。春子さんを此方へお渡してしまへばそれでも僕の仕事は済むのですから。」と、云ふのを大將は押へて、「いや、さうどうも皆一緒に引揚げてしまつては私達が寂しくてならんよ。輝一君、貴方は折角来たんぢやから、せめて今夜ひと晩でも此方へ泊つていつて呉れんか。どうせ六時半の汽車では東京へ着くのは十二時になるから、それからぢや何をしようと思つたつて駄目ぢやないか。」

輝一は微笑を含んで、

「いや、有難うございます。僕もさうしたいのは山々なんです。實は僕も明日は非常に忙しい日なんです。朝から東奔西走しなければなりませんので……」と云つて、久造の方を見ながら、「いづれ又そのうちに少し仕事の方が落着きましたら、父と二人でゆつくりお邪魔に出ますよ。」

大將はさう云はれると無理もないといふやうな顔をして葉巻をくはへてゐたが、その時澄子はどうしたのか、急に涙を拭いて、

「あの、私、小父様や輝一様と御一緒に参れるんなら、あの、大變に心強うございますから、それではお父様、そろそろ支度を致して参りますわ。ねえ、春子さん、その前にお夕飯のお支度もしなかりやなりませんから、あんたも手傳つて頂戴な。一緒に臺所の方へいきませうよ。」と云つて、皆に一禮して春子を促して、奥へ入つていつてしまつた。

日はもうそろそろ西へ傾いて、海は不思議な程いゝ風になつて來た。丁度潮時と見えて、今日も漁船が幾艘となく沖の方から五丁艦を揃へて漸次と此方へ漕ぎ返つて來る。さすがに岩礁の裾でも今日ばかりは騒がしい波の音も聞えなかつた。輝一はその光景を窓からうつとりと眺めやりながら、

「實にどうも平和な夕方ですな。かういふ景色を見てゐると、何から何迄が幸福に感じられて、この宇宙にも人生にも幸福以外には何んにもないやうにさへ思へて來るですなあ。」としみじみと呟やいた。

十九

それから大將と久造と輝一は、籐製の小さな卓に鼎座して、暮れて行く美しい海の景色を眺めながら、長いこと樂しげな物語に耽つてゐた。輝一はさながら王者のやうな誇りと確信をもつて、新理想社の事業のことを大將に説明して聞かせた。大將も我を忘れてうつとりとその話に聞き入つてゐたが、話頭が長山邸のことや、龍岡のことに及ぶと、やがて間もなく、奥からは春子が出て來て、まだはきばかりと口がきけないやうな様子で、

「あの、お父様、お食堂のお支度が出来ましてございますから……」と傳へる。

それを聞くと大將は先づ椅子から立上つて、久造と輝一を促して食堂の方へ入つていつた。まだ四邊は明るいので、そこには電燈も點つてゐなくて、カーテンを透して流れ込んでくる美しい夕陽の光が食卓のうへのくさくの食器をきらきらと輝かしてゐた。

大將は久造と輝一を向う側の椅子へ着かせて、しよんぼりしてゐる春子の方を顧みながら、

「おい、春子。お前はそこの輝一君の隣へいつて坐れ。こゝは澄子の席にとつて置くから。」

春子は何處か氣恥かしさうにしてゐたが、やがてそれでもしとやかにその席へ着く。それと同時に隣の間からは小間使達が大きな平盆に料理の皿を載せて運んで來た。大將はまた昨夜の葡萄酒を抜かせて

自分で久造に酌をしてやりながら、

「さ、佐藤さん。今日は芽出度い日ぢや。貴方は飲ける口ぢやからどうか大いにやつて下さい。これから汽車に乗つてしまひさへすれば、あとは四五時間の間はぐつすり寝ていけるのぢやからなあ。はゝゝ」と、久振りに彼は勢ひのいゝ笑ひ聲を立てた。

久造はさうまさうに洋盃をあげながら、

「いや、どうも今日はほんとにえゝ都合にいきましたのう。輝一は殊勳第一ぢや。はゝゝゝゝゝ。」と笑つて、輝一の方を顧みながら、「おい、輝一。お前もひとつ頂かんか。こりや攝政宮殿下から御下賜の白葡萄酒ださうでのう。實に結構なお酒ぢや。」と云つて、自分で壘を取上げて、輝一に酌をしてやらうとする。

大將はそれを抑へて、その壘を春子の方へ押遣りながら、

「おい、春子。お前酌をして上げい。輝一君はお前の再生の恩人ぢや。今日はお前も私も大いに輝一君に感謝せんけりやならん日ぢやからなあ。はゝゝゝゝゝ。」

春子はさう云はれると、おづ／＼白葡萄酒の壘を取上げて、輝一に酌をしてやる。輝一は無雑作に頭を下げて、「いや、有難う。」と云つたが、やがて抑へきれぬ喜びを眼に輝かしながらその洋盃を取上げて、「それでは兎に角、皆様の御健康と、御繁榮を祝させて頂きませうか。僕も今日は自分でも或意味

で永遠に忘れることの出来ない日なのですから。」と云つて、洋盃をあげようとする。

大將はそれを見ると、手で抑へて、

「いや、輝一君。まあ、一寸待つてくれんか。今澄子も出て来るぢやらうから、さうしたら皆で一緒に洋盃を上げようぢやないか。實に今日は私は愉快でならん、唯残念なのは蘭部子爵がこの席にゐてくれんことぢや。あの人がゐてくれると、これでもうすつかり人数が揃ふのぢやがなあ。」

輝一は蘭部子爵の名を聞くと、どうしたのかふつと暗い顔になつて、何か思ひ出してどもゐるやうに眼を落としてしまつた。

夕陽はいつかしろもう窓の下枠のところまで沈んで、ひとしきり夕雲は烈火のやうに炎々たる最後の光榮に輝いた。

いつまで待つても澄子がなかく顔を出さないの、大將は待ち切れなくなつたやうに春子の方を顧みて、

「おい、春子。澄子は一體何をしてをるのぢや。まだ臺所で何かしてをるのか。」

「いゝえ、あのお姉様はもう先刻臺所の方の御用はお済ましになつて、彼方の室でお召換をなすつてゐらつしやいましたんですが、……」

「はゝゝゝゝ。それぢや久振に東京へ歸るので、鏡と首引きをしとるのぢやらう。はゝゝゝゝ。」と笑つ

て、「併し、あんまり念を入れてをると、汽車の時間に遅れてしまふからお前ひとつ彼方へいつて、呼んで来てくれんか。今此方では皆で揃つて、殿下から御下賜の葡萄酒で健康を祝さうと云うて待つてをるから、大急ぎで出ておいでなさいと云うてなあ。」

春子は一寸頭を下げて、それなり椅子を立て、食堂を出ていつた。

春子はそれから長いこと歸つて來なかつたが、少時すると彼女はさも訝かしさうな顔をしながら食堂の扉口のところへ現はれて、「お父様、お姉様はどう遊ばしたんでございませう。彼方のお室にもゐらつしやいませんければ、臺所の方にもゐらつしやいませんでございませうよ。」と云ふ。大將は眉を擧めて、「なに？ をらん？」と云つたが、ぐるり身體を春子の方へ向けて、「そんな譯はないが、お前私の寢室の方も見たか。彼方に澄子の荷物は皆置いてあるのぢやから。」春子は大將の顔を見て、

「え、彼方へも參つて見ましたんでございませう。それにあの、ひよつとかしたら、お手水にでもいらしつたんぢやないかと思ひまして、今迄あすこの廊下の處でお待ち申してをりましたんでございませうけれど、……」

大將は首を傾げて、

「どうも可怪しいなあ。何處へ行つたんぢやらう。家にをらんとすれば又昨夜のやうに戸外へでも出ていつたのかな。それにしても、もうそろ／＼汽車の時間も迫つてをるのに、可怪しな奴ぢやなあ。」さう

云ふうちにも、大將の顔には不安の色が俄に濃くなつて來るのであつた。

久造も解せぬ顔で、

「いや、鹽谷さん。さう云へば、どうも昨夜からの澄子さんの行動は少々可怪しいですよ。私は實を云ふと、昨夜も妙な想像を描かせられたのですが、……」と、云つて春子と大將の顔を交互に見ながら、

「まあ何は兎もあれ、もう時間がないのですから、澄子さんの行方から先に捜さうぢやないですか。昨夜の郵便局といふのも今から考へて見ると少し變ぢやし、……」と、はつきり口がきけないやうに言葉を呑んでしまふ。

大將ももう捨てゝ置けないやうに、

「おい、春子、それぢや大急ぎで静を此處へ呼んでくれ。それから花も爺やも皆此方へ來るやうにさう云うてくれ。」と、少し急ぎ込んでいふ。

春子は廊下へ出て、手を拍いたが、それに應じて、彼方から小間使のお静が、

「はい。」と、聲高に答へて大急ぎで此方へやつて來た。そして春子の顔を見ると、さも氣を利かしたやうに、「まあどうも申し譯もございませぬ。お燈りでございませう？ 唯今直ぐにお掛け申しますから。」と笑ひながら云つて、白い手を伸ばして廊下の角のところにあるスイッチをひねる。食堂にはそれと一緒に緒にぱつと明るい電燈が點つた。

大將は扉口の方を見て、

「おい、静。お前一寸用があるから此方へ入れ。」と呼ぶ。

お静はそれを聞くと、何故か悸乎としたやうに肩を縮めたが、やがておづく／＼食堂へ入つて来た。大將は小間使のお静が入つてくるのを見るといつにない嚴かな顔になつて、

「おい、静、お前もつと此方へ来い。」と呼んで、「あの、今春子を見せに遣つたら、又今夜も澄子はをらんといふが、お前はその行先を知つてをるぢやらう。どうも昨夜から俺も怪しいとは思つてをつたがおい、静、お前何處へ出ていつたか知つてをるのなら、どうか此處で打明けて話してくれんか。」と、先を掩ふやうに云ふ。お静はさう云はれると、さも當惑したやうに顔を伏せながら、

「あの、私、なんにも存じませぬのでございますから、どうか御勘辨遊ばして、……」と、あとは口籠つてしまふ。大將はその様を眼じろぎもしずにきつと見て、

「おい、静、この際ぢやから、隠すとお前の爲めにならぬぞ。お前は澄子の身の周圍のことを一切してやつてをるのぢやから、何も知らん筈はない。お前がこゝで物事を隠すと、あとからどんな恐ろしいことが起つて来るか分らんのだ。なあ、静、お前は何も彼も知つてをるんぢやらう。さ、どうか有體に云うてくれ。俺はお前に頼むのぢや。」と、言葉を和げながらいふ。

さうなると、お静はもう耐らなくなつたやうに、おろ／＼聲になつて、

「あの、あの、……」と、幾度か云ひ澁りながらやつと思ひ切つて、

「あの、御前、私、誠に申譯もございませんけれど、實はあの、澄子様が決して誰方様にも申上げては可けないと仰しやいましたもんでございますから、つい嘘を申上げまして、……」と、ひどく恐縮しながら、「あの、實は昨日も今日も直ぐ下の濱の保養館からだと申しまして、澄子様のところへお手紙をもつてお使のものが参りましたんでございますの。それである、澄子様は昨日もそのお手紙を御覽遊ばしますと、直ぐにお出ましになりました、今日もあの、やつぱりそのお手紙で、つい今しがたお出ましになりましたんでございます。」と慄へながら云ふ。

大將はそれを聞くと、大きく眼を睜つて、

「ふむ、大方そんなことであらうと思つてをつたんだぢや。それでその手紙は誰から来たか、お前は知らんのか？」

お静は双眼に一杯涙を浮べて、さも／＼脅えてゐるやうに、

「あの、私、唯お手紙のお取り次を致しましたばかりで、誰方様からとも、まるで存じませぬので、……」と、吃りながらいふ。大將は少時の間考へて、やがて、

「うむ、それだけ聞けばよし。おい、静、それぢや兎に角、爺やにさう云うて、これから直ぐに保養館へ迎ひにやつてくれ。今私がお手紙を書くから、それを持つて大急ぎで行くやうにな。」と云つて、椅子か

ら立上る。お静はそれを抑へて、

「あの、御前、なんでございますけれど唯今お出ましになります時に、二十分ばかり経つたら、きつと歸つて来るから、手荷物だけは先に停車場へ遣つといておくれ、と、仰しやつてゐらつしやいましたんでございますから。それにあの、それでは私が保養館のことを申上げましたのが分つてしまひますので、あとで又どんなにお叱りを受けますか分りませんから。」と、哀願するやうに云ふ。大將はそれも耳に入らないやうに、

「よし、よし。俺がみんな承知してをるから兎に角お前俺の居間まで来てくれ。それでは佐藤さんも輝一君も一寸失禮します。」さう云ひ捨て、大將はそゝく食堂を出ていつてしまつた。お静も續いて泣き顔をしながらその後から従いていつた。

あとに残つた久造も輝一も春子も、憂慮に充ちた眼付をして、互に顔ばかり見合はせてゐた。その時、食堂の時計は静かな聲で五時を打つた。

やがて少時経つと、大將はしよんぼり肩を落として、何やら深い考へに沈みながら、又食堂へ歸つて来た。彼はもとの椅子へ着くと、そのまゝ力のない眼で輝一の方を見て、

「なあ、輝一君。今静が云うた保養館の客といふのは、どうも私には蘭部子爵のやうに思はれてならんが、何うぢやらう。」

輝一も唯ならぬ表情をして、

「さあ、さう仰しやれば僕にもさう思はれるですが、……。」と云つて、何か思ひ當るやうに、「いや、屹度さうに違ひないですよ。屹度さうです。間違ひはありません。」と、幾度か合點きながら云ふ。久造も口を入れて、

「いや、鹽谷さん。私もどうもそんな氣がしてならんぢやが、さうすると、子爵は昨夜からこつそりと保養館へ見えてをつたに相違ないですなあ。それにしても、可怪しな人ぢやなあ。そんなに人目を忍ぶやうなことをせんでも、かうやつて私達も来てをることだし、この別荘へ訪ねて見えたら却つてえゝのになあ。」

輝一はその時、兩腕を拱んで、考へ深い顔付をしながら、

「いや、お父さんはさうお考へになるか知れませんが、現在の子爵はもうそれだけのことすら爲し得ないほど嚴肅な心持ちになつてゐられるのですよ。」と云つて、溜息を吐くやうに、

「それにしても、やつぱり子爵はとう／＼此地へ見えてしまつたんですかなあ。僕も變だとは思つてをつたんですが、……。」と、何やら煮え切らないやうなことを呟やく。

大將はその顔を見て、

「なあ、輝一君。貴方は子爵が此地へ来たことをほんたうに今迄知らんでをつたのか。それとも、或は

此地へ来たかも知れんといふやうな想像を描かせるやうな事實を耳にしてをつたんぢやないのか。」と、一心になつて訊く。

輝一は一寸間を隔いて、

「いや、僕は實際のところ、今の今迄、まさか子爵が此地へ来てゐられやうとは思ひもしなかつたんです。それといふのは、この四五日前からの出来事をお話しなけりやお分りになりますまいが……」と云つて、やがて思ひ切つたやうに、「いや、もう隠しても無駄ですから、僕一切をお話してしまひませう。實は僕も別に他意があつて隠してをつた譯ぢやないですが、併しこの際ですから、貴方にさういふことをお打明けして又、このうへの御心配を増すやうでは不本意だと思ひまして、實は今日けふこのまゝお話しすに東京へ歸つてしまふつもりでをつたんです。併し子爵が此地へ見えてしまつては、隠して置いても却つて悪い結果を來すことになるかも知れませんが、もうお話ししてしまひませう。」と云つて、居坐ひを直しながら、「實は、その、僕も仕事のこと、もう一週間ほど前から、幾度も幾度も子爵邸へ足を運んだんですが、その都度に子爵は外出されてゐたり、それでなければ身體の加減が悪いといはれたりして、一度も僕に逢つて下さらんです。僕も不思議で耐りませんでしたので、何度も何度も手紙を差上げてみたんですが、それでも薩張り御返事がないのです。まあ此處は、他人のゐないところですから、すつかり露骨に話させて頂きますが、それで僕も實は子爵がきつと例の問題で苦惱に苦惱

を重ねてゐられるんだと思ひまして、もうお氣の毒で耐らなかつたもんですから、その事に就て僕の所信を、原稿用紙で十枚の餘も書いて、子爵のところへ送つたのです。つまりその内容は、甚だ冷たい残酷な申分かも知れませんが、僕は子爵にどうかして澄子さんに對する心の羈絆を絶つて、どうかもう一度事業といふものゝ方を振返つて頂きたい。澄子さんと子爵との間には、どう考へても明るい光明を望むことは出来ないから、お互ひに今が總てを思ひ捨て、御自分達の靈魂を救ふ肝心な時だといふやうなことを書いて上げたのです。すると、つひ一昨々日でした。子爵からは實に意外な御返事が來たのです。」と云つて、輝一は大きく眼を睜つた。

輝一は猶も言葉を續けて、

「それで、僕は子爵からのその御返事に依つて、子爵が或恐ろしい最後の決心を極めてをられるのを初めて知つたのです。それを知ると同時に僕自身も全く去就に迷つてしまつたんです。僕がその御返事を披いて見た時の感じは、さあ何んと申したらいゝでせうか、まるで眼の前で今にも噴火山が破裂しさうな心持ちでした。」と、ひどく昂奮して云ふ。

大將はそれを聞くと、急に顔色を變へたが、やがてやつと我を押へてゐるやうに、

「一體その最後の決心といふのは、何ぢやな。」と、態と靜かに訊き返す。輝一は一寸唇を嚙んで、

のです。もう富も、地位も、事業も、それからまた戀も總てを擲つて、子爵は飄然と風の如くに、この日本を去つて、再びヨーロッパの天地へ永遠の旅人として漂泊していかうと云はれるのです。」

「ほう、それではやつぱりもう一度ヨーロッパへ渡られる決心なのか。」と、黯然とした聲音で云ふ。輝一は何とも云へない悲しみを眉宇の間へ現はして、

「いや、子爵のお考へに依ると、もうこの人生には何もない。自分に生の價値と、希望とを示してくれらるものは何もない。戀の幸福も、陶酔も唯一場の幻夢である。自分はもう確かに人生の底を見た。人の一生は幻の道を辿る旅人の行程である。自分も一度は人生に對する溢れるやうな愛と熱意に燃えて、君と一緒に社會事業に没頭しようと思つた。虐げられたるもの、憐れなるもの、恵まれざるもの、さう云つた不幸な人生の影に泣き、苦しみ、悶えてゐる澤山の人々を總ゆる熱情をもつて救はふと誓つた。併し今となつて考へて見ると、それも自分には何等の意義もないことであつた。第一他人を救ふよりも救はれなければならぬのは、却つてこの自分であつた。自分一人をさへ救ひ兼ねるものが、どうして他人を救ふことが出来る。自分はそこに苦い皮肉と矛盾を見たのであつた。そこで自分はもう今度こそ何も彼も擲つてしまつて、この十月の三十一日に横濱を出帆するベルヂュラツク號に乗つて、もう一度フランスへ渡るつもりだ。今度はもう無論再びこの日本の土を踏まうとも思はないし、寂しい永遠の

放浪者として見も知らぬ國の土にこの爲すなき自分の一生を埋めてしまふつもりだ。子爵はもう涙の出るやうな悲痛な調子で、さう書いて寄越されたのです。」

一座のものはその悲しい言葉にひどく感動して、少時の間は一語も發しなかつたが、やがて大將は涙含んだやうな眼をあげて、

「いや、子爵も實に氣の毒な人ぢや。永遠の旅人か。實に寂しい、悲壯な言葉ぢやなあ。」と呟いたが、その眼を瞬たゝいて、「それで輝一君、子爵は澄子のことについては何も書いてをられなかつたかな。」

輝一はぢいツと卓のうへの酒壘を見て、

「いや、無論それも書いてありました。併し、子爵はもう澄子さんに對する熱情も、君の御忠告に従つて、ふつつりと思ひ捨て、しまふと誓つておられました。もう龍岡さんも最近に歸つて見えることではあるし、殊に人の噂に聞くと、龍岡さんほもし澄子さんを奪ふものがあつたら、その者の生命に危害を加へても、自分は澄子さんを他人の手には渡さんと豪語してゐられるといふ。それにもし茲で自分も一歩進んだら澄子さんは固より、それよりも第一に大將が救ふことの出来ない御不幸の底に落ちていられるのは火を賭るよりも明かな事實である。それは到底自分の忍び得ない處である、と云つておられるのです。」

大將はそれを聞くと、思はず深い嘆息を吐いて首を垂れてしまつた。

輝一はやがて又語を續けて、

「それで、いづれ近日中に澄子さんへは長い手紙を書いて、自分の意志も希望も打明けてお話しする心算では居るが、併しもし君がその前に澄子さんに逢ふ機会があつたら、どうか一應自分の決心をお話して蘭部は永久に貴女の御幸禮が破られないことを希ふ餘りにたつた一人でこの日本を去るとさうお傳へしてくれ。もう一度最後の會見をし度いのは山々だが、併し臆病な自分はそんなことをして若し決心が鈍つた場合には男として實に醜いから、もう成ることならこの儘澄子さんにはお目にかゝらずに立ち去るからと子爵はさう云つてゐられたのです。」

大將は涙を見せまいとして、顔を伏せたまゝ、

「ふむ、併しまあ保養館に來てをるのが、果して子爵であるとするれば、つまり子爵はその最後の會見を前に來たものと解釋してえ、譯ぢやなあ。それなら澄子も心残りがなくて却つてよからう、私も實は今爺やに持たせてやつた手紙にもそれを書いて置いたのぢや。もし私の想像が違はなくて、そこに來てゐられるのが子爵であつたら、決して遠慮は要らんから、是非とも別荘へお伴して來い。もうかうなつた以上は、決して私達、氣兼ねなぞをしてはならん。飽くまで自分達の態度を明らかにして、親に絶り、親に訴へる。私は今日になつてはもう何も彼も擲つて、お前を救うてやる覺悟も出來てをるのぢやかと私はくれぐれも書いてやつたのぢや。」

輝一はわが意を得たやうに合點いて、

「いや、そりやようございました。そりや確かに時宜に適したお言葉でした。それなら、屹度澄子さんは子爵を此方へ連れて見えてでせう。さうして此處で屹度立派に最後の解決をつけられるでせう。さうなればもう我々は何も心配することはないのです。」と云つて、そはくしながら、「併しそれにしてももう、お使ひの人が歸つて來さうなもんですなあ。その保養館といふ旅館までは餘程道程があるので、か。」

大將も幾らか愁眉を開いて、

「さあ、保養館は直ぐこの下の海濱にあるのだが、併しあれでも坂があるから、男の足でも往復二十分はかゝるぢやらう。それにもし子爵が此方へ來て呉れるとすれば、自然返事も遅くならうし、つまり手間取れば手間取る程、まあ此方では希望が持てる譯ぢやなあ。」

輝一も力めて善意に解釋しようとするやうに、

「さうですとも、さうですとも。今頃は屹度貴方のお手紙を二人して讀んで、どうしようかといつて相談してゐられる最中かも知れんですよ。まあそれではゆつくり待つてゐませう。」

大將は又考へ深い顔になつて、

「併し子爵も三十一日の汽船で立たれるとすると、もう餘日も幾らもないが、ほんたうにその決心だけ

は變らんのぢやらうなあ。實は私の希望としては、どうかしてこのまゝ日本へ止まつて貰ひたいのぢやが、……」と、さも心残りらしく云ふ。輝一は胸を張つて、

「いや、僕とてもさうして下されば僕自身の將來から云つても、事業の上から云つても、全くこの上もないのですが、併しもう旅行免狀も取つてしまはれたさうですし、又前後の事情から考へて見ても、子爵の決心は牢乎として抜く可からざるものがあると思ふのです。それにこの十日頃迄にすっかり資産の整理をされて、後事は總て大越伯爵と、福島法學博士に委任して行かれるさうで、財務の整理がつき次第見積りの半分は新理想社の基本金として正式に登記をして下さるといふことになつてをるので。そつちの方だけのことなら、今十五銀行に保管されてゐる動産でどうにか足りさうだから、せめて立つ前にその方だけでも、きつぱり極りをつけて行きたいと云つてゐられるのですが……」と云ふ。大將も久造も嚴肅な顔でぢいツとそれを聞いてゐた。

大將はやがて熱心な聲音で口を切つて、

「それで新理想社の爲めに、子爵は結局どれ位な金を擲たうと云はれるのぢや？」と訊く。輝一は希望に輝いた眼付になつて、

「いや、それはまだすつかり確定はしてゐませんが、先づ今の處では少くとも五十萬圓は出して頂けるのださうです。さうして不動産の整理や、今の邸宅の競賣が濟むと、總額で六百萬圓ほどのものを一種

の財團にして、それでつまり社會事業をやる足固めをこしらへようといふ計畫なのです。」

大將はさも感じ入つたやうに、

「ふむ、それでは蘭部子爵自身は全然無産階級の一人になつてしまはれる譯ぢやな。さうしてたつた一人で寂しくヨーロッパへ渡つていつてしまはれるのか。實にその心事は壯とするが、併し考へて見ると私は涙なしにあの人を送ることは出来んなあ。子爵はまだ若いから、自己に對してそんな大きな革命も斷行出来るのぢや。實に何と云うてえゝか私は考へても恐ろしいやうな氣もするなあ。」

輝一はそれを押へて、

「いや、それも子爵が何か希望なり、目的なりをもつてヨーロッパへ行かれるのなら、その自己革命にも大いに意義があるのですが、併し永遠の放浪者として、まるでジプシイの様にヨーロッパの國から國を當もなく漂泊して歩かうといふのですから、僕は猶一層悲慘に思はれてなんのです。傷ついた胸に已み難い思慕の情を懷いて、異境の空をさまよひ歩くそのお心持ちはどんなであらうと思ふと、僕は全く耐らなくなつて來るのです。何んとかして救つて上げることが出来ればと思つて、實は僕も一生懸命になつて考へてはをるのですが、併しあゝ思想的に絶望してしまはれては、どうすることも出来んですからなあ。」

大將も亦沈痛な顔になつて、

「全くぢやなあ。もうそれではあの澄子も遂に子爵を救ふことは出来んのかなあ。」と呟やく。
輝一は強く頭を振つて、

「いや、子爵は、いつの間にかもつとく先へ行詰めてしまはれたのです。もう子爵の、感情も、神経も、思想も、總てが悪化しきつてしまつたのです。この上は宗教の力にでも縋らなければ到底駄目なのです。」

さう云ひ懸けてゐる處へ、廊下の方で突然足早に此方へやつて来る人の氣配がした。皆はふつと氣を取られて一齊に扉の方を見たが、そこから小間使のお静が息せき入つて来て、

「あの、御前、唯今爺やが保養館から歸つて参りましてございます。」
大將は緊張しきつた眼色で、

「お、さうか。いや待つてをつたのぢや。それで様子はどうかやつた？」

お静もほつとしたやうな調子で、

「はい、あの、彼方へ参りまして、お手紙をお渡し致しましたら、丁度あの、澄子様もおゐで遊ばしにして、あの、それではこれから直ぐにお客様も御一緒に御別荘の方へお歸り遊ばしますから、どうかもう二十分ほどお待ち遊ばして下さいますやうにつて、さう仰しやいましたさうでございます。」とひと息に云ふ。

大將はそれを聞くと、思はず満面に安堵の笑みを湛へて、

「お、此方へ歸つて来るといふのか。そりや何よりぢや。」と云つて、「おい、静、それではまだ彼方も食事前ぢやらうから、お客の料理も大急ぎでこしらへさせて、此處へ出してくれ。それから洋盃ももう一つ持つて来てな。」と、いそ／＼しながら云ふ。お静も落着かない様子で、

「はい、畏まりましたでございます。」と云つて、そのまま食堂を出ていつてしまつた。

大將は久造や輝一の方を向いて、まるで蘇生したやうな顔で、

「いや、此方へ歸つて来てくれればもう此上のことはないな。え、鹽梅ぢやつた。今日はどうも何から何までうまい都合にいつて、私は愉快でならん。こゝへ子爵が加はれば、もう申分なしぢや。今夜はひとつ氣を變へて、皆で大いに洋盃をあげて幸福を祈らうぢやないか。は、ムムム。」と笑ふ。皆の顔にも初めて明るい笑ひが浮んで来たのであつた。

二十

それから少時すると、お静に命じて拵へさせたくさ／＼の料理の皿も食卓へ運ばれて来た。洋盃ももう一つ追加されて、食卓はもう蘭部子爵と澄子が歸つて来て席へ着くばかりに準備された。子爵と澄子の椅子は並べて据ゑられ二人が自由に話しをすることも出来るし、互に打融けて食事を攝ることも出来る。

るやうにちやんと用意が整へられたのであつた。

さうしてゐるうちにも時は刻々に過ぎて行く。つい今しがた五時を打つたばかりだと思つてゐたのもう時計の長針はいつしか五時四十分を指してゐた。それと一緒に、夕陽はもう全く三浦半島の彼方へ影を没して、廣い芝庭や斷崖の彼方に擴がつた海面には寂しい黄昏の薄明りがそろ／＼掩ひかゝつて來たのであつた。

大將はもう待兼ねて焦々するやうに、

「ほんとに澄子達は何をしてをるのぢやらうなあ。二十分許り待つてくれといふたんぢやから、もう遣つて來てもええ時分ぢや。一體どうしたんぢやらう。」と、一人で落着かないやうに云ふ。

「ほんとにどうされたのですかなあ。六時半の汽車といへば、もう餘りゆつくりしてはをれんが……」と云つて、時計を見上げながら、「お、もうあと一時間ばかりしきやない。果して間に合ふでせうかなあ。」

大將は額に太い皺をよせて、

「いや、こんなことをして愚圖々々してをつちや、とても六時半の汽車には間に合やせんですよ。どうもひどく氣を揉ませるなあ。ほんとに何をしてをるんぢやらう。」と云つて、彼はもうぢつとしてゐられ

ないやうに椅子から立つて、折柄入つて來たお靜に、

「おい、靜。先刻は二十分経つたら此方へ歸つて來ると云ふたんぢやなあ。それに違ひないなあ。」と訊く。お靜は合點いて、

「はい、左様でございます。それにしても大層御悠りでございますわねえ。もうお歸り遊ばすでございます。ませうけれど……」

大將は屏のところまで出て、玄關の方を差覗きながら、

「いや、此の様子ぢやとても汽車の時間には間に合やせんよ。おい、靜。お前氣の毒ぢやがもう一度爺やにさう云うて保養館まで迎へにやつてくれんか。うか／＼してをると、もう六時打つてしまふからなあ。」

お靜はさう云はれると、素直に辭儀をして、

「はい、畏まりました。それでは大急ぎで行つて貰ひますから。」と云ひ捨て、それなり盆をそこへ置いて、急ぎ足に廊下の方へ駆け出して行く。

輝一はその様をぢいツと一心になつて見てゐたが、やがて大將が再び自席へ歸つてくると、徐ろに口を切つて、

「もしこの終列車に間に合はなかつたら、もうそれでいゝぢやありませんか。僕は却つてあんまり此方

からやい／＼仰しやらない方がよくはないかと思ふんです。この際ですから或程度まで彼方の自由に任せてお置きになつた方が却つていゝと思ふんですが、……」

大將は輝一の方を見て、

「いや、それもさうだが、併し私としてはどうかして明日龍岡が東京へ着く時に、澄子を迎へに出した

いのぢや。さうする方が確かに澄子の立場を有利に導くと思ふんぢやが、……」

「そりや或はさうかも知れませんが、併し私は出迎へにお出になる、ならんといふことはさう大した問題ぢやないと思ふんです。子爵が此方へ見えてゐなければ澄子さんも或は、厭々でも東京へ歸つていかれるか知れませんが、併し一旦此處で子爵に顔を合はされた以上は、なか／＼さう容易く別れてしまはれることは出来まいと思ふんです。それよりも僕は、いつそ龍岡さんの方は第二の問題にして、今夜はゆつくり子爵と澄子さんの問題に對して最後の解決をつけた方がもつと意味がありやしないかと思ふんです。」と、肩を張つて云ふ。

大將は輝一がさういふのを聞くと軽く合點いて、

「いや、それもさうだが、しかし私は、どうか誤解をせんやうにして貰ひたいのぢや。私が澄子を東京へ遣る眞の心持ちは、つまり彼女を單身龍岡の處へやつて、實は夫婦の間に或決意をつけさせようといふ肚もあるのぢや。もしどうせ可かんもんなら、龍岡が歸朝して來て最初に澄子に逢つた時の態度で、

私は反對に此方から離婚の申し込みもしようし、或はもつと強硬な手段を執つてもえゝと覺悟をしてゐるのぢや。だから私は澄子があんなに嫌がるのを無理に東京へ遣る氣になつたのぢや。お互にもう相當の年齢にも達してゐるのぢやから、かういふ場合にはなるべく自發的に事を處理させた方が、却つて後腐れも残らず、いゝ結果が得られると思ふのだが、どうだ、輝一君、あんたはさうは考へんかな？」

輝一は食卓のうへの肉叉を弄びながら、

「さあ、それは確かにいゝことには相違ないですが、今夜のやうに澄子さんが子爵に逢つてゐられる場合には僕はどうかと思ふんです。殊に子爵は今夜がそれこそ最後の會見で、もう今日限り永久に澄子さんには逢はんといふ場合なのです。僕は龍岡さんに逢ふのが重大か、子爵にあふのが重大かと聞かれたら、無論子爵の方が重大だとお答へするのには躊躇しません。さうしてどうせ最後の解決をつけるのならせめてこの通り皆さんお顔も揃つてゐることだししますから、お互に深い理解を持ち合つて、ゆつくり心置なく別離の盃を上げることが出来たら、僕はどんなに嬉しいか知れんと思ふのです。」

「いや、輝一君、私にはあんたのいふ意味はよく分つてゐるのだ。併しつまりそこに親としての私の苦しい矛盾があるのだ。私はあの澄子の胸中を察する餘りに、この機に及んでも私はどうかして彼女を通して菌部子爵を救ひたくて耐らんのだ。今あんたは、もう到底澄子の力をもつても子爵を救ふことは不可能だといふたが、併し私は、私はそんな事はないと思ふのぢや。私は今もしあの澄子が子爵に

許すことが出来たら、子爵は屹度ヨーロッパへ行くことも思ひ止まつて呉れるだらうし、またもう一度楽しい人生に返つても来られるだらうと思ふのだ。私は、今のあなたの話しを聞いて、どうあつてもこの儘子爵をむざむざと萬里の異境へ送つてしまふ事が出来なくなつてしまつたのぢや。私は子爵の心を思ふと實にお氣の毒で、私は何ものを犠牲にしても子爵と澄子を救はんけりやならんと思つてをるのぢや。」と、肺腑をを絞るやうな聲音で云ふ。輝一もさういはれると、ふつと涙ぐんで。

「いや、お言葉の意味はよく分りました。さういふお考へならそれでまた何等かの血路が見出せると思ひます。それでは、貴方は、もし假りにこゝで澄子さんが鹽谷家へ復籍されることになつたら、改めて子爵と澄子さんとを結びつけて遣らうといふ思召しはあるのですなあ。」と、熱意を籠めて云ふ。大將は力なく合點いて、

「無論私は、その心算でをるのだ。龍岡の態度ひとつで、私も實は極めて強硬な手段をとらうといふ決心はついてをるのぢや。第一明日龍岡は、澄子に對して此方で舅父として、又妻として正當に希望してをる様な態度には決して出んだらうと思ふのだ。口では何といつてをつてももうあれほど心の荒れささんでしまつた龍岡ぢや。殊に彼はもう名譽もなければ、先輩にも同僚にも下僚にも總ての人に好意といふものを持たれてをらん今の地位ぢや。だから彼は屹度東京驛へ下車する時には酒でも飲んでをらんけりや恥かしくて出迎への人に顔は合はされんだらうと思ふのぢや。そこで屹度彼はあゝいふ性質の男ぢ

やから、澄子に向つてあるまじい侮辱なり、冷酷な言葉なりを浴せかけるだらうと思ふ。それは私にはもう見えてをるのぢや。それを理由にしてつまり澄子と私がそこで覺悟を極めれば、それで自から解決はついてしまふぢやないか。私の眞實の考へはそこにあるのぢや。」と大將は傷ましい顔になつて云ふ。輝一は黙つて聞入つてゐた。

輝一は少時すると顔を上げて、
「しかし、貴方、もし龍岡さんがさういふ態度に出なかつたとしたら、どうなさいます。人の噂に聞く龍岡さんも今度は今までの亂離な生活を捨て、忠實な良人として澄子さんの傍へ歸つて來られるのだといふぢやありませんか。若しそれが事實とすると、餘程此方でも覺悟を極めてお懸りにならないければ、僕は却つて反對に恐ろしい破綻を來たしやしないかと思ひますよ。」

大將はそれを押へて、
「いや、さういふことも一應考へては置かんけりやならんが、併しもし假りに龍岡が此方の望む通りの態度に出たとしても、やつぱり結果は同じになつて來ると思ふのぢや。といふのは、澄子と離れてをるからこそ、その間にはいろんな感情も働いて、今度こそ今までの忌はしい生活を捨てるなぞといふ氣にもなるかも知れんが、併しそんな心持ちはどうせ長く續くもんぢやないさ。一度酒色の巷に耽溺したものは、もう靈魂を惡魔に賣渡したも同然なのぢやから、どうしたつて一人の女に對して純潔な、眞率な

心持ちを捧げ得るものぢやない。だから私はそれを理由にして、どうあつてもあの澄子を龍岡から奪つてしまはずにはをれんのだ。さうしなければ、澄子の一生はまるで暗い涙の谷になつてしまふのだ。親として私はどうしてそれを黙視してをられよう。その場合にはこの私が父として總ゆる責任を一身に背負つても必ず澄子を救つてやらんけりやならんと思つてをるのだ。で、私は、幸ひ此處へ澄子も蘭部子爵も来てくれるといふのぢやから、皆揃つたところで私の口からそれを云ひ出さうと思つて、先刻から私の心の中には立派に腹案が出来てをるのだ。だから輝一君、あんたもどうか私の味方になつて、これからはあの二人のために大いに力を藉してやつて貰ひたいのぢや。」

それを聞くと、輝一もひどく感激して、

「いや、分りました。貴方の思召はさうであつたのですか。それなら何も僕はさうまでに絶望してしまふことはなかつたんです。もしその話しを聞かれたら子爵も或は前途に光明を認めて、今度の悲壯な決心を翻されるかも知れんですもの。さうなつたら、僕までがどんなに幸福になれるでせう。」と、緊張しきつた微笑を見せて、急に今度はそはそはした様子になりながら「それにしてもお二人はどうなすつたんでせうなあ。さう極ればなるべく早く今のお話しをして大いに今後の手段を御相談する必要があるので、一體何をしてゐられるんでせう。」と、頻りに心配しだした。大將も我に返つたやうに、時計を見て、

「お、もうさういへば六時ぢや。困つたなあ、どうしてをるのぢやらう。」と云つて、又ついと椅子から立上がりながら、「よろしい。それならもう一人誰か人を見せに遣つてみよう。」と云つて、自分で廊下へ出ていつて手を叩く。

その聲に應じてお静は大急ぎで臺所の方から出て来たが、それを見ると大將は焦だゝしさうに手ばかり動かして、

「おい、静。爺やはまだ歸つて來んのか。何をしてをるのぢや。もしまだ歸らんのなら、もう一人誰れが大急ぎで下へ見せに遣つてくれ。女の足では駄目ぢやから今度は料理番を遣れ。」と、命ずる。お静も心配さうな顔で、

「ほんとにまあ、どう遊ばしたんでございませう。それでは早速西村に行つて貰ひますでございませうか。」と云つて、またそゝくさ向うへ入つていく。

それと殆んど同時に、臺所の方へ通ふ扉のところからは別荘番の爺やが着流しのまゝ顔だけ出して息を切りながら、「おい、お静さんや。今歸つて來たよあ。」と云ふ。お静は吃驚してそこへ立止まつて、「あら、まあ爺やさん。何をしてゐたんですの。もう彼方ぢや大變お待ち兼ねで、今御前が西村さんを見せに遣れつてさう仰しやつてゐらつしやるんですわ。ほんとに遅いのねえ。」

大將はそれを聞くと、此方から廊下へ出ていつた。

大將はもう一刻も猶豫が出来ないやうに、

「おい、爺や。彼方の様子はどうかだつた？ もう二人は保養館を出てをつたかか？」と、急つかけて訊く。爺やはもじ／＼しながら廊下の中程のところまで出て来て、丁寧にびよつこり辭儀をしながら、「はあ、御前様。どうもえらく遅くなつて、申譯もありましねえだあ。今俺あ保養館へ行つて見ただが、お嬢様もお客様ももう彼處の家にはゐらつしやらねえちうで、何處へおいでなすつたつべと思つて、別荘へ上る道から停車場の方まで捜して見たでがすよ。ところが今そこで濱の茂七んこの子供に逢ひましたでね、もしや知つてやしめえかと思ひまして、訊いて見ますとな、お嬢様は若え立派な男の方と保養館の生洲の棧橋からボートに乗つて、沖へさいらしつたちうですよ。この暗えのにまあ危え、此處邊はこの通り岩が多いで、夜は素人の衆には、はあ、まことに危えとこでがすからなあ。……」大將はそれを聞くと、顔色をかへて、

「なに？ ボートに乗つて、沖へ出た？」と云つたが、食堂の方を向いて、

「なあ、輝一君。二人はボートで沖へ行つたといふが、どうしたといふのだらうなあ。」と、不安に責められながらいふ。輝一も思ひ懸けないその報せを聞くと、眼を据えて、

「ほう、ボートで？ ほんたうでせうか？」と云つたが、もうぢつとしてゐられないやうにそのまゝ椅子から立つて此方へ出て來ながら、「併し、ほんたうとすると、どうも可怪しいですなあ。どういふ

意志でそんな事をされたのか、僕には一寸腑に落ちませんが、……」と、腕を拱んで考へ込んでしまふ。

大將はもうさうやつてはゐられないやうに、

「いや、まあ、何は兎もあれ、おい、爺や、お前、度々氣の毒ぢやが、ひとつもう一度大急ぎで海濱へいつて、茂七でも誰でもよい。直に船を出して二人の乗つてをるボートを探させて呉れんか。どうせ一人の力で漕ぐのぢやから、まださう沖へは出てをらん相違ないから、……」と、せか／＼しながら云ふ。と、爺やは合點いて、

「いや、俺もさうしべえと思つたですけど、何しろ汽車の時間があるで、一度此方へお報らせして置かねえと、可けねえからねえ。それぢや俺、ひとつ走り海濱へ下りて、茂七の船と、それから保養館のモーターで捜して貰ひますべ。それでは御免かふむりますだあ。」と云ひ捨て、彼は年にも似合はず、甲斐々々しく尻端折になつて、臺所の方へ出ていく。

大將はその後を見送つて、

「おい、それでは爺や。なるべく大急ぎで頼むぞ。」と云つて、また食堂へ歸つて來ながら、今度はもう椅子へもつかずに、不自由な足でそこいらをやたらと歩いて廻りながら、

「いや、どうも實に可怪しな人達ぢやなあ。いかになんでもこつちはこんなに心配してをるのにボートへ乗つて沖へ出るとは、どうしたことだ。私には譯が分らん。」と、いくらか腹立ち氣味にも云ふ。

輝一も窓のところへ立つて、ちつと暗い海の方を眺めおろしながら少時の間、黙々として深い思ひに沈んでゐたが、やがて重々しい聲で、

「いや、僕には分りました。お二人は最後の別離を詩的に飾るためにあの暗い夜の海へ出ていつたに違ひないのです。空にはあの通り神祕な蒼い星が降るやうに輝いてゐます。海には風ひとつ吹いてゐません。暗い夜の海は沈黙そのものゝやうに深い静けさを湛へてゐます。實の暗示的な晩ですよ。お二人は屹度、あの海のうへへボートを浮べて、今頃は舷をひたくと洗ふ波の音を聞きながら、心ゆくまでに悲しい別離を嘆いてゐられることとせう。お二人は寧ろさうされることによつて、幸福に到達する或血路を發見されるかも知れんのですからなあ。」と、嘆息を吐くやうに呟やく。

その時、ふと聞くと、食卓ではどうしたのか、春子がいつの間にか卓布の上へ突つ伏して、さも悲しそうに聲を呑んで忍び泣きをしてゐるのであつた。

大將はそれを聞き咎めて、春子の背後へ歩み寄つていきながら、

「おい、春子。どうしたのだ。お前は何か悲しくてそんなに泣くのぢや。」とやさしく訊くと、春子は顔も得上げずに、

「お父様、お父様。私、あのお姉様のお身のうへに何か恐ろしいことが起りさうな氣が致しまして、それが、それが心配でならないのでございますわ。」と、きれ〜にいふ。

大將はその肩へ手を懸けて、

「いや、春子。心配するな。そんなことがあつてどうするものか。それはお前の取越苦勞ぢやよ。」と云ふ。さうは云ひながらも、大將は自分自身も、何かしら不思議な脅威に慄えてゐるやうに、眉を慄はせてゐるのであつた。春子はそれでも切なさうに涙を呑んで、

「でも、でもお父様。あの、先程彼方でお姉様とお話しをしてをりました時にお姉様は變なことばつかし仰しやつてゐらつしやいましたんですもの。これから先もし私がお父様のお傍にゐられないやうになつたら、春子さん、貴女どうか決して今度のやうな心得違ひをしないやうにして、私と二人前だけお父様にお盡し申し上げて下さい。私貴女一人にお父様を預けて行くのはほんとに心懸りでないだけで、運命は私を何處へ連れていつてしまふか分らないんだからと仰しやつて、私の、私の手を痛い程お握りになつて、もう息の塞るやうな聲でさんざお泣き遊ばしたんでございますもの、……」

春子がさう云ひかけてゐると、その時、窓際に立つてゐた輝一は倅乎としたやうに眼を据ゑて、

「おツあれはなんだ。下の海濱で火の手が揚がつた！」と叫ぶ。その聲で大將も春子も、久造も吃驚して顔を上げた。と見ると、丁度庭先の磯馴松の生へた斷崖の端れのところには紅い煙が炎々と立騰つて、何處かでかすかな人聲がしてゐる。

皆もそれを見ると、唯ならぬ顔をして、奔めきながら窓際へ集まつて來たが、大將は少し慄へを帯び

た聲で、

「お、海濱で篝火を焚いてをるんぢや。きつと沖へ捜しに出た船に目標を與へる爲に、あんな處で火を焚き出したに違ひない。輝一君。かうしてもをれんから、兎に角あの崖の端まででも出て見よう。あすこへ出たら海の方の様子も分るぢやらうから。……」と云ひながら、大將はもう一人で先へ立つて、ゆりゆりと足を曳摺りながら扉から庭へ下りて行く。

輝一は背後から追ひ絶つて、

「あ、貴方、お危なうございますよ。」と云つて、直ぐさま大將に手をかしたが、春子は反對の方の側から駆け寄つていつて、父を扶ける。久造もその背後から心配さうな顔で従いつた。

四人は暗い芝庭の露を踏分けて、やつとのことで崖端のところまで出ていつたが、そこから見ると、十丈の餘もある斷崖の裾には五六人の人影が豆のやうに見えて、とある岩礁のうへで彼等は篝火を焚いてゐるのであつた。その附近の砂濱に横たへられてゐる漁船の腹は紅く照らされて、時々ざつざとあつと打ち寄せて来る波は、彼方此方の岩間でほの白く砕けてゐた。

沖の方は眼もはるかな夜の闇に閉ざれ、洲の崎の燈臺の灯が唯一點、心細げに明滅してゐるばかりで、海上には波の起伏をさへ辨別することが出来なかつた。何處を見ても黒曜石のやうな暗闇が眼界を遮つてゐて、二人の乗つて出たボートの姿などは固より、それを捜しに出てゐる漁船の姿までが茫漠と

した夜の擴がりの底に葬られてしまつてゐるのであつた。

四人はさすがに冷厳な自然の偉大さに打たれたやうに一語も發しなかつたが、その時、沖の方では突如、何者かの叫び聲がかすかに聞えて來た。それは暗い海の底から怪しい魔の聲が闇を衝いて何ごとか呪ひの絶叫を擧げてゐるとしか思へなかつた。

沖の聲は少時耳を澄まして聞いてゐるうちに漸次とはつきりして來た。

「おうい、もつと西だ、西だあツ。」と、太い聲が叫んだかと思ふと、今度は更に海岸に近い方で、「おうい、おうい。モーターはどうした？ そんな處で止まつてしまつちや駄目だよ！ もつと東へ廻れえツたら！」と、追駈けて叫ぶ。その聲は陰々として悽愴の氣を帯びてゐた。

それと同時に、何處かさう遠くない沖の方で、突然發動機のぼつくと鳴る音が起つて、その音は少しづつ東の方へ向つて動いて行く。それは海上へ搜索に出た保養館のモーター・ボートらしかつた。大將はそれを聞くと、勇んで、

「お、ボートの居處が分つたんぢやな。あのモーター・ボートの動いて行く方向で見ると、二人の乗つたボートは沖の島の方へ漕いでいつたものらしいなあ。所在が分つたら、早く追ひ付いてくれればえゝがなあ。」と、焦だつて云ふ。

久造は一心になつて、海上へ瞳をさまよはせてゐたが、獨り語のやうに、

「どうも見えんなあ。我々の眼はもう若い時から、多年海の上の展望には馴らされてをるのぢやが、あの篝があるせいか、却つて見えんのう。」と眩やく。

輝一も春子ももう息を塞めて殆ど夢中で海の方を凝視してゐた。モーター・ボートはその間に益々東へ東へと動いていつたが、やがて忽如としてそのエンジンの音は停止してしまふ。輝一は足摺りをして、「やあ、どうした。機械に故障でも出来たのかな。」といったが、それと殆ど同時に、その方向に當つて俄然、思ひもかけない鋭い銃聲が海上の静けさを劈いて一聲鳴り渡つた。續いてもう二發ばあ、ばあんと響いたが、その異様な反響はまるで波紋のやうな律動を伴つて遠い沖の方へ消えていつた。

それを耳にすると、大將ははつとして、そのまゝ輝一の肩へ倒れかゝるやうに縋りつきながら、

「あゝツ、とう／＼遣つたかツ！ 輝一君。もら萬事休矣だツ！」と、魂も消えるやうな恐ろしい聲で叫んで、もう耐力もなくたゞと草地のうへへ腰を解としてしまつた。

輝一も我を忘れて、浮づつた聲で、

「いや、お二人は自殺をする譯はない。決してそんなことはない。さ、春子さん。早く海濱へ下りて見ませう。お年寄りの足ではとても駄目ですから、さ、貴女と二人で行つて見ませう。」と云つて、直ぐさま春子を拉して芝庭の方へ走り去らうとしたが、大將は久造に支へられながら、それを呼び止めて聲涙共に下るやうな調子で、「輝一君。もう駄目ぢや。いくら海濱へ下りたつて、もう到底間に合やあせん。

二人はこれで見事に最期の解決をつけたのぢや。私が恐れてをつたやうに、澄子は、澄子はやつぱり覺悟を極めて、この別荘を出て行つたのだ。」

輝一はそのまゝ立止まつて、もう一度暗い海上を下瞰しながら、聲を打ち慄はせて、

「果してさうでせうかなあ。いや、僕にはもう何も分りません。人生は遂に謎です。永遠に解くことの出来ない、恐ろしい、恐ろしい謎です。すゝと、喘いで、彼は兩腕を胸のうへで拱んだまゝ石像のやうに黙してしまつた。

もう海の方からは何の物音も聞えては來なかつた。岩礁のうへで焚かれてゐた篝火は炎々たる焰を寄せては返す眞白な潮先は果敢なく映じさせてはゐたが、その周圍に蠢めいてゐた人影は何處へ走り去つたのか、一人も姿を見せなかつた。閑寂とした天地の間には、唯波の音が太古からの寂しい唄を繰返してゐるばかりで、東から斜に天心を飾る銀河も、人間の測り知ることの出來ぬ悠久な宇宙の謎語を語り顔に、ほの白い薄明を無限から無限へ瞬かせてゐるのであつた。

大將はやがて、聲を呑んで涕泣してゐる春子を犇と自分の胸に抱き緊めて、狂氣したやうに呻吟しながら、

「春子、春子ッ。お前だけは永久に私のものぢや。何時までも、いつまでも、どうか私のものをつてくれい。」と、叫んだが、久造も輝一ももうどうすることも出来なくなつて、熱涙を呑みながらその悲痛

な言葉ことばを聞いてゐたのであつた。

(大正十一年十一月作)

戀の繪日傘

都踊の夜

京都で名代の都踊りも、もうあとたつた二日で千秋楽にならうといふ、四月二十八日の晩であつた。祇園町で今、艶名をほしいままにしてゐる舞妓の喜久勇が、下河原の闇がり横丁のすぐ下で、突然四人の兇漢に襲撃され、危く狼藉に及ばれようとしたのは、その晩の丁度十時少し過ぎた頃であつた。喜久勇はその日は、茶の出番にあたつてゐたので、四番の踊りがすむと、もうあとは用のない體であつた。宵の口からせつかけ、せつかけ座敷がかゝつてきてゐる中で、繩手の大勝へは、何處よりも一番先に廻る約束になつてゐた。喜久勇はもう近々に襟かへをして、一本立ちの藝妓になるといふので、且那の候補者がわれもわれもと押しかけて、はなの賣れることは、夥しいものであつた。なかでも一番熱心に通つてくるのは、大阪の株成金の、高安平五郎といふ中年の客であつた。いつぞや新聞にもかゝれたが、今度のインフレーション景氣で彼は僅か一週間ばかりの間に、二百萬圓から儲け、東京で有名な横田畫伯に二萬圓といふ法外な包み金をして、出世の鯉の瀧のぼりをかいてもらひ、それをわざ／＼飛行機で大阪へ届けさせたのも、實はこの高安なのであつた。萬事が萬事、さういふ遣り口なので、氣の小さな京都人はいつも呆氣にとられてゐてみるばかりであつた。

高安はもう彼此れ十年も前から大勝を宿坊にして遊んでゐた。あんまり豪さうにしてゐるので、老妓仲間の評判はよくなかつたが、併し金が口をきく廓のことであるから、「北濱はん」「北濱はん」と仇名にまで唄はれて、何處へいつても、下へもおかずもてなされ、さすが大茶屋の大勝でも随一の大盡なのであつた。

その高安が、今日は夕方から大勝へやつてきて、取巻き連中と賑やかに飲みかけながら喜久勇が都踊りから歸つてくるのを待ちかねてゐるのであつた。

喜久勇はいつもなら婢衆を伴につれて、歩いて歸るのだが、今夜は座敷がせくので、店から俵をまはしてもらつて、それで歌舞練場の樂屋を出た。踊子達が歸るのも間もないので、その細露路は迎ひの婢衆達でごたごた混雑してゐた。

細手へいくのなら、花見小路をすつと北へぬけるのに、俵夫はどうしたのか、建仁寺の裏へ出て、どんどん下河原の方へ上つていく。喜久勇は變に思つて、

「なあ、へ、政はん。あんたどこへお行きやすのえ。私、大勝はんへおはなでいくにやわ。」と、俵夫の政はんは、後をふりかへつて、

「あんたはん、ほならお知りいしまへんのか。今な、私、お店を出しなに、お千代どんがこないにははりましたんでつせ。あの、お客さんが、今のさき下河原の春柳はんへいかはりましたさけえ、あんた

はんをそつちやお伴せいで、こないにいにはつたんどすがな。」

「ふむ、ほんなら、もう北濱はんの旦那はんは、大勝はんには、ゐやはらしまへんのか。ま、よう出來てる。そやつたら、私、春柳はんへいくのどすな。」

高安は春柳といふ席貸しへもちよくちよくいくので、喜久勇はむろん訝しまなかつた。

俵夫が下河原へあがる横丁へかゝると、その時、後の方でどうしたのか、ばたばた變な靴音が聞えたやうであつた。喜久勇は何の氣なしにひよいと振顧つてみると、後からは脊廣を着た壯漢が息せき追駈けてきて、いきなり俵の幌へ手をかけながら、

「おい、俵夫、待ちをらんかい」と、怒鳴る。

一人かと思ふと、またあとからも三人ほどどかどかツと驅けよつてきて、忽ち俵のまはりを取圍んでしまつた。

俵夫の政はんも、梶棒を押へられてしまつたので、慌て、立止りながら、

「何んやね、何ぞ御用でつか。」と、いつて、眼を丸くしてゐる。

と、壯漢の一人は、矢庭に梶棒へかけてゐる提灯を叩き落として、

「おい、喜久勇。私、わいに用があるのや。こゝへ下りてんか。」と、こわらしくいふ。

喜久勇は、もう慄へあがつて、

「私、いやゝわ。あんたはん、どなたはんどす。」

「どなたはんでもえゝやないか。下りろちうたら、下りんかい。」

政はんもひどく當惑して、

「あんた、どなたぞ人違へしてやはらしまへんか。これは木村の喜久勇はんでつせ。」

「分つたるがな。人違へせんからこそ、喜久勇ちうてるのやないか。うだうだぬかすと、わいも痛い目みよるぞ。」

「難儀やな。何の御用か知れまへんけど、こんなところで俣とめてもらうたら、私、どんならしまへんがな。」

さういふうちに壯漢の一人は、横手へ廻つて、手早く政はんの頬をぱんとひとつ殴つておいて、いきなり梶棒を引つたくらうとする。まごまごしてゐると、彼等は俣ごと引くりかへしもしかぬまじい權幕だつた。

喜久勇はもう消魂で、われにもなく大きな聲を出してしまつた。

「誰れぞ、來とくれやはんか。私、恐いッ。」と、泣聲をふりしぼつて必死になつて叫ぶ。

その時、下河原の方から背丈の高い學生がひよつこりと此方へ下りてきたが、その有様をみると宙をとんで走つて來ながら、

「どうしたんだ。何をしてゐるんだ。」と、聲をかける。

政はんはもう口をあぐあぐやりながら、

「あ、旦那はん、えゝとこへ來とくれやした。今、この人達が、亂暴なことしやはるのでな。私、往生してまんね。これ、危ないちうたら、危いッ危いッ。」

壯漢達は、幌へつかまつて、むりに俣を引倒さうとするので、政はんはこゝを先途と梶棒へかじりつきながら、體をちぢめてゐる。

學生はその中へ割つて入りながら、

「おい、君達、何のわけか知らんが、そんな亂暴をするのは、よし玉へよ。相手は君、舞妓ぢやないか。

何か用があるんなら、口でいつたつて、分るぢやないか。」

と、壯漢の一人は、肩を怒らして、

「何んぢや。わい、邪魔だてすると、斬つたるぞ。おれの顔知らんかい。」

「いや、まあ君、さういはずにさ、僕もこゝを通りかゝつたんだから、このまゝ黙つて見過ごしてしまふことも出来ないからね。一體どういふ譯で、君達はそんなことをするんだね。」

學生と壯漢は、二言三言押し問答をやつてゐたが、そのうちに壯漢達は事面倒とみてとつたか、今度は學生の方へ喰つてかゝつて、三人一時に彼の胸ぐらへつかみかゝつていく。

學生はそれでも憎らしいほど落着いてゐて、

「何をやるんだね。今度は僕に喧嘩を賣るのか。いや、そんな大勢で君、かゝつて来ちや卑怯ぢやないか。強つてやるつていふんなら、相手にもなつてやらうが、併しそんなことをやつて怪我でもしたら、お互に馬鹿々々しいぢやないか。」

いくらいつても聞かないので、學生もいよゝ腹を据ゑかねたか、三四歩よたゝと後へ退つていつて、ひよいと體をたて直したかと思ふと、だしぬけに壯漢のひとりを腰車でづしんと往來の眞中へ投げ倒した。それは水もたまらないやうな鮮かな手さばきであつた。

學生はさうしておいて、今度は中でも一番腕ツ節の強さうな壯漢の方へ此方から態とつめよつていつて、

「さあ、来い。貴様達のやうな不良は、一度膺らしてやらないと癖になる。さ、そんなに堅くならないで、何處からでもかゝつて来い。」と、いつたかと思ふと、これは外輪がけで、ものゝみごとに溝のなかへ叩き込んでしまふ。

あとの二人は、それをみると、もうおぞ毛をふるつて、どん／＼建仁寺の方へ遁げていつてしまつた。學生は黙つて息を入れてゐたが、溝のなかから匂ひ上つてくるやつを又引捕へて、今度は猫が鼠をこなしつけるやうに、彼方此方へ引摺り廻したあげく、程よいところへ連れていつて、二尺ほど宙へ釣り

あげたかともみると、うんと聲をかけて、肩車でむかふへづしりと投げとばしてしまつた。その手並みで見ると、柔道にかけては、素晴らしい腕前らしかつた。

壯漢はもうひと溜りもなくやつつけられて、帽子も何もそこへ残したまま、それでも口だけでは「覚えとれ」などと捨臺詞をいひながら、ばた／＼建仁寺の方へ遁げていつてしまつた。

學生はクスクス笑ひだして、その帽子をぼんと溝のなかへ蹴込んだが、政はんはもうすっかり感激して、

「學生はん、あんたはん、きつうおまんなあ。えらいもんや。どうも大きに有難うさんで。なあ、喜久勇はん、ほんまにえゝ鹽梅どしたなあ。もしこのお方は来とくれしまへなんだら、私らえらい目に逢ふ筈やつた。」

喜久勇はもう口がきけないほど慄えてしまつて、俣のうへでしくしく泣いてゐた。學生は手を拂いて、

「ねえ、君、俣夫さん、君はこの舞妓さんを何處へひいてくんだね。」

「私どつか。私、このうへの春柳ちふ席貸さんへいきまんのや。」

「さうか。こゝからぢきなんだらう。」

「は、ほん一丁ほどです。」

「そんなら、君、僕、そのうちの門のところまで送つていつてやらう。もし又途中であいづらが出てくるといかなからねえ。いや、弱いくせに、腕だてするから、却つてひどい目に逢ふんだよ。はゝゝゝ。」

その學生は、俣のあとからくつついて、春柳まで送つてきてくれた。

春柳

俣が春柳へつくと、喜久勇はひどく困つてしまつた。あゝやつて危いところを助けてもらつたのに、このまゝ黙つて別れてしまつては、相濟まないやうな氣がする。といつて、自分としては、どうしていか分らないので、ほんとうに當惑してしまつたのであつた。

學生は喜久勇が俣から下りるのを見とゞけると、ちよつと帽子へ手をかけて、そのまゝ無雜作に又もときた道の方へどん／＼歸つていつてしまふ。

喜久勇はどぎまぎしながら、

「あんたはん、あんたはん。」と後から聲をかけてはみたが、學生は知らん顔をして、彼方へいつてしまふのであつた。

政はんも慌てゝ、

「なあ、喜久勇はん、あんたはん、何もお禮もいはんと、このまゝあのお方を歸しておしまひやしたらいきまへんやろ。あんばいおしやすな。」

喜久勇も學生の後姿をみながら、

「さうかて、私、どないにしたらえゝか、分らへんわ。」

「ほんなら早う家へ上つて、旦那はんか、仲居はんはこの譯いうて、何うなとえゝやうにしともらひやしたら何うどす。私、學生はんのあとからおはへていて、もう一度歸つてもらひますさけえ。」

喜久勇はうなづいて、急いで春柳の玄關へ入つていつた。彼女は奥の座敷にゐる高安のところへいつて、その話をする、高安も眉をひそめて、

「ふむ、そら、えらい目にあうたなあ。その學生はん、殊勝な人や。私、一遍逢うて、あんじよう禮をいうたるさかい、失禮どすけどちうて、こゝへ通しや。」

仲居のお龍はこれも慌てゝ玄關へとんで出ていつた。

玄關では何んでも二十分間ほど押問答をやつてゐるやうすであつたが、お龍はもの馴れた女なので、どうしても上らないといふ學生をやつとのことで、奥座敷へ引張りあげた。

學生はすつかりてれて、眞紅な顔をしながら、頭をかきかき座敷へ入つて來た。明るい電燈の光のな

かで見ると、それは二十六七の逞ましい青年で、色の浅黒い、眼鼻だちのととのつた見るから頼もしげな美丈夫であつた。

高安は障子のところまで立つていつて、

「やあ、どうも却つて御迷惑で。えらいどうもお氣の毒さんや思ひましたけど、まあ、どうぞ、そつちやへお坐りやしとくれやす」と、自分の貫祿はくづさずに、大風にもてなす。座にゐた藝妓や舞妓も立つてきて、とう／＼彼を床の前へ坐らせてしまつた。

學生はもぢ／＼して、ひどく困つたやうな顔をしてゐた。

高安は煙草よ、盃よと願で人をつかひながら、

「何んや知りまへんけど、たしか今この喜久勇がえらいお世話になりましたさうで、私からお禮をいはしてもらひますわ。お、そや、折角きて貰うて、名告りをせんちふのは失禮やな。私かういふもんです。どうぞお見知り。」と、いつて、彼は懐から財布を引出し、その中から名刺を一枚出して、學生の前へおく。

學生はびよつこりお辭儀をして、又頭をかきながら、

「いや、僕、その、名刺なんかもつてませんので、失敬します。僕、小峰隆夫といふもんです。」

「はあ、小峰はん。あんたはん、お言葉の様子では、東京のお方らしいおまんあ。さうだつしやろ。」

「え、僕、東京です。」

「東京は何方です。」

「東京はあの、小石川です。」

「小石川。あこらは山の手で、えゝとこだんな。私も茅場町にちツこい店をもつとりますのでな。東京へはちよこらよこいてまんや。失禮ですが、京都大學へお通ひだツか。」

「えゝ。」

「何科へいといでやすのや。」

「僕、理科の大学院へいつてをるんです。」

「大学院へ。ほならもう卒業しやはつたんだんな。そらよろしいなあ。これ、喜久勇はん、あんた、危いところを助けてもろうたお禮や。お酌でもしてあげたらどやね。」

喜久勇も眞紅な顔をして袂をいぢつてゐたが、銚子をもつて小峰の傍へいく。

小峰は堅くなつて、

「いや、僕、折角ですけど、酒はやらないんでね。」

「まあ、よろしうあつしやろ。ひとついかゞです。」

小峰は仕方がなしに、ぎごちない手つきで盃をとりあげた。

高安はさうしてゐる間に、喜久勇から今のさわざを一々聞いてゐたが、眉をひそめて、
 「ほんなら何んやな。いきなり後から追うてきて、俵へ手かけたんやな。しやうむない奴ぢやな。誰れ
 やろ、そなことをするのんは。」

喜久勇もやつと落着いてきて、

「さあ、私ちよつともみたことのない顔やのつせ。あんな人、私、知りまへんわ。」

「ふむ、あんた、人の恨みを受ける妓やないし、誰れやろな。」と、いつてしきりに考へてゐたが、高安
 はやつと何か思ひ出したやうに、「こら私の想像やけどな、ひよつとしたら、あのほれ、加藤鐵舟な、あ
 の男がアブレもんでもつかうて、そなことさせたんと違ふかいな。さういへば、私、思ひあたることも
 あるのや。」

「あの、加藤はんいうたら、いつぞや大勝はんへ來やはつた、あの加藤はんどつか」

「そや、そや。満洲から歸つて來たちうて、私とこへやつてきて、きつろ酔うて裸踊りをしたやろ。あ
 の髯の生えた男や。」

「まあ、あのお方どつか。あのお方やつたら私顔知つてますわ。」

「いや、あの男が自分でやつたんやなうて、誰れぞ乾兒をつかうて、仇をしたんやな。どうもさうらし
 いて。他にそんな亂暴をやるもんはをらんさけえな。」

高安の語るところによると、その加藤鐵舟といふ男は、自稱満洲浪人で、もとは何處か九州邊で小新
 聞の記者などをしてゐたことのある男ださうであつた。いつからか大阪へ流れてきて、北濱で株式旬報
 といふゆすり新聞を發行してゐるのだが、以前高安がその男を商賣の方の用で二三度つかつたことがあ
 るので、その縁故で今でもちよくちよく小遣ひ錢をせびりにくるのださうであつた。

「さういへば、つい四五日前に、あの加藤の奴、私の店へ來をつてな。満洲へいてくるさけえ、三百圓
 ほどくれちうたんを、私、斷つたんや。それを恨みに思うて、きつと業をしをつたんやな。」

小峰も笑つて、

「なるほどね、どうもさういへば、今の男達は、さういつた方面の不良らしかつたですよ。よくある手
 ですな。はゝゝゝゝ。」

「いや、もう此頃はどだい煩うごわしてな。ちよつと景況が出るとあんなんが、あんたはん、日に四人
 も五人もきましてな。中にはあんたはん、ピストルなんかひけらかいて、妻文句をいふのんがあまりま
 てな。私も危うおますさかい、いつも手代にいうて逢はせてますのやけど、あの加藤ばかりは裏口から
 上つてきますのやさけえな。」

「はゝゝゝゝ。いや、あゝいふのに食ひつかれると、實際うるさいですな。僕の親父も東京で病院をや
 つてゐるんですが、病院へもさういふのがよく來ましてなあ。」

「さうでつか。全く油断も隙もあらしまへんわな。それで、あんたはん、何ぞ武藝をおやりでつか。」
「いや、やつたといふ程のことありませんけど、子供の時から、柔道を少しやつたもんですから。」
喜久勇も艶やかに笑つて、

「さうどつしやるな。そやなうては、あんなことよう出来しまへんわ。なあ、へ、北濱はん、このお方ははんはな、四人ゐた中で、二人をつかまへて、きついめにお投げやしたんやわ。そらほんまに、見事やつたわ。」

「さうだつか。とにかく四人に一人では分がわりいさかいな。それでもお勝ちやしたんやから、え、腕や。頼もしいな。」

座がみだれてくると、小峰もいくらか寛いできた。彼は東京の小石川で病院を開いてゐる小峰醫學博士の次男で、岡崎の浄土寺町に素人下宿をかりて、そこに住んでゐることだけは分つた。彼には今年二十歳になる妹が一人あつて、それも家の方の或る事情のために、京都へやつてきて、彼と同居しながら此方で何處かの學校へ通つてゐるといふことであつた。

小峰は今日は清水まで散歩にいつて、その歸りに計らずも、喜久勇の危難を救つた譯なのであつた。小峰は皆に引留められるまゝに、到頭十二時すぎまで遊んで、春柳の自動車で岡崎の下宿へ送られて歸つたのであつた。

風 薫 る

春の生命は短かつた。

都踊りがすむと、もういつしか花の噂も遠くなつて、東山は蒸せかへるやうな若葉の世界になつてしまふ。青葉の中から夕方になると盛り上るやうに鐘の聲が聞えて、薫風は人の心の惱ましさを慌たどしく吹いていつた。

小峰はその晩もふらりと下宿を出て、清水の観音へ散歩にいつた。彼はあの晩から、何にかなしに喜久勇の艶やかな姿が眼に残つて、何んとかしてもう一度逢ひ度くて耐らないのであつた。彼は妹の八重子にかくれて、石段下の繪葉書屋から喜久勇のプロマイドを買つてきてはノートの間なぞへはさんでひとり楽しんでゐた。

祇園で喜久勇といへば、誰れ一人知らないものゝない舞妓である。金さへもつていけばどうにでもして逢へると思つても、さうした遊びにはおよそ縁のない小峰のことゝて、祇園町の細露路をうつかり歩くことさへ出来かねた。ましてや祇園の茶屋は一現の客はあげないのだし、又上げてくれた時に、學費以外にさう餘裕のない彼には、第一金の出どころもなかつた。

あの時には、下河原の下で出會はしたのだからと思つて、小峰は清水から歸りには、いつも此間の道を通つて、ぶらぶら建仁寺まで下りてきた。併し彼はそれからは、唯の一度も彼女に逢ふことが出来なかつた。時々四條などで舞妓の姿をみかけると、もう胸がどきどきして、わざとわきへよけてとほるがそれが喜久勇でない、もうがつかりしてしまふのであつた。

その日も彼は、又下河原の方から歸らうなぞと思つて、清水の舞臺へ上つていつた。何度來ても、そこばかりは倦きなかつた。音羽山のもくもくした濃緑や、谷々へかけ渡した懸茶屋の灯をみてゐると、何んとなく去り難かつた。

小峰は勾欄によりかゝつて、妙に感傷的な氣持ちでうつとり京の町の灯をみおろしてゐた。

さうしてゐるうちに、音羽山のうへには、白い月がぼつかり浮び出てきた。

その時、後の方で、やさしい女の聲が聞えたので、小峰は何氣なしに振りかへつてみると、ほんのり點つた鐵燈籠の灯影に、まるで繪からぬけ出てきたやうな美しい舞妓が三人、木履の音を御堂の軒にひたかせながら此方へやつてくる。

「いけずやなあ。そなこといはんと、おみくじひかしくれやすなあ。」

「ほんまにいな。私らえゝことがあんやわ。なあ、へ、川はん。頼みどすさかいにおみくじひかしくれやすなあ。」

客は二人であつた。いづれも商人のやうな恰好をした男で、舞妓達はその腕にすがるやうにしなからしきりにせがんでゐる。

三人の舞妓のなかの一人は、やがてことごとひそやかに足音を刻みながら舞臺のうへへ歩みできた。

ひよいとみると、それは思ひもかけないあの喜久勇だつた。

小峰はもうはつとして、耳がかあつとあつくなつてきた。

喜久勇の方でも小峰がゐるのを知つて、さもおどろいたやうに、

「ほ、小峰はん、やつぱしあんたはんどしたえなあ。私、ようよう似たお方や思うてましたんにやわ。」と、いつて、月の光の中で美しく笑ひながら、彼の傍へやつてきて、

「せんどはおほきに。ほんまに、長いことどしたえなあ。あんたはん、何んで私しらしとくれやしまへんの。せんどの時に、あないに一遍しらしとくれやすやちふてたのに。」と、さも恨みがましくいふ。

小峰はへどもどして、

「いや、こないだは、大變に御馳走になつちやつて。僕ね、あれからね、つい忙がしかつたもんですから、……」

「忙がしいちふやうなこといきまへんえ。私、ほんまに逢ひ度うおしたわ。あの晩かて、きつう急いでお歸りやしたえなあ。」

小峰は何んといつていゝか分らないので、ひどく苦しい思ひをしながら、

「今日は、散歩ですか。」

「ほゝゝゝ。散歩やて。そんなあんたはん。今な、私ら自樂居へ來てた。ほたらな、お客さんが清水はんへまゐらうちにはるさかい、一緒に來てあげたんどつせ。」

「自樂居つて、何處です。」

「ほんこゝの下どつせ。」

「又そこへ歸るんですか。」

「ふむ、歸ります。ほてな、私また、これから北濱はんで、春柳はんへよせてもらひますにやわ。あんたはんもおいでやはいな。」

「さ、僕、……」

「きとくれやしまへんか。」

「さあね、僕いき度いけど、何んだか變だなあ。」と、いつて、小峰は又頭をかきながら、思ひ切つたやうに、

「ねえ、君、僕、君に逢はうと思つたら、どうすりやいゝの。」

「ほゝゝゝ。けつたいなお方やなあ。お茶屋はんへおいでやして、私をしらしとくれやしたら、私、

いつかてよせてもらひますわ。」

「僕ね、その、お茶屋さん知らないんですよ。お茶屋さんへは、どうしてあがるの。」

「ほゝゝゝ。私、そなことよう知りまへんわ。ほ、あこから、豆鶴はん姐はんがきやはつた。姐はん

に聞いとみやす。」
と、みると、石階の方からは、三十にもならうかと思はれる年増の藝妓が仲居と二人で一足おくれ

上つてきた。

御本堂の方では、舞妓達がまだおみくじをひきながら、わいわい甘えてゐる。豆鶴はそこへいつて、

「はあ、しんど。またあんたはん達おみくじか。何んぞえゝのんが出ましたか。」と、いふ。

喜久勇は、そつちへ手招ぎして、

「なあ、へ、豆鶴はん姐はん。ちよつと來とくれやすな。」と、よぶ。

豆鶴は、仲居と二人で此方へやつてきたが、豆鶴もやつぱり春柳で小峰に逢つてゐるので、につこり

しながら、

「ほ、小峰はん、長いこと。喜久勇はんと二人で、えゝことなあ。ほゝゝゝ。」

「姐はん、いけずやなあ。私、今こゝで小峰はんに逢ひましたんどつせ。なあ、姐はん、小峰はんがな

あ、お茶屋はんへはどないにしていくのやいうておたづねやすのやけど、私知りまへんやろ。姐はん、

あんばい教へてあげとくれやすな。」

「ほーほー。面白いえなあ。ほんまに學生はんらしうてえーわ。ほーほー。と、豆鶴は仲居と顔を
見合はせて笑ふ。

小峰はすつかりてれて、眞紅になつて、笑つてゐた。

豆鶴はそのそばへやつてきて、

「あんたはん、まだ學生はんやさかい、散財を教へたらいきまへんやろけどなあ。まあ、そやけど、た
まにお茶屋はんへいて舞妓はんなどしらしてお遊びやすのやつたら、罪がなうてよろしいわ。ほーほー
。」

「いや、僕ね、舞妓さんがとても好きなんですよ。いつからか、一度遊んでみたいと思つてゐたんです
けど、その方法を知らないんでね。」

「さうでつしやるな。京都は東京とちがうてちよつとお茶屋はんがやーこしうおすすさかいな。そやつた
ら、私、新橋の美濃花はんちふ家を紹介して上げますさかい、そこへおいでやす。」

「美濃花ね。そこへは喜久勇さんなんかも来てくれますね。」

喜久勇は手帛で口をふきながら、

「美濃花はんやつたら、私、じようじ寄せてもらうてますわ。あこのお福さんちふ姐はんはほんまにえ

ゝ人どつせ。私、好つきや。」

小峰はポケットから手帖を出してそれへ美濃花といふ名をかきとめた。その家は白川橋を渡つて、
西へいつた六軒目ださうで、しづかな、もの堅い茶屋ださうであつた。

小峰は又頭をかきながら、

「ねえ、君、それでね、金はどれくらゐもつていつたらいゝんですか。露骨な聞き方だけど、一向分ら
んのでね。」

「ほーほー。あんたはんもすつぱりしといやすえな。ほんまに嬉しいお方。ほーほー。お金で、
お勘定のことですつしやる。そら月の末でよろしうおすわ。」

「いや、月末でもね、僕は豫算をつくつておかんとね。」

「さあ、お糸はん姐はん、なんぼほどあつたらよろしうおつしやるな。」

仲居も笑つて、

「さあ、ま、一遍に二十圓ほどあつたら、えゝのどつしやる。」

「二十圓ね。一寸學生の身分には、大金ですな。併し僕ね、それだけ餘裕が出来たら、是非一遍いきま
すよ。どうか美濃花とかいふ家へ紹介しといて下さい。はーほー。」

小峰は自分でも可笑しさうに笑ひ出してしまつた。

そこへ他の舞妓達も客と一緒にぞろぞろやつてきたので、小峰はわざと喜久勇に別れて、音羽の瀧へ下りる石階の方へ下りていった。

喜久勇は勾欄から伸び上るやうにしながら、

「なあ、へ、小峰はん。ほんまに一遍私、しらしとくれやすや。ほんまどつせ。」と、いつて、につこり笑ふ。

その姿はまるで京人形のやうであつた。

小峰はその晩、下宿へ歸つても、何かなしに喜久勇の姿が眼の前にちらついて、中々寝つかれなかつた。彼は喜久勇のいつた言葉を思ひ出すと、胸がどきどきして、腹の底が熱くなつてくるやうでとても耐らなかつた。

夜の街

その時分、小峰は東京の親許から月々百圓づゝ送つてもらつてゐた。兄妹で下宿代が六十圓、それに學資が三十圓はいるので、毎月ともすると足りない勝ちだつた。友達とお茶を飲みに行くのさへ控へてゐなければならぬやうな境遇なので、従つて、美濃花なぞへいつて、たつた一晩でも遊ぶなぞといふ

ことはむろん出来る譯がなかつた。

小峰はどうにかして、二十圓の金をこしらへようと思つて、日夜心を悩ました。

大學の方はさう毎日講義を聞く必要もなく、近藤博士の研究室へ通つて、そこで仕事をしてゐればよいので、割り方閑であつた。彼は今近藤博士に指導されて、内燃機關のピストンへつけるボールベアリングの研究をやつてゐるのであつた。

彼は研究室にゐても、始終喜久勇のことばかり思つてゐた。

妹の八重子は、毎日一緒にゐるので、いつの間にか、兄の悩ましげな様子が氣がよりになりだした。

彼女は或晩のこと、夕飯がすむと、笑ひながら、

「ねえ、兄様。兄様、此頃は毎晩散歩にいらつしやるのね。今夜は私も連れてつて下さらなう。」と、

小峰は八重子とは非常に仲がよいので、さういはれると斷る譯にもいかなかつた。此頃では同じ清水へいくにしても、新橋の美濃花の前を通つて、あれから末吉町の方へぬけていくやうにしてゐるのだが、妹と一緒にではまさかさうも出来なかつたで、その日はわざと岡崎の大通から知恩院の古門前の方へ出ていつた。

圓山公園へ來ると、八重子は人通りのないベンチへいつて、

「ねえ、兄様、こゝで少し休んでいませうよ。私、何んだか草臥れちやつたわ。」

「駄目だなあ。これツ位な道でくたびれるやうぢや、清水まではとても歩けないね。」

「あら、少し休めば大丈夫よ。兄様、毎日清水へいらつやるの。」

「うむ、僕、とてもあすこが好きなんだよ。東京にやあんないとこはないからね。」

「ほんとね。でも毎晩あんなとこまでいらしやるのは變ね。何んか譯があるぢんやありませんの。」

小峰は笑つて答へない。

八重子は兄の顔を月明りですかしてみながら、

「ねえ、兄様。私ね、こないだから實は兄様におきしよと思つてたんですけどね。兄様、この頃何か心配ごとでもおあんなさるんぢやないんですの。」

「どうしてや。」

「どうしてつて、何んだか、變なんですもの。あんなに朗かだつた兄様が、この頃はとても憂鬱なんですものね。私、そりや心配してますのよ。」

「はゝゝゝ。そんな馬鹿なことはないよ。時候のせいか、僕どうも頭の工合がわるくてね。それで氣が沈むんだね。」

「さうかしら。それだけぢやないやうよ。もし何かあるんなら、兄様、私に話して下さいませぬ。隠し

てゐらつしやるのは、水臭いわ。」

「いや、僕、お前に隠してゐることなんかはないよ。まあ、そんなことはどうだつていゝさ。お前、それよりも金もつてゐる。」

「え、少しならもつてますわ。」

「お茶飲むくらゐある。」

「え、三圓ばかりもつてるわ。」

「そんなら、清水へいくのはよして、これから四條の菊水へいつて、コーヒーでも飲まうよ。僕、何んだか、燈の明るいところへいつてみたいんだよ。」

「さうね、私もおいしいコーヒーなら飲み度いわ。」

兄妹はベンチをはなれて又歩きだした。

四條通りは、いつもの賑ひで、軽いセルを着た男や女が、足音も軽くぞろぞろ歩いてゐる。ネオンサインや、明滅燈はまるで魔術のやうにその町筋を奇怪な色でいろどつてゐた。

カツフエ菊水は客で一杯であつた。

小峰は面伏せな思ひをしながら、やつと奥の方のあいた卓をみつめて、妹と二人でそこへ入つていくと、大きな棕櫚竹の陰から、いきなり、

「ほ、小峰はん！」と、聲をかけるものがある。驚いてそつちをみると、その卓には、若い藝妓が一人と、あとはダンサーのやうな洋装をした女が三人ほどでやつてきてゐて、小峰に聲をかけたのは、その藝妓の方であつた。

小峰はそんな妓は見知らないの、人違ひだらうと思つてそつぽをむいてゐると、その藝妓は椅子から立つてきて、

「小峰はん、あんたはん、私を覚えてとくれやしまへんのか。はあ、頼りな。私、春千代どつせ。ほ、せんど春柳はんで逢ひましたやないか。」

さういはれると、小峰もやつと思ひ出した。何んでもあの時におそく来て、ひどく酔つてゐた妓があつたが、それがどうもこの春千代らしかつた。今夜も彼女は酔つてゐるとみえて、とてもいゝ機嫌であつた。

小峰は仕方がなしにこにこ笑つてゐると、春千代は心易だてにその肩へ手をかけて、

「あんたはん、やつと思出しとくれやしたんか。ほ、ほ、ほ。あんたはん、私をお忘れやしても、私はどうよう覚えてまつせ。もうあんた、そんなコーヒーちふやうなもんやめときやすいな。ちよつとボーイさん。こゝへウイスキーをひとつもて来てとくれやはんか。」

「いや、君、僕、ウイスキーなんか駄目ですよ。僕、酒はだめなんです。」

「ほ、ほ、ほ、まあ、よろしい。せんどかて飲まん飲まんちうて、とうとうおあがりやしたやないか。」
ボーイがウイスキーをもつてくると、春千代は、もうそこへ坐り込んで、自分もウイスキーをあつらへながら、

「なあ、小峰はん、あんたはん、宇野はんちふお方知つといやすやろ。やつぱり帝大のお方で。」

「え、知つてますよ。理科の助教授をしてゐる人でせう。」

「ふむ、そやのすて。あのお方に私、よんべ中村樓で逢うたんだつせ。ほてな、私、あんたはんのお話ししましたんえ。ほしたらな、一遍僕が連れ来てやるちうて、え、あんばいにくれやはりましたえ。あんたはん、宇野はんにお逢ひやすか。」

「え、僕はほとんど毎日逢つてますよ。」

「ま、さうどつか。ほんならあのお方と一緒に一遍私しらしとくれやすな。私な、何うなとして一遍あんたはんに逢はしてほしいちうたんどつせ。あんたはん、去年までボートの選手をしてやりましたんどつせな。私、ようよう知つてまつしやろ。私、京都の藝妓にしては、ちよつといきすぎてましてな。スポーツやたら、ダンスやたら、そんなもんが好きで好きでかなはんのどすがな。今も私、祇園ダンスホールへいてましてな。ダンサーの人とちよつと冷たいものを飲みこゝへ來ましたんや。あんたはんダンスおしやすか。」

「いや、僕は一向そつちの方は駄目なんですよ。」

「さうどつか。ほなら、今夜からお初めやすな。これからいきまへういな。私もどうせもう一遍ホールへ歸らんなりまへんよつてな。」

小峰はさういはれると、當惑して、

「いや、折角ですけど、僕、妹と一緒にんでね。」

「まあ、このお方があんたはんのお妹はんどつか。こら、失禮を。ほ、ほ、ほ。私またあんたはんのな、そ、あれや思うて、ちよつとぐらゐ悲觀してましたんやのつせ。ほ、ほ、ほ。ほんまに堪忍してくれやすや。」

八重子はてれて、困つたやうな顔をしてゐた。

春千代は酔つてゐるので、もう見境がなく、どうしても小峰をホールへ連れていくといつて聞かないので、八重子も氣の毒になつて、

「兄様、ぢやあの、ちよつといつてらしたらどう。私、お先に失禮しますわ。」と、いふ。

小峰はますます困つてしまつたが、春千代はもう自分で勘定をして、どんどん小峰を外へ連れだしてしまふ。

「なあ、あんたはん、お妹はんは何方へお歸りやすの。岡崎どつか。そやつたら、タクシさういうて

あげますわ」と、いつて、彼女は通りすがりの圓タクを呼んで、自分で金を拂つて、それへ八重子を乗せてしまふ。

八重子はいさゝか呆氣にとられて、

「ねえ、兄様、あの、そいぢや十一時迄に歸つていらしたつてね。お酒をのんぢやいやアよ。」と、耳打ちをして、そのまゝ歸つていつてしまつた。

踊る灯影

祇園ホールへ来てみると、そこも可成りな賑はひであつたり、樂座の方から聞えてくるジャズの噪音は、がんだん天井へひびいて、五十人ばかりの男女が、花のやうに入り亂れてをどり狂つてゐた。

小峰はそんなところへは初めてきたので、もうぼうツとしてゐた。

春千代は今菊水へ連れていつた三人のダンサーのなかの一人を連れてきて、

「なあ、小峰はん、この人、ますゑはんちうて、ようをどらほりますのどつせ。ほんでな、この人に手をとつて教へとおもらひやす。ステツプをお覚えやしたら、私がパートナーになつてあげますわ。私、あつちやにお客さんが来てやはりますさかい、一遍いてきますわ。私、ぢつきに又來ますさかい、ます

ゑはん、あんじよう頼みまつせ。」と、いつて、彼女は向ふの方へいつて、若い背廣の男と組になつて、さも愉快さうにをどりだした。

ますゑは、小峰かうぢうぢしてゐるので、そつと彼の手をとつて、

「さあ、あなた、此方へいらつしやいよ。こんなものは、譯ないんですよ。少しお慣れになれば、誰れだつてをどれるんですよ。遠慮なさるといけませんわ。」と、いつて、鳴り渡るオケストラの波のなかへ、巧みに小峰を誘ひ込んでいつた。

小峰は三十分ばかりをどつてゐるうちに、すつかり興味を覚えてきた。美しい女に手を握られて、すうすうとステップを踏んでいく氣持ちは何んともいへなかつた。小峰は元來がかうしたことは器用なので、ワルツをすぐに覚え込んでしまつた。

ますゑもうれしさうに笑つて、

「あなた、ほんとにいゝおみ足ですわ。スポーツをなすつた方は、足が軽うござんすのね。これなら、ぢきにうまくおなりになりますわ。」

小峰はもう面白くて耐らないので、

「いや、どうも君、僕は初めてなんですが、こんな面白いものとは思はなかつたですよ。君、いつまでもかうやつて僕と踊つてゝいゝの。番があるんぢやないの。」

「え、番はあるんですけど、春千代さんがこんなに札を下すつたんですよ。」と、いつて、ポケットから札を出してみせながら、「今夜中をどつてゝも、大丈夫なんですよ。」

小峰は札のことはよく分らないので、

「春千代さんはうまいんですか。」と、きくと、ますゑは向ふをどつてゐる春千代の方をみながら、

「え、あの方はもうとても手に入つたもんですわ。毎晩のやうにこゝへ来て踊つてらつしやるんですよ。ね。あなた、もうすつと先からあの方知つてゐらつしやるんですよ。」

「いや、僕、二度目なんですよ。」

「まあ、さうですか。ほんとに感じのいい方ですわね。」

「さうですか。僕、ふかくは知らんけど。……君は東京でせう。」

「え、私、東京ですよ。」

「どうも言葉がさうだと思つた。僕もやつぱり東京なんですよ。君、東京はどこで生れたの。」

「生れたのは神田ですけど、……」

「神田？ 神田といつても廣いが、何處いらです。」

「私、神田の猿樂町で生れたんですけど、私の父達は小石川に住んでるんですよ。」

「小石川？ 小石川なら僕もさうですよ。小石川の何處です。」

「水道町、御存知でせう。水道町の三丁目なんですの。」
 「へえ、そりや不思議ですね。僕もやつぱり水道町なだけど。お父さんは何か御商賣でもしてゐるんですか。」

ますゑはさも吃驚したやうにじいツと小峰の顔をみて、

「まあ、ぢや小峰さんていへば、お宅はあの小峰病院の小峰さんなんぞでせう。あら、まあ、どうしませう、私恥かしいわ。」

「はゝゝゝ。恥かしいなんて、そんなことはないぢやありませんか。どうして、君、僕のところを知つてゐるんです。」

「ほゝゝゝ。困りましたわねえ。まあ、ようござんすわ。とにかくもつと踊りませうよ。」

さういつて、ますゑは又小峰の手をとつて、をどりの群へ入つていつた。

そこへ春千代がやつてきて、

「ほ、小峰はん、あんたはん、早うおすな。もううまいことお踊りやすやないか。一遍私と踊つてほしわ。」さういつて、彼女はいきなりますゑを押し退けて、小峰の手をぎうツと握る。

小峰は脂のじつとりした手で握られると何んだか體がぞくぞくしてきた。くるりとターンする度に、香水の強い匂ひがむんむとするので、彼はとても惱ましくなつてしまつた。

「ほんまに小峰はん、あんたはん天才やわ。えゝ工合どすやないか、ほゝゝゝ。これから毎晩、をどりにおいでやすな。ほて、今夜はどうおしやすの。歸りに私ときあつとくれやすか。あんたはん、どこぞいといやすお茶屋はんおすか。」

「いや、僕は、さういふ家は一軒もないんですよ。京都はむづかしいんでね。」

「ほゝゝゝ。ほんまになあ。祇園のやうなしんきくさいところはおへんわ。ちよつと時代におくれてますさかいな。ほゝゝゝ。ほんなら、私、えゝ家を御紹介しますさかいな。そこへいとくれやす。もう何時どつしやろ。ほ、もう十一時どすな。ほなら、ぢきに行きまほ。」

春千代は、やがて歸り支度をしましたが、ますゑは出口まで送つてきて、小峰に又どうぞ明日の晩もきてくれといふ。

春千代は笑つて、

「なあ、小峰はん、あんたはん、私と一緒にやうてはいきまへんえ。ますゑはんは、東京の人やさかい危いわ。ほゝゝゝ。」

ホールを出ると、春千代はしんと更けた富永町の方へ曲つて、その市光といふ茶屋へ小峰を連れていつた。小峰ははじめて念願がかなつたので、もう有頂天であつた。

春千代はそこでも又酒を浴びるほど飲んだ。酔へば酔ふほど彼女は、色めかしくなつていつた。

「なあ、小峰はん。こないにしてると、私、もうあんたはんに、二年も三年も前から逢うてるやうな気がしますえ。それもそやわ。あんたはん、去年の春の石山のレースへお出やしたえな。あん時に、私、六回ともみにいたんどつせ。あんたはん、整調どしたえな。私、その時からあんたはん、好きやつた。」
小峰は嬉れしくなつて、

「ほう、ぢや君、あのレーンをみにきてくれたんですか。あの時には、幸ひ醫科に勝てたんでね。とても愉快だつたですよ。」

「私もやわ。私、もう醫科がきつう嫌ひどしてな。何處ぞのクルーが負かしてくれやすやうにちうて神様に祈つてましたんどつせ。ほたら、理工科が勝たはつたんで、私、もう夢中になつて、應援したんどつせ。」

「ぢや、君、こないだ春柳で逢つたあの時に、僕だつていふこと知つてたんですか。」

「ふん、えら知りやわ。あのときに、あんたはんのねきへいかう思うてたんどつせ。豆鶴さん姐さんがゐりましたやろ。それでちよつとつしんでましたんや。私、姐さん方に憎まれてますさかいな。ほゝゝゝ。」

「さうですか。そんなら、僕も話しすりやよかつたな」

「ほゝゝゝ。そやけど、私、ほんまにあんたはんすつきやわ。ひと眼みたとき好きになつたのようち

ふ唄がありまつしやろ。あれどすな。あんたはん、これからじようじ逢うとくれやすな。ほんまどつせ。」

「いや、僕、逢ひ度いけど、資本がつかないんでね。それで悲觀してるんですよ。」

「ま、きつうおいやすこと。こゝへ来て、私ひとりしらしとくれやすのやつたら、そんなお金ちふやうなもん、たんといらしまへんえ。えゝもんすきおしやしたら、限りがおへんけどなあ。」

「えゝもんすき。そりや何ういふことなんです。」

「ほゝゝゝ。東のお方には、分らしまへんやろな。えゝもんすきいうたらな、浮氣をするちふことやわ。ほゝゝゝ。」

「あゝ、さうか。浮氣のことをえゝもん好き。なるほど、そりやさうですね。はゝゝゝ。」と、いつて小峰は盃をおきながら、四邊をみまはして、

「ねえ、春千代さん、こゝの家へは、舞妓さんなんかもやつぱりくるんですかね。」

「そら、しらしてあげたら、來やりますがな。喜久勇はんに逢ひとおすか。」

「さあ、逢はしてくれりやなほいゝけど、……」

「ほゝゝゝ。怪體なゆひ方。そやけど、もう喜久勇はんはおゝきやすな。今夜も又きつと春柳はんへゝてやはりまつせ。もうあの人の襟かへも、近々らしうおすよつてな。」

「その襟かへつていふのは、どういふんです。」

「襟かへどつか。襟かへいうたらな、旦那はんが出来て、藝妓はんにならることですがな。」
 「ぢやあの人はもう藝者になるんですか。そりや残念だなあ。あんな可愛らしい人をねえ。」
 「ほゝゝゝ。さうかてあの人ももうあんたはん、今年十七やわ。もう襟かへせんならん年ですにやわ。」
 「十七。ほう、もう十七になるんですか。驚いたなあ。まだ十五位にしかみえませんねえ。」
 「ほんまになあ。あの人は、氣が初心なさかい、年をとらはらしまへんのやな。初めてお逢ひやすお客さんは、誰かて十七にみやはるお方はあらしまへんえ。」
 「全くですなあ。十七ね。はゝゝゝ、可笑しいな。それでその、旦那つていふのは、もう極つてゐるんですか。」

春千代は笑ひ出して、

「あんたはんも、ほんまに鈍なお方やなあ。あの高安さんが、喜久勇はんの旦那はんやおへんか。それさままでお知りいしまへんのか。は、照れくさ。」

小峰はそんなことにはちつとも氣がつかつたので、顔を紅くしながら、

「へえ、あの高安さんが。僕、實際何んにも知らないんですからね。君、いろんなことを教へてくれ玉へよ。一體、その旦那つていふものは、何ういふ役をするものなんですか。」

「ほゝゝゝ。私、もう厭やわ。なんぼ大學へいてやはる學生はんかて、旦那はん知らんちふやうなお

方私知らんわ。ほゝゝゝ。ほんまにお知りいしまへんのやつたら、いうたげまへうか。旦那はんちふのはな、たんとお金をつんで、喜久勇はんの貞操を買うて上げやはるのどすがな。よう水揚げひますやないか。あんたはんお知りいしまへんか。」

「いや、知らないですよ。ぢやつまり喜久勇さんの體を買つてしまふことなんですわ。」

「さうどす、さうどす。ほて、藝妓はんにならばつてからあとも、月々あんじようしとおくれやすのどつせ。」

「ほう。随分金がいることでせうな。」さうはいひながら、小峰はもう何處となく顔色が變つてゐた。

春千代は手酌のみながら、

「さあ、何んぼいるかそなこと知りまへんけど、高安はんやつたら、きつと派手なことしやはりまつしやるえ。あの人は大阪でも指折りの株屋はんやさうにおすさかいな。そやけど、喜久勇はんは氣の毒におつせ。あの人、賢いさかい、顔には出さはらしまへんけど、心ではあの高安はんが嫌ひで、きらひでかなはんのどすてな。私もあの高安はん、きらひやわ。あんなえらさうにしてやはる人ておへんわ。」

小峰はもうそんなことは浮の空で聞いてゐた。彼にはその晩から、一層深い悩みが熱病のやうになつて胸に殺到してきたのであつた。

それから、小峰は、もう毎晩のやうに祇園ダンスホールへ通つた。氣風の朗かなポートマンでゐな

がら、今迄はカツフェへさへさう滅多にいかなかつた彼が、春千代の色めかしい誘惑に引ツかゝつてからは、ほんの僅かな間にすつかり人柄が變つてしまつた。

ホールへいけば必ず春千代に逢ふ。逢へば歸りにはきつと市光へしけ込んで、そこで夜を更かしてしまふ。小峰のやうな一本氣な性質の青年か一度かうなると、もう一寸手がつけられないのであつた。

妹の八重子は、兄の素行をひどく心配して時々泣いて意見を述べた。併しそんなことは全く糠に釘であつた。八重子が何よりも恐れたのは、金のやりくりであつた。小峰は東京から爲替がつくと、それをもつてぼいと下宿を出てしまふので、八重子は、もうどうなることかと思つて、はらはらしてゐた。

或晩のこと、小峰は例のとほり祇園のホールへいつてゐたが、十一時になつても珍しく春千代が姿を現はさない。そこで仕方なしに一人で市光へ寄つてみると、若い女將は笑つて、

「なあ、へ、小峰はん。あんたはん、今夜すかたん嚙まされはつたんと違ひまつか。春千代はん今夜はホールへいてやはらしまへんやろ。」

小峰はいつもの二階座敷へ上りながら、

「いや、僕ね、もう三時間も待つてたんだけど、來ないんだよ。どうしたんだらう。」

「ほんまにせうむない人や。どないにしやはつたんやろ。今店へたんねにやつてみますわ。」

春千代の店へ小婢をやつてみると、春千代は今日は午後から客と一緒に神戸のホテルへ踊りにいつた

といふ。多分今夜はおそくとも歸るであらうから、もし歸つたら、すぐにおはなをそちらへ廻はしますといふ返事であつた。

小峰はぼんやり待つてゐるのも手持ち無沙汰なので、ふと思ひ出して、喜久勇をしらしてみた。女將は笑ひながら、上つてきて、

「小峰はん。あのな、喜久勇はんはな、春千代はんからしらしたらいかんちうて、きついに止められてますのやのつせ。そやけどな、ちよつとやつたら、私のはからひで逢はしてあげますわ。そのかはり私に一遍南座のお芝居を奢つとくれやすか。ほゝゝゝ。」

「いや、芝居ぐらゐなら、いつでも奢りますよ。春千代さんだつて何もそんなに止めることはないでせう。相手は舞妓さんぢやないか。はゝゝゝ。」

「しかも旦那はんのきまつたる人どすさかいな。ほゝゝゝ。そやけど、今頃ゐやはりまつしやるか。あの人もう北濱はんでべつたり大勝はんへいてやはりますさかいな。」

その晩はどうしたまはり合はせか、喜久勇はしらすとすぐにやつてきた。小峰はひどく喜んで、

「おう、喜久勇さん。よく來てくれましたね。大變に早かつたぢやないの。はゝゝゝ。」

喜久勇はしづかに座敷へ入つてきて、

「ほ、小峰はん、あんたはんどしたえなあ。まあ、ほんまに長いこと。」

といふ。多分今夜はおそくとも歸るであらうから、もし歸つたら、すぐにおはなをそちらへ廻はしますといふ返事であつた。

小峰はぼんやり待つてゐるのも手持ち無沙汰なので、ふと思ひ出して、喜久勇をしらしてみた。女將は笑ひながら、上つてきて、

「小峰はん。あのな、喜久勇はんはな、春千代はんからしらしたらいかんちうて、きついに止められてますのやのつせ。そやけどな、ちよつとやつたら、私のはからひで逢はしてあげますわ。そのかはり私に一遍南座のお芝居を奢つとくれやすか。ほゝゝゝ。」

「いや、芝居ぐらゐなら、いつでも奢りますよ。春千代さんだつて何もそんなに止めることはないでせう。相手は舞妓さんぢやないか。はゝゝゝ。」

「しかも旦那はんのきまつたる人どすさかいな。ほゝゝゝ。そやけど、今頃ゐやはりまつしやるか。あの人もう北濱はんでべつたり大勝はんへいてやはりますさかいな。」

その晩はどうしたまはり合はせか、喜久勇はしらすとすぐにやつてきた。小峰はひどく喜んで、

「おう、喜久勇さん。よく來てくれましたね。大變に早かつたぢやないの。はゝゝゝ。」

喜久勇はしづかに座敷へ入つてきて、

「ほ、小峰はん、あんたはんどしたえなあ。まあ、ほんまに長いこと。」

「ほんとに久しぶりでしたねえ。どうしてゐます。相變らずですか。」

「へ、おほきに、私な、美濃花はんからしらしとくれやすやろ思うて、毎日待つてたんどつせ。今日もな、豆鶴はん姐はんとせんどいうてた。あんたはん何んでしらしとくれしまへんの。」

「いや、僕ね、此間うち毎晩のやうに、美濃花の前を通つただけど、どうも入り憎くつてね。はゝゝゝ。僕、ほんとに君に逢ひ度かつたんですよ。」

「私かてやわ。あんたはん、このごろ春千代はん逢はんばかりしらしとゐやすのどすてなあ。ほんまにいけずやなあ。」

さういふ度に、喜久勇の頭では、かんざしの銀ベラが、ちらちら美しく光る。

小峰はどういつていゝか分らないので、ひどく困つて、

「僕ね、別にさういふ譯ぢやないんだけど、このごろよく祇園ダンスホールへいくもんだから、つい逢つてしまふんでねえ。」

「そら、そないいはんなりまへんやろ。私、ようよう知つてまつせ。あんたはん、毎晩春千代はん姐はんにお逢ひやすのどすてなあ。」

「はゝゝゝ。こりやどうも困つたなあ、君誰れからそんなこと聞いたんです。」

「私な、豆鶴はん はん聞いたんどつせ。よんべも豆鶴はん姐はんがあこへの階下へえゝもんよばれ

にいといやしたら、あんたはん逢うたちうてやりましたえ。」

小峰はすつかり酔つてゐるので、埒がなかつた。彼はしきりに頭ばかりかいて、苦笑ひをしてゐた。

「僕ね、實際さういふ氣持ちでホールへいくんぢやないんですがなあ。どうも困つたなあ。」と、いつて何んとかして陣をたて直さうとしながら、「まあ、いゝ。とにかくそのうちに僕、何んとかしますよ。それにしても喜久勇さん。今夜はよく家にゐましたねえ。僕、君が来てくれたゞけで、もうとても嬉れしんですよ。」

「私、家にゐゝしまへんわ。私、今迄木屋町へいてた。」

「木屋町へ。やつぱりあの高安さんですか。」

「違ひます。北濱はんは昨夜から東京へいてやはりますのどつせ。」

「へえ、東京へ。さう、さう、あの方は、東京にお店があるんでしたねえ。毎月あちらへいかれるんですか。」

「さうです。」

「君、どうして連れてつてもらはなかつたの。」

喜久勇は、ぬけるやうな白い頬にちよつと微笑をうかべたつきり、何とも答へなかつた。

あんなに逢ひ度く思つてゐても、かうやつてたつた二人でさしになつてみると、さて一向話しが出て

來なかつた。小峰はしまひには自分でも自烈ツ度くなつて、酒ばかり飲んでゐた。いくら酔つても、彼は妙に内へ内へと氣がめいるばかりで、喜久勇の顔を眞面にみることにさへ出來ないのであつた。

そのうちにもう午前の二時になつてしまつたので、階下からは女將があがつて來て、

「小峰はん。あんたはん、どうおしやす。今夜はうちへ泊つとくれやすか。もしさうおしやすのやつたら、喜久勇はんの家へもさういうてあげんまりまへんさかいな。喜久勇はん、あんた、おとまりやしても大事おへんか。」

喜久勇は平氣な顔で、

「私、大事おへん。えらいすんまへんけど家へいうて、着物もてきてもらうとくれやすな。」

小峰はとうとうそのまゝ市光へ泊つてしまつた。京都の習慣で、例の雜魚寢をやるのだが、まさか小峰と喜久勇を二人きりで寝せることも出來ないので、仲居がきて一緒に寝てやつた。

小峰は曉方になつて、喉がかわいてたまらないので、ふつと眼をさましてみると、すぐ隣りには、喜久勇がおしどりの鬚を傾けて、まるで人形のやうな顔をして、すやすや寝入つてゐる。その寝顔は繪からそのまゝぬけ出てきたやうな美しさだつた。枕もとにつけてある小行燈の光は、統のやうな顔の地肌をほんのりかすませて、小夜着の袖からは長襦袢の緋鹿の子が燃えたつやうにふりこぼれてゐた。

小峰はぞつとするやうな氣持ちがした。冷たい水をぐうつと飲むと、酒の酔ひは再び胸にかへつてき

て、彼はどうしたのか夜着のなかへもぐつたまゝ、しくりしくり泣き出してしまつた。どうかしてその聲を、喜久勇や仲居に聞かれまいと思つて、小峰は實際息がつまるやうな思ひをしたのであつた。

妹の心

その翌朝、喜久勇が歸つていつてしまふと、小峰は宿醉ひでどうしても起きられないので、とうとう夕方まで、市光の奥座敷へ寝てゐた。その日の氣持ちは、何とも云ひやうがなかつた。彼は喜久勇に對して無限の愛を感じると同時に、春千代と過つてかうなつたことが、心から悔恨された。事實彼はもう春千代とはぬきさしのならない關係にまで進んでゐたのであつた。

春千代には今特別に旦那といふやうなものはない。彼女は二年ほど前までは、神戸の廣谷といふ裕福な鐵材輸入商の世話になつてゐたが、その旦那は非常に、心もちのひろい、粹な人で、春千代に思ふ存分我儘をさせてくれた。それで彼女も今のやうな性質になつたのだが、さういふ旦那はながくつかないもので、一昨年の夏、一緒に別府へ遊びにいつてゐて、その廣谷はんは、風呂のなかで突然腦溢血を起してあつけもなく死んでしまつたのであつた。尤も廣谷はんは、五十八歳であつた。

廣谷の息子俊太郎といふのが、又親父に似た氣の通る男で、跡目を相続すると間もなく、京都へやつ

てきて、親父がかねがねからいつてゐたからといつて、彼女に一萬圓の小切手をもつてきてくれたのであつた。彼女はひどくよろこんで、それで借金も返し、やつと自前の樂な身分になつたわけであつた。従つて彼女としてはもう最近、藝妓に出てゐるのがいやでたまらないので、出来ることなら、稼業をやめて、氣隨に踊りでも踊つてくらし度いのが山々であつた。

春千代は大學の宇野理學士に逢ふ度に、小峰のことを根掘り、葉掘り訊いた。小峰は大學院の學生の中でも非常に出來のいい男で、近藤博士も實は將來自分の片腕として働かせるつもりで親身も及ばないほど世話をしてくれてゐるのであつた。彼の専門であるボール・ベアリングの研究は、現在でも非常に重要なものであつて、飛行機や船用機關や、工場動力の機關などにも必要かく可からざるものであり、將來は益々研究していかなければならないものであつた。であるから、彼が大學院を出るのを、三井や三菱や、それから海軍の細密機械工場などでは手ぐすねひいて待つてゐる譯であつた。

春千代はそれを聞いてからは、もう安心して小峰の自由になつた。祇園では、旦那以外の形式で、客と關係を結ぶのを、「三ばい」と稱していやしむ風習があるので、春千代は市光以外のところでは決して小峰に逢はないやうにしてゐた。

小峰もむろん、春千代の心もちはそれと察してゐた。寝物語などにもよく末の話が出るので、彼女はいつかは自分と結婚をしようと考へてゐるらしいこともよく知つてゐた。それだけに小峰は今更ながら

ひどく當惑してしまつたのであつた。

喜久勇に對する戀ごころは、決して肉の感じを伴つてゐなかつた。それだけに却つて深くもあるし、危険も多かつた。舞妓の誘惑といふものは、そこにあるのであつて、この花がどう咲くかといふところに、一種性を超越した興味があるのであつた。

小峰は又一方では今迄無理算段をしてやつとどうやら市光の勘定だけは拂つて來たが、今月は全くあてがなかつた。少くとも百圓以上の借りが溜つてゐるに相違ないと思ふと、それも彼にとつては憂鬱を誘ふたねになつた。しかももうこれからさきは、全然金の出るあてがないので、彼は考へれば考へるほど情なくなつてしまつた。

小峰は日のあるうちはどうしても下宿へかへる氣がしないので、又ホールへいつてみた。春千代はまだ神戸から歸つて來ないとみえて、影も形もみせない。で、仕方がなしに、ますると七八回ほど踊つてそのまゝぶらりと歸らうとすると、その時、まするは何んと思つたか、彼のそばへよりそつてきて、「ねえ、あなた、私ね、實はちよつとあなたに願ひし度いことがあるんですけど、今夜こゝが退けてから、何處かへ一緒に散歩でもして下さいませぬ。」と、さゝやく。

小峰は無雜作にうなづいて、「あゝ、散歩しよう。僕ね、家に用があるから、ちよつと歸つてきてまた出てくるよ。何處で逢はう。」

「さうね、私、往來なんか歩いてゐて、人にみられるといけなから、いつそ私の家へいらして下さるといゝんですけど。」

「家は何處。」

「あの、私の家はね、下立賣なんですわ。」といつて、ますゑは手提の中から名刺を出して小峰に渡す。それは前以つて用意をしておいたものらしく、名前の傍に小さくペンで所番地がかいてあつて、停留場からの地圖までかきそへてあつた。

「ぢや、君、何時にしよう。君のいゝ時に僕たづねていくよ。」

「さうね、私、今日は早番ですから、十時半には家へ歸つてますわ。私の家はね、おつかさんとたつた二人つきりなんですから、ちつとも遠慮はいりませんのよ、どうかそのおつもりでね。」

ますゑは眼ませでいひながら、そのまゝ小峰を入口の方へ送り出した。よくみると彼女はそれだけいふのもやつとらしく、さあらぬ顔はしてゐながら、ぶるぶる唇をふるはしてゐた。

小峰はまだ宿酔ひの頭痛がとれないので、ホールからぶらぶら歩いて歸つた。岡崎の疎水のところまで来ると、その時、ほの暗い柳の樹陰から、いきなり、

「あらッ。」と、叫びながらとびだしてきた女がある。よくみると、それは妹の八重子であつた。

「お、びつくりさせるなよ。何んだつてそんなところへ隠れてゐたんだね。」

八重子はもうしくしく泣きだして、

「兄様、私、あんまり兄様が歸つてきて下さらないから、今様子をみにこゝまで出てきたんですのよ。兄様、ほんとに随分ねえ。昨夜はどうとう歸つてらつしやらないんですもの。」

小峰は妹の涙をみると、もう耐らなくなつて、

「いや、僕ね、歸らうと思つただけで、少し酒を飲みすぎて、起きられなくなつちやつたんだよ。僕がわるかつたんだから、悪く思はないでくれよ。」

「悪くなんかおもしませんけど、ねえ、兄様、私もうしみじみ心細くなつちまひましたわ。兄様、ほんとにしつかりして下さらなけりや、私、困つちまひますわ。」

「もうお前、そんなことをいふなよ。僕ももう今夜といふ今夜は夢がさめたからね、もう僕決してホー
ルなんかへいかないから。」

「ホールはいゝんだけど、あとがいけないのよ。兄様、かくしてゐらつしやるけど、私、もう何もかもちやんと知つてるんですわ。」

さういひながら、八重子はおいおい泣き出してしまふのであつた。

小峰はやつとそれを宥めて、下宿へ歸つていつた。

八重子は机の前へ坐ると、やがて泣きながら、教科書の間から一通の手紙を取出して、

「ねえ、兄様。これ今朝来たのよ。まあ、これをよんで御覽になつてよ。」
ひよいとみると、それは父親から来た手紙であつた。いつになく分厚な手紙なので、小峰も思はずぎくりとしてしまつた。

幾重にも巻き込んだ巻紙を少しづつほぐしながらよんでいくと、その手紙には恐ろしいことが書いてあつた。小峰の放埒の段々が誰れから知れたものか、東京へ知れて、父博士はもうカンカンになつて怒つてゐるのであつた。折角大学院までいつたのに、今になつてグレるとは何事だ。そんな情ないお前とは思はなかつた。父ももうすっかり絶望したから、向後は一切送金もしない。面倒もみてやらないから勝手にせい、といふ絶縁状であつた。すっかりよんでしまふと、小峰もさすがに顔色をかへてしまつた。自體小峰と八重子は東京の家では極めて不遇な地位にゐるのであつた。といふのは、彼等二人を生んだ母親は、今からもう八年も前に病歿して、今では小峰家は後妻の伊志子の天下になつてゐるのであつた。伊志子は年も非常に若いし、父博士が手をつくしてもらつた女であるだけに、父博士に對しては絶對の力をもつてゐた。小峰や八重子はその後妻の伊志子とどうも折合ひがわるいので、實はそのために京都へ別居させられてゐるやうな形になつてゐるのであつた。

父博士も伊志子をもらつてからは、生活向きも恐ろしく張つて來たし、それに病院の經營の方にも無理が出来て、昨今はかなり經濟的にも手づまつてきてゐるのであつた。それ故、どつちかといふと、小

峰の放埒を云ひたてに、月々の送金をたつといひだしたのは、一方からいふと手許が苦しいからでもあつた。

八重子はしよんぼりしながら、

「ねえ、兄様。もう仕様がないわね。お父様がかう仰りだしたら、もうどうしたつてお願い出來ないでせうから、私、すつかり決心をきめてしまひましたのよ。」

「決心で、どうするんだい。」

「どうするつて、もうどうにも仕様がないでせう。今迄かうやつてお金を送つていたゞけたのが、むしろ私達には仕合はせだつたんで、お母様はもう兄様が大學を卒業なすつた時に、自立しろ、自立しろつて、さういつてらしつたんですからね。」

「うむ、さういへば、さうだね。併し僕はもうあと七八ヶ月で大学院を出られるんだからね。それまで何んとかして下さりや、僕あとはどうにでもするんだのになあ。」

「兄様、もうそんなことを仰有るのは、愚痴よ。ですから兄様も、覺悟をきめて下さいませ。私ね、幸ひ伊藤せい子さんが今高島屋呉服店へ出てゐらつしやいますからね。明日あすこへいつて、就職口をみつめて來ようと思つてますのよ。四五日前に遊びにいらした時に、何んでもキャッシャーを二三人募集してゐるとかつてさういつてらつしやいましたからね。さうして私、出來るだけ早く職業をみつ

て、働きますわ。さうしないと、もう毎日の御飯をいただくことも出来なくなりますからね。」
 小峰はもうすつかり悄れ返つてしまつた。自分もさうなれば何んとか生きる道を發見しなければなら
 ないのだが、彼にはそれがどうにも考へがつかなかつた。彼は寧ろ父博士を恨み度いやうな氣持がぐん
 ぐん胸へつきあげてきてしやうがなかつた。

妹はやがて涙をふいて、

「ねえ、兄様、お腹はどうなの。空いてらつしやりやしませんの。」と、いふ。

小峰は今日は晝からまだ何んにも食べてゐないので、酒がさめると急に腹がぐうぐういふほどすいて
 きた。八重子はそれを顔色でみてとつて、實はさう訊いたのであつた。

八重子はやがて母家の方へいつて、残つた飯をもらつてきて、昆布のおだしでおいしい雑炊をたいて
 くれた。

小峰は妹のやさしい心づくしが身にしみて、あつい雑炊をすゝつてゐる間にも、涙がこみあげてき
 て耐らなかつた。それを胡麻化さうとしてやたらと咳ばかりせいてゐた。もう彼はますますの家へ訪ねて
 いくどころの騒ぎではなかつた。

寄生木

東京からの送金が絶えたことは、小峰にとつては、とにかく致命的な打撃であつた。彼はそれから四
 五日は、大學へも出ずに、家にばかりごろごろしてゐた。併し晝間のうちはさうでもなかつたが、夜に
 なるに祇園の明るい灯の色が、幻のやうに心にうつつて、彼は性根づくよりも、あべこべに一日に自
 暴自棄に陥つてしまつた。

八重子は親友の伊藤せい子の取り做しで、やつと高島屋の店へ入れてもらふことが出来た。キャツシ
 ヤーといつても、助手からつとめあげなければならぬので、日給は僅か六十錢であつた。それでは兄
 妹二人がたべていける道理がなかつた。第一月十八圓では間代を拂つたら、あと電車賃位なものしか残
 らなかつた。

小峰は自分もどうかする、すると口癖のやうにいつてはゐながら、毎日相變らずごろごろ寝てばか
 りゐた。彼は事實、もう何んにもする元氣がないのであつた。

或る晩のこと、小峰はもうどうにも仕様がなから、近藤先生のところへいつて、すつかり事情を打
 明けて、何處かへ就職口をさがしてもらふといつて、ふらりと下宿を出た。しかし彼は近藤先生のところ
 らなぞへは、むろんいかなかつた。何か心の底から衝戟するものがあつて、彼は春千代に逢ひ度くて耐
 らなくなつたので、その足でホールへいつたのであつた。

幸ひホールには春千代が來てゐた。小峰はしよんぼりしてゐるまするの顔をみると、いつぞや約束を

すつぽかしたことを思ひ出してひどく氣の毒になつたが、しかし今はそんなことにかまつてゐられる場合ではなかつた。彼はもう餓ゑたやうに、いきなり樂音の波へまき込まれて、春千代とフォックスストロツトを踊つた。

春千代はをどりながら、怨じ顔に、

「あんたはなんて、ほんまに頼りないお方やなあ。私、逢ふ用があるのに、あれからちよいとも來とくれやしまへなんだえなあ。」と、いふ。

小峰は顔を押しつけるやうにしながら、

「君だつてさうぢやないか。此間の晩、二日もすつぽかされて、僕とても寂しかつたよ。神戸へ何にしにいつてたんだね。」

「あ、あの晩どすな。えらい濟まんこと。私な、神戸の港ホールへ競技にいてましたんどつせ。ほてな歸りにお客さんに中のお芝居へ連れてしてもらつた。ほんであの翌日の十時頃にこゝへ歸つてきましたんや。ほたらもうあんたはんお往にやしたあとやつた。」

「僕ね、君に大急ぎで相談したいことがあつたんで、そりや、君、君が歸るのを待つてたんだぜ。」

「さうどしたか。ほんまに濟まんこと。そやけど、そないに逢ふ用のあるあんたはんが、何んであれから一度も顔みせとくれやしまへんの。」

「いや、僕ね、實は困つたことが出來て、弱つてたんだよ。そのことで毎日方々奔走して歩いてゐたもんだからね。」

「そら、いきまへんな。何うおしやしたんどす、心配なことどつか。」

「うむ、まあ、こゝぢや話せないからあとで市光へよつて、詳しく話しますよ。僕ね、ほんとに弱つてゐるんだ。」

さういひながら踊つてゐると、そこへどうしたのか、背廣を着た男が四五人、どやどやと何處からか立つて來て、踊つてゐる春千代と小峰をだしぬけにまはりから取圍んだ。春千代は驚いて、をどりをやめてしまつたが、小峰もはツとして、ステツプを落とした途端に、そのなかの髯面のひとりはいきなり小峰の肩へ手をかけて、

「わい、小峰ちふのやな。ちよつと話したいことがあるさけえ、外へ出てんか。」と横柄にいふ。

小峰は變に思つて、

「何に、僕に用がある。何の用だね。それよりも君は一體、誰れだね。」

「俺かい。俺は加藤鐵舟ちふもんや。さういうたら、わい知つてるやろ。いつぞや俺の身内のもんが、えらいけぢめ食つておほきにや。一遍その返報したると思つたが、え、折がなかつたもんやてな。」

小峰はそれを聞くと、はツと思ひ出した。下河原の暗闇横丁で喜久勇を襲つたあの加藤の一味だなと

気がつくとも、彼は體中の血がさつと湧き上つてきた。

小峰は態と落ちつきはらつて、

「うむ、加藤つていふ名前は覚えとるよ。それで何かい、今頃になつてあん時の因縁をつけに來たのか。」
「まあ、何んでもよろしい。一遍河端へ出てもらはうかい。」

加藤はさういひながら乾兒達らしい若いものに眼くばせして、小峰をむりやりに戸外へそびき出さうとする。春千代はそれと知てばた〜マスターの方へかけていつて、救ひを乞つた。

小峰は戸外へ出たら、不覺をとるかもしれないので、こゝのホールでどれか一人やツつけてしまはうと思つた。彼は自暴自棄が手傳つてゐるので、ひどく狂暴になつてゐた。彼は戸外へ出るやうな振りをして隙をみせてゐる加藤のわきへすり寄つていつたかと思ふと、いきなり彼の上衣の前をひツつかんで見事な腰車にかけて、ツシンとホールの床へ投げ倒した。

加藤もふいだつたので、ぎやツといつたまゝ床へへばりついてしまつたが、小峰は忽ちそのうへ馬乗りになつて、両手で力一杯にぐい〜首を絞めつける。乾兒達はそれツといふので、彼のまはりへ立重なつて、どうかして加藤から引放さうとしたが、三人で一緒に立ちかゝつてゐるので、却つて手さばきがわるくて、小峰ひとりを持ってあつかつた。

そこへ踊つてゐた連中もばら〜集つてきたので、乾兒達もどうにも出來なくなつて、人混みにまぎ

れて入口の方へ遁げていつてしまつた。

小峰は笑ひだして、

「實にどうも頼み甲斐のない奴等だなあ。は〜は〜。親玉をおいて遁げていつてしまふのは、薄情だなあ。」と、いふ。

踊つてゐた連中も、ワハハ笑ひだしてしまつた。

小峰はやがて加藤を引摺り起して、鼻血をふいてやりながら、

「おい、貴様、何か文句があるんなら、こゝでいつたらい〜だらう。貴様のやうな奴は何人かゝつて來たつて、驚く僕ぢやないからな。氣障な眞似をするのはよせよ。何か話があるんなら、貴様ひとりで來たつて分るぢやないか。生意氣に腕だてしようとするから、痛いめに逢ふんだぞ。は〜は〜。」

加藤はまだよろ〜しながらハンケチを出して、鼻血を押へてゐたが、乾兒達がゐなくなつたので、苦笑ひをしながら、

「なあ、小峰はん、かう出鼻をびツしやりやられては、もう喧嘩は俺の方が負けやな。俺は何も腕だてしようちふので、こゝへ來たんやないのやぜ。わいの方が先へ手を出したんやないか。」

「は〜は〜。理窟をいふなよ。頭數の多い喧嘩はかうしないと立ちおくれになるからな。さあ、こゝでも話せまいから、とにかく僕のいくところへ來い。懲りるやうにもつとこなしてやるからな。」

小峰は猫の子でもつるすやうに、加藤のカラーを後からしつかりひつつかんで、ホールの裏口から白川の角の方へ出ていった。春千代も面白さうな顔をして、あとからついてきた。

小峰は白川の河岸の暗闇へ出ると、もう一度加藤を小突き廻して、

「さあ、貴様、何かいひ分があるんなら、こゝでいへ。事と次第によつたら、生命のやり取りぐらゐやつてやるよ。さ、どうだ。」と、いつて、首をぐいと締めあげる。

加藤は吐きさうにぎう／＼呻りながら、

「あ、もう勘辨してくれ。俺あ死ねわい。頼みやさかい、その手、ゆるめてくれんかい。」

「はゝゝゝ。意氣地のない奴だなあ。」

「いや、俺は何にもわいに腕だてしに來たんやないちうてるやないか。そんな亂暴してくれたら、死ぬがな。」

「はゝゝゝ。」

加藤の方から泣きを入れてきたので、小峰はやつと手をゆるめて、

「ねえ、春千代さん、こいつ何か云ひ分があるに相違ないから、どこか一杯飲める家へでも連れてつて泥を吐かせようぢやないか。これから煩さくつけまはされると面倒だからなあ。何處かいゝ家はないかね。」

「さうどすな、ほたら、繩手のマドロスへでもいきまへうか。あこやつたら、おツさんもよう分つた人どすさかいな。」

「よろしい。ぢやそこへいかう。」

加藤はズボンの泥をはたきながらあとからついてきた。

悲しき貞操

マドロスといふのは、三條の大橋のすぐ手前にある小さなカツフェだつた。そこのおツさんといふのは、もと萬養軒の料理番をしてゐた男で、こゝいらでの顔役であつた。そこならちつとぐらゐ亂暴をやつても、おツさんが引受けてくれると思つたので、春千代はそこへ二人を連れていつたのであつた。

加藤は初めはしきりに警戒してゐたが、ウイスキーを四五杯飲むと、すつかり羽目を外して、ぼつぼつ泥を吐きだした。彼は今夜ホールで芝居を打つたのは、實に意外なことからであつた。

加藤はその晩は、あべこべに高安に使はれて、小峰に渡りをつけに來たのであつた。といふのは、源因はあの喜久勇に關することであつた。喜久勇はもう明日にも高安で襟かへをするといふ噂はたてられてゐながら、今だにその運びがついてゐないのである。それは當人が病氣で寝てゐるせゐもあつたが、

しかし高安のさぐるところによると、あの喜久勇は内々小峰に思ひをよせてゐるので、それがためにどうしても高安のいふことを聞かないのだと、さういふことになつてゐた。

もともと喜久勇の家といふのは、立派な寫眞屋で、父親もさんざ祇園で極道をした、いはゞ粹のはてなで、彼女も實は好きで舞妓に出してあるのであつた。それだけに普通の見習ひから上つた舞妓のやうに、金でむりにどうといふ譯にいかないのであつた。

喜久勇の母親もと祇園で喜久葉といつた藝妓で、この方は高安がやつと手を廻して買収したので、母親の方には一向異存がなかつた。しかし父親は昔極道した男の常として、成金がきらひであつた。殊に高安は野法途なことの好きな男で、女にかけては一種の變態だといふ噂もあるので、彼としては、可愛い娘の貞操をそんな男の玩具にさせ度くないといふ腹もあつたのであつた。

「ほんでな、此間の晩、喜久勇を春柳へよんで、當人の氣持をたんねてみると、當人ももうあと一年ほどはどうしても舞妓はんをしてるちうて聞かんのや。そこで高安も君、俺の顔がまるつぶれやちうて、えらい腹立てをつてな。それといふのも、後に小峰ちふ學生あがりのわるがつていよるからやちうて、實は俺に何んとかせいちうて、もうどだいやかましいのや。ほんで俺が金になる仕事やしな。いや、つからたけど、實は一昨日の晩ホールへいて、網を張つとつたんや。」

春千代はくすりとふきだして、

「まあま、小峰はんも、えらい色男やな。喜久勇はんが高安さんに見かへはつたちふのんは私かて、聞捨てに出来まへんえ。さ、私の方も顔の立つやうにしとくれやすな。」

小峰は苦笑ひをして、

「おい、加藤、貴様もい、加減にしるよ。僕は喜久勇には、あれから一度か二度、戸外で逢つたきりでもろくに話もしたことはないんだぜ。その僕がどうして、そんなことが出来る。考へてみたつて分るぢやないか。」

「いや、あんた、遁げをはつたかてあかんで、高安の方ではちやんともう調べがとゞいてゐるのやさけえな。」

「いくら調べがとゞいてをつても、逢はないものは、逢はないんだからな。それで、もし僕と喜久勇との間に、さういふやうなことがあつて、喜久勇が絶対に高安のものにならないとなつたら、君はどうするんだね。」

「どうするもかうするも、俺は君、知らんこつちやぜ。俺は金になるからやるだけのこつちや。そこを混同せんとおいてくれ。」

「高安はどうするんだ。」

「高安はな、君をみつつけ次第に、殺すちうてピストルなんぞもつて歩いてるわ。あいつは又、けつたい

な奴ちやからな。」

「はゝゝゝ。馬鹿々々しい。あんな大きな株成金でもやつぱりそんな馬鹿な口をきくのかね。そんなことをいつて變に強がると、我々は却つて反抗したくなるぢやないか。」

「いや、ところがあの高安も、實は二十日ほど前からとても分がわるうてな。大株ばかりでも四十萬圓から損しをつたんやぜ。君、新聞に出とつたんを知らんかい。今は黒人でもあの島は危険な場所でな。窪田もえらい大損をするし、松川もつい一昨日二百萬から大穴をあけたさけえな。高安もちよつとヤケになつとるんや。それにあの喜久勇には、今迄何萬ちふ大金をかけたのやし、新地でももうえらい評判やさけえ、高安も何んとかせんことには、ほんまに顔がたゝんや。縁喜を祝ふ商賣やからな。そやよつて、どうやね、小峰はん、あんたもこゝは折れてやな、千圓ほど私が出すさけえ、あの喜久勇を高安に賣つたつてくれんかいな。私も實は二千圓で引受けた仕事やさけえ、半分は儲けさせてもらはんとにはな。」

小峰は呆れてものがいへなかつた。いかに加藤でもかう露骨にいはれると、彼はもうムカムカしてくるのであつた。

小峰はこんな話にあんまり深入りすると、却つて自分の方が不愉快になつてくるので、いづれそれぢや一日二日考へて返事をするからといつて、その晩はいゝ加減に切りあげてしまった。加藤はそんなら

明後日の晩、又このマドロスで逢はうと約束して、もうぐづくに酔ばらつて歸つていつた。

春千代と小峰はその足で又市光へいつたが、春千代はすっかりヒステリックになつて、酒ばかり飲みだした。

「なあ、へ、私も、きつう心配になつて來たわ。あんたはん、ほんまのこというとくれはいな。あんたほんまに喜久勇はんとそやのすか。何處ぞ別なお茶屋はんで逢うとゐると違ひまつか。この四五日たよりがなかつたんは、怪しうおつせなあ。」

小峰は暗い顔をして、

「いや、春千代さん、君、僕はそんな呑氣な體ぢやないんだ。今實は死活の問題にぶつつかつて、とても苦しんでゐるんだからね。」と、いつて、涙ぐみながら、彼は今の境涯を打明けて春千代に話した。

春千代も黙つて聞いてゐたが、彼女は急に朗らかになつて、

「まあ、ま、そらえゝわ。私、えゝこと聞きましたわ。そやつたら、つまり何どすな。あんたはんを私が引取つて、あんじようしてあげたら、それでえゝのどつしやる。失禮におすけど、あんたはん、大學へ通うてやはつて、月々何んぼほどあつたら、えゝのどす。」

「さあ、まあ、月々五十圓はいるね。」

「さうかて、學資だけどつせ。ゐやはるところは私があんばいしてあげまつさ。」

「さあ、食ふ方をひけば、まあ、二十五圓もあつたら、何んとかなるね。」
 「それくらゐでえゝのどつか。そやつたら、何んも心配することいらしまへんやないか。ほて、妹はんはどうおしやす。」

「いや、それに困つてゐるんだよ。妹だつて君、月十八圓ぢや到底やつていけやしないからね。」

「ほんまに氣の毒におつせなあ。ほならやつぱり妹はんも一緒におゐやす方がよろしいなあ。あんたはんもあと半年ほどで大學院もおでやすのやし、惜しいことですわ。私、何んとかえゝあんばいにしますわ。明日まで待つとくれやすな。」

春千代はあつさり引受けてくれたのであつた。

さうなると、今度は喜久勇の問題であつた。

今加藤がいつたやうだと、喜久勇は小峰故に高安の自由にならないやうな話である。小峰としては、あれから一度も逢つてゐないので、そんなことは少しも信じられなかつたが、春千代は廓の事情を知つてゐるだけに、やつぱり心配になつた。あの喜久勇といふ女は、家が家だし、それに親も親なので、他の舞妓達とは一風違つてゐた。それだけにひよつとしたら、心から小峰のことを思つてゐるのかも知れない。昔から廓では積極的に働きかけることの出来ない境遇にゐる舞妓の戀ほど、神秘的なものはないとされてゐた。

春千代は酔つてくると、小峰の胸へしなだれかゝつて、

「なあ、小峰はん、私、思ひあたることもあるのどつせ。舞妓はんの時分には、そ、我儘はきいても、體の自由がきゝまへんやろ。そやさかいに、いやゝちうたら、もうどこまでもいやが通るのどすがな。これが普通の抱へさんやつたらな、屋形の力でどないでもなりまつけどなあ。喜久勇はんのお父はんはそら、ほんまによう物の分つた人どすよつてなあ。」

そんなことをいられると、若い小峰はもう喜久勇に逢ひ度くて耐らなくなつてきた。春千代はその顔色でみてとつて、しつかりと小峰の腕にしがみつきながら、

「なあ、へ、小峰はん、私、何んぼ喜久勇はんがあんたはんにさうかて、私はあんたはんを離さしまへんえ。よう覚えてとくれやすや。私、あんたはんがおほかしやしたら、あんたはんを殺ろして、私も死にますさかいな。よろしいおすか。」と、いつて、おいおい泣きだしてしまふ。

小峰も泣いて、

「いや、僕はたとへどんなことがあつても、そんな義理に外づれた眞似は斷じてしないよ。僕もそりや喜久勇さんは好きだけど、しかしありや僕の偶像だからね。決して現實の女として、僕あの人に戀をしてゐるんぢやないからな。」

「あんたはん、今おいひやしたと、ようよう覺えとゐやしや。きつとどつせ。」

春千代はその晩も亦、小峰を歸さなかつた。小峰には、春千代ほどの女が、何んでかうまでに自分を愛撫してくれるのか、それが自分でも腑に落ちなかつた。いゝ客もついてゐる彼女が、ほんの一學生の自分をどうしてかう愛してくるのであらう。小峰の理性はそこに疑ひをもたすにはゐられないほど、春千代はもう彼に溺れきつてゐた。それが小峰にはだんだん氣味がわるくさへ感じられてきた。

古門前

その翌日、春千代は智恩院の古門前にある大道寺といふ家を見つけに来てくれた。それはもとやはり祇園で出てゐた春菊といふ妓の母親の家で、春千代は春菊とは屋形も同じであつたし、非常に仲のいゝ間柄であつたので早速そこへいつて頼んでみたのであつた。

大道寺の家は二階が二間、下が三間の、小ぢんまりした仕舞た屋で、六十二になる耳の遠い母親と、十三になる春菊の姪と二人暮らしであつた。春菊は九州の福岡の客にひかされて、今ではもうべつたり彼地へいつたきりになつてゐるので、母親はひどくそれを寂しがつてゐた。しかし春菊からは仕送りもきちんきちんとしてくれるし、別にこれといつて苦勞もないので、母親のおちかは全くの樂隠居であつた。

小峰と八重子はすぐにその大道寺の家へ引越していつた。彼等は二階の六疊と四疊をかりて、そこでうんと儉約して暮らすことにした。小峰はまさか春千代から仕送りを受けるともいひかねて、妹には一切を秘密にしておいた。

春千代は毎日のやうに遊びにやつてきた。彼女は一體にはんなりした明るい性質の女なので、八重子とも忽ち仲よしになつてしまつた。彼女はよく八重子を誘ひだしては、おすもじをたべにいつたり、コーヒーをのみにいつたりした。春千代は小峰の顔さへみると、

「なあ、小峰はん、あんたはん、こないしとゐやしたら、何も心配なことあらしまへんさかい、今迄と違つて大學へは毎日いとくれやすや。そやなけりや、私、八重子はんにすまんへんわ。ほんまに八重子はんてえゝ氣持ちの人やわ。私、好ツきや。」などといつてゐた。

晝間のうちは、八重子も高島屋の店へ出るので留守であつた。階下は耳の遠いおちか和小娘ばかりなので、春千代はおほつぱらで逢曳きが出来た。

小峰も又大學へ通つて一心になつて研學に身を入れた。喜久勇のことなど思つては、春千代にすまなと思つて、彼はなるべく喜久勇の名を忘れよう、忘れようとしてゐた。しかし、どうにもこればかりは思ひ切れなかつた。加藤にも何んとかはつきりした返事をしなければならぬと思ひ思ひ、ついそのまゝに放つたらかしておいた。

それはもう大道寺へ移つてから半月ばかりたつてからであつた。或日のこと、小峰がたつたひとり二階で調べものをしてゐると、そこへ姪のおはつが上つてきて、杉本といふ人が訪ねてきたといふ。誰れかと思つて、窓からのぞいてみると、露路の庇間には、セルの派手な單衣をきた娘と、十徳を着た俳人のやうな老人が立つてゐる。ひよいとみると、その娘は、思ひもかけない喜久勇であつた。いつもの京風と違つて、七三にいつてゐるので、すっかり人違ひがしてみえた。

小峰はもうかあつと気が顛倒して、とにかく二人を二階へあげさせた。と、その老人は上つてくるといきなり、いかにも世馴れた調子で、

「お、これは、これは、突然お邪魔しまして、えらいどうも濟まんことで。私はな、この喜久勇の父親ですのや。はゝゝゝ。又喜久勇がいつもえらいお世話さんになりました。」と、鷹揚に手について挨拶する。

小峰は面喰つて、お辭儀ばかりしてゐた。喜久勇もひどくれて、眞紅な顔をしてゐた。父親は何やら手土産のやうなものを出して、壁ぎはへおきながら、

「私、初めてお眼にかゝりますのに、ぶしつけやと思ひましたけど、實はな、今日は一寸折入つてお願ひがござりましたな。それでよせて頂きましたんや。あんたはんも東のお方やさうで、私、東の方好きで叶はんのどすがな。そやよつて、もう何もかもザツク balan に話さしてもらひますが、實はこの娘の

喜久勇のことどすがな。今度その、ちよつと事情がおして、お稼業をやめさせよう思ひましたな。」

小峰は眼を丸くして、

「ほう、ぢやもう舞妓さんをひくんですか。こないだちよつと人に聞いたんですが、たしか健康がよくないさうで、どうです、もうなほつたんですか。」

「はゝゝゝ。いや、それが有様いふと、實は虚病ですよ。この通り、眼はちよつと泣き腫らしとりますし、顔も寝れとりまつけど、體はちよつとも悪いことおへんのや。そないにいうときまへんと、世間が煩さうおすさかいなあ。はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ。虚病だつたんですか。何あんだ。そんならいゝけど、僕はとても心配してをつたんですよ。」

「さうでつか。それはまあ、おほきに。あんたはんも大方よう知つてやと思ひますが、これも例の高安さんでいろくやゝこしいことが出来ましてな。退くに退かれんやうなことになつてしまつたんどすわ。彼方をたてれば、此方が立たんしな。ほんまに私もこれには往生してますのや。ほんでにこの子も一遍あんたはん逢うて、自分の考へをお話したいひますので、私が今日は介添へ役てなことでなあ、押しかけ嫁入の戸名瀬の役ですにやわ。はゝゝゝ。」

だんだん話を聞いてみると、小峰はもう驚くことばかりであつた。喜久勇はやつぱり自分のことを思

つてゐてくれて、どうしても舞妓はんを退かしてくれ、そして小峰はんの嫁はんにして欲しいといつて父親に毎日のやうにせがんでゐるといふのであつた。

「小峰も正面きつてさういはれると、ひどく當惑してしまつた。さう眞剣に出られては、此方に心用意がないだけに、彼としては、手も足も出ないのであつた。」

父親は煙草を取り出して、

「いや、私もな、若い頃にはこれで大分親泣かせもしましたのでな、娘の心持ちもようよう分りますのや。そやよつてなあ、あんたはんもどすな、こんなもんでも何んとかしてくれはるお氣持ちがあらましたら、私はよろこんであんたはんにもらうてもらほ思ひましてな。ほんで年寄りの面押ししたてようかどひましたんや。今日が今日ちうても無理どすさかい、どうぞ一遍とつくり考へてみとくれやす。お頼ん申しますわ。」

小峰ももぢもじしながら、

「そりや、折角のお言葉ですから、僕も考へてはみますがね。一體、あの高安さんの方はどうなつてをるんですか。僕も加藤とかいふ男に此間、ひどくおどかさされてね。弱つたですよ。」

「たしかそやさうにおすなあ。あんたはんがダンスホールできついに投げはつたちふことを聞きまして、私も胸がすつとしましたんや。高安さんも此頃は株の出来がほん悪うて、財産も何も仕舞うてしま

ははるらしいおすなあ。あのお商賣ばかりは、今日あつて、明日ないちふやうなもんどすさかい、私ら頼りにならしまへんわ。そら、この子も今迄はえらう御最良にもしてもらひましたけど、私は最初から嫌ひやつたんどつせ。それをあんたお茶屋はんがやかましういうて、この子を出さうとしやはつたんで今になつてこんな難儀がかゝつて来たんどすわ。」

「さうすると、喜久勇さんはもう高安とは手を切つたんですか。」

「手を切るて、あんたはん、この子はそんなとこまでいてしまへんのどつせ。たゞじよじひいきにしてくれやはつただけでなあ。別にどうていふのでもあらしまへんし、それに私はあの高安ちふ人の前生をようよう知つてますのでな。この子の旦那にするちふやうなことようしまへんのや。これはこゝだけの話どつけど、あの人、郡山の金井ちふ家の息どしてなあ。若い時分には一寸やうないことをして、牢へも二度ほど入つたことのある人どすがな。今では成金でえらい派手なことどつけど、それまでは風のわるい男でな。それに女にかけては變態どして、あの人にかゝつたら、もうきつと女の方が病ひつきますのや。大阪でも北の新地の小錦ちふ妓が出てましたが、これはとうとうあんた、生命をとられましたんやぜ。そんなもんに、何んで可愛いこの子が出せまつしやろ。親としてそんな無慈悲なことは出来しまへんやないか。そやよつて、舞妓はんさへひかしたら、もうかけかまひはありまへんよつてなあ。」

さういふ言葉のうちには、高安に仇をされるのを内々恐れてゐるらしい口吻が現はれてゐた。

小峰は親心といふやうなものがしみじみ感じられて、強さうな顔はしてゐながら、人に頼り絶るやうなこの父親の氣持がいぢらしくて耐らなかつた。

喜久勇親子は二時間ばかりゐて、又二三日うちにお邪魔するからと云ひ残して、名残惜しげに歸つていつた。

毒 弾

その晩、もう十一時すぎになつてから、春千代はやつて来たが、彼女はいろんな廓の取沙沙を聞いてそれを面白可笑しく小峰に話してくれた。

喜久勇が来たことは、ひし隠しに隠してゐるので、小峰はもう相槌も打てず、態と何もかもが初耳のやうな顔をして、身をいれて聞いてゐた。

「なあ、小峰はん。喜久勇はんはな、肺の氣があるたらいうて、近々にお商賣をやめやはるさうにおつせ。ほんまに氣の毒ななあ。ほんで高安さんがきついめに怒らはつて、もうそらほんまに氣狂ひのやうになつて、大勝はんや、屋形へ談判してやはるのどすてなあ。ほんまに難儀なことすえなあ。」

「しかし、いくら高安が何といつても、病氣ぢや仕様がないですね。あれから加藤はどうしてゐるんだ

らう。ホールへは顔を出しませんか。」

「ホールへは來やはらしまへん。そやけどな、高安さんはな、何んでも三度ほど顔みせやはつたさうにおつせ。きつとあんたはんを狙うてやはるのどつせなあ。あんたはんもこれからは氣つけなあきまへんえ。百萬圓も、二百萬圓も損しやはると、誰れかて氣狂ひのやうになりますさかいな。ほゝゝゝ。」

「危いねえ。昨日の新聞にも出てゐたが、大阪の川島つていふ人は、株で損をして、ピストル自殺をしたつていふからね。うつかりさういふ人にや近よれないですよ。」

「ほんまどすわなあ。やけになつてやはりますさかいなあ。春千代は八重子がついで出す茶をうまさうに飲んで、「あの、それからな、ますゑはん。あの人が近いうちに、東京へ歸らはるのどすて。ほんでにな、あんたはんに一週逢はしてほしいいうて、私言傳けをいはれて來ましたんどつせ。あんたはん逢うておあげやすか。」

「東京へ歸る。」

「ふん、さうどすて。あの人は、何やほんまに躰がわるいやうにおつせ。あんなに細い細い躰どすさかいなあ。」

「そりや氣の毒ですわね。同じ小石川に住んでゐる同志だから、僕も大いに同情してゐるんですよ。ぢや一遍、明日の晩でも久しぶりにホールへいつて、お別れに踊るかなあ。」

「さうおしやす。どないに喜ばはるか知れまへんえ。私な、怪躰なこといふやうでつけど、あの人、ちよつとぐらゐあなたはんに、惚れてやはるのと違ひまつか。どうも臭うおつせ。」

「はゝゝゝ。そんな馬鹿な。君は女さへみると、さういふことをいつて僕をからかふんで、困つちまふなあ。あれはねえ、同じ東京だからそれで氣が合ふんですよ。」

「ほゝゝゝ。さうばかりでもおへんどつしやろえ。私の眼は黒うおすさかいな。明日の晩は監視づきで逢はせんと危うおつせ。なあ、八重子はん。兄さんはな、これでえらい丹次郎はんやのつせ。彼方からも小峰さん、此方からも小峰はんて、そらほんまに煩いことやの。あなたはんも氣つけてなあきまへんで。」

八重子はクスクス笑つてゐた。

その翌晩、小峰は春千代に誘はれて、久振りでホールへいつた。と、ますゑは噂のとほり、すつかり面裏れがして、踊るのさへものうさうであつた。彼女は小峰の顔を見ると、もう可笑しいほどそはそはして、彼をウオルツへ誘ひながら、

「あなた、随分しばらくでしたわね。いづぞやは私、すつぽかされちやつて、とてもあなたを恨んでましたのよ。ほんとに随分な方ねえ。」と、涙ぐみながらいふ。

小峰は苦笑ひをして、

「いや、どうもあの時にはほんとに失敬したよ。僕ね、ちよつと一身上のことでごたごたした問題が起つたもんだからね。君、東京へ歸るつてほんとうかい。」

「え、私、歸らうと思つてますの。實はね、母がもう大分弱り込みましてね。どうせ死ぬんなら、東京の土になり度いなんでいふもんですから。」

「心細いねえ。向ふで生れた人なんだから、それも無理はないけど、東京へ歸つて何をするの。」

「私、やつぱりダンサーとして立つていくより他はないんですわ。今度フロリダのホールが新築になつて、友人から來ないかつていつて來たもんですから、私それで歸り度くなつたんですの。あなたは、まだ當分此方ですか。」

「うむ、僕も東京へ歸り度いんだけど、大學の方がねえ。」

「それに春千代さんがゐらしつちや、ちよつと歸れませんわねえ。私、昨夜すつかり聞かされちまひましたわ。」

「何をさ。」

「何をつて、あなた、白ばつくれるのは罪ですわよ。私、ぼんくらですから、今迄ちつとも知らなかつたんですの。私ね、それを聞いたんで、もうすつかりあきらめちまひましたわ。どうせ私は運がないんですものね。」

彼は今でも人を殺ろすなぞといふ大それた氣はなく、たゞおどかしの空砲をうつたのだと、そればかり云張つてゐた。ホールからピストルを取寄せてみると、それはコルトの六連發で、實彈は三發しか残つてゐなかつた。

小峰は喜久勇に關する事情をこと細かに司法主任に話した。主任もよく分つてくれて、又何か取調べの必要が起つたら呼び上げるからといつて、午前の一時過ぎに小峰だけひとまづ歸してくれた。

ホールはもう閉つてゐるので、小峰は取敢へずあとの様子を聞かうと思つて、春千代の家へいつてみた。と、春千代はますゑについて、東山の下山病院へいつてゐるといふので、彼はすぐさま圓タクで下山病院へかけつけた。

ますゑは二階の病室に收容されてゐた。枕許には春千代とますゑの母親と、それから思ひもかけない妹の八重子までが來てゐる。春千代はおろおろ聲で、

「まあ、小峰はん。よう歸つて來とくれやした。あんたはん、ますゑはんはもういかなのどつせ。」と、

つぶ。

みると、白いカバーのかゝつたベットのうへに寝てゐるますゑの顔には、白い手巾がかけてあつた。

小峰もさすがにぎよツとして、

「何に、もういけない。そんなことはないだらう。一體何處をやられたんだね。」

「あのな、胸をな、横から打たれたつたんで、きついに血を吐かはつたんどつせ。こゝへ來た時まで、まだしつかりしてやはつたんどつけどな、今の先から急に容態がわるうなつて、ほん十分ほど前にとうとういかなやうになつた。」さういひながら春千代はしくしく泣き出してしまふのであつた。

ますゑの母親は身も世もあられないやうに泣き崩れてゐた。

小峰は枕許へ歩みよつてそつと手巾をめぐつてみたが、ますゑは物凄しい死色に掩はれて、もう全く息が絶えてしまつてゐた。

小峰はどうしていゝか分らないので、茫然としてそこへ突立つてゐた。

妹の八重子はやつと涙をふいて、

「ねえ、兄様。あの、私ね、今急なお電話で取敢へずかけつけたんですけど、ほんとにとんだことでしたわね。兄様、このますゑさんて方、御存知？」

「あゝ知つてるとも、僕はこの人に踊りの手ほどきを教へてもらつたんだもの。」

「いゝえ、さうぢやないのよ。この方の身許を御存知ですかつて、訊いてんのよ。」

「身許？ そりや知らんね。東京の人だつていふことはきいてゐたがね、……」

「まあ、そんなら私からお話ししますがね、この方のお父様つて方は、ほら、もと病院にゐた田中さんね、あの方なんですわ。」

「何に、田中？ あの頭の禿げた、薬局の？」

「え、さうなんですつて。實はね、兄様が警察へいつてらつしやるんなら、せめて私にでもひと眼逢ひ度いつて仰有るんでね。私、来てみますとね。そのお話なんですわ。もう吃驚しちやひましてね。」

「ふむ、そりや意外だなあ。ぢやお母さんはむろん田中さんの奥さんなんでせうねえ。」

母親も涙を拭きながら、

「あの、取紛れてをりまして、まだ御挨拶もいたしませんで。私、實はあの田中の家内なんぞでございますの。かねがねから又ますゑが大變に御厄介になつてをりまして。」

小峰はひどく面食つて、

「いや、どうも、何んて御挨拶をしていゝか分りませんが、僕そんなことはちつとも知らなかつたもんですから、今迄しみじみお話しても聞きませんで。」

「いゝえ、もう不束な娘でございますから、私、決してそんなことを若旦那様にお話ししちやいけないつて、兼々からさう申し聞かせてをりましたんですの。こんな姿でお眼にかゝるのは、ほんとにお恥かしうございますんでねえ。」

「いや、併しまだ僕にはほんとうのことゝは思へないんですよ。田中さんはたしか、病院をひかれてから、何處か臺灣の方へとかいかれたんぢやないんですか。」

「は、あの、あちらからお暇をいたゞきましてから、臺北の病院へまゐりましたんですけれど、やはりお酒がすぎまして、とうとう彼地で腸出血をやりまして、亡くなつてしまひましたんです。だもんでございますから、私と娘はもうどうにもなくなりまして、とうとうまあこんな身のうへになつてしまひまして。」

「さうですか。いや、いつかますゑさんの話ぢやね、同じ水道町で、彼方にはお父さんの家があるつていふお話だつたもんですから、僕も妙になつかしく思ひましてねえ。」

「それでは何んぞございませう。そんなことを申して、自分で氣休めにいたしてをりましたんでございませう。もう彼方の家はとうに引拂ひまして、今私と娘とたつた二人つきりでくらししてをりますんでね。」

小峰はあまりに意外なことばかりがつゞくので、まるで夢でもみてゐるやうな氣持ちだつた。

愛慾の果

そこへ喜久勇の父親が、やつと探しあてたといつて喜久勇と二人でかけつけてきた。二人もますゑが死んだときいて、がっかりしたやうな顔をしてゐた。

喜久勇の父親はますゑの母親にも初対面の挨拶をして、

「ほんまにまあ、さぞお力落としてござりまつしやろ。私もたつた一人娘ですよつてに、お察しいたしますわ。なあ。小峰はん。私、一時間ほど前にやつと聞きましてなあ。それからホールへあんたはん、走つていきましてなあ。あこの御主人にいろいろ話を聞かしてもらうたんどつせ。つまりこのますゑはんちふお方は、喜久勇の身代りに死んでくれやはつたやうなもんどすさかいなあ。」

「いや、ますゑさんは、僕の身代りになつて死んでくれたんですよ。僕がもう四五秒も早くターンをすりや、ますゑさんは無事だつたんだ。實にどうも、僕はお母さんにたいして申譯ないと思つてゐるんです。」

「いや、それもさうどつしやろけど、私の方には又事情がありますのどつせ。實はな、夕方の四時頃にあの高安さんがきつう酔うて大勝のお母はんと一緒に、私のところへ來やはつたんどすがな。ほて、何ッとしても喜久勇に逢はせいいうて、もうえらいことやつたんどつせ。」

「へえ、あなたのとこへもいつたんですか。」

「それだな、私ももうせんどから、滅多なことがあつたらいかん思うて、この娘を大津の親戚のところへ預けておいたんどすがな。それでまあ、やつと助かりましたんやけど、もしこれが家にゐたら、きつとやられてますわな。もうその時に、高安さんは、眼があんたはん、据つてましたさかいなあ。」

「ほう。いや、そりや危険だ。僕はね、さつき警察でさう思つたんですけど、あの高安つていふ男は、たしかに發狂してゐますな。たしかに普通の精神状態ぢやないですよ。酔ひがさめたら、それがはつきり分ると思ふ。」

「さうでつしやろか。さういへば、怪體なとこがありますわな。家へ來やはつた時にも、喜久勇の寫眞を全紙へ引のばしたんを外さはつて、ねぶつたり、頬すりしたり、可笑しげなことばかりしとゐやしたんどつせ。それにいははることも一向辻褄が合はしまへんのでな。」

皆はさうやつてゐる譯にもいかないので、とにかく檢視がすんだらますゑの遺骸を下立賣の家まで送つていくことにした。ますゑの母親はむろん金なぞの用意はないし、一人で途方にくれてゐるので、春千代が一切引受けてやることにした。

喜久勇の父親はそれを聞くと、小峰を小陰へよんで、

「あの、費用のことやつたら、私の方にも負擔する義務がござりますよつてに、春千代はんにはばかり迷惑をかけては、私の顔が立ちまへんさかいな。どうぞ私に一切させとくれやす。」と、いふ。

それで又ひとごつたつきごたつた。小峰にはそれを取做す資格がないので、彼は當惑してしまつた。「まあ、何かのことはあとで相談することにしようぢやないですか、今夜はこのまゝ遺骸を家へ送り届けて、明日皆さんで集つて、ゆつくり御相談しても僕おそくはないと思ひますから。」小峰はそれで立て

きつてゐるより他はなかつた。

小峰はいつまた警察から呼び出しが来るか分らないので、ひと足先に家へ歸つてゐる必要があつた。で、下立賣へは春千代と、八重子と、それから喜久勇の父親が送つていくことになつた。

喜久勇の父親は喜久勇を廊下へ呼んで、何やら耳打ちをしたあとで、彼女だけ一人先へ歸した。さうしないと春千代が絶えず變な眼を光らかして、つんつん當りちらかすので、父親もみてゐられないのであつた。

喜久勇が歸つてしまふと、春千代もやつと氣が静まつて來たか、まめまめしく働き出して、

「なあ、小峰はん、ほんなら、私、一寸送つていて、一時間ほどしたら、おうちへ寄りますさかいな。待つてとくれやしゃ。いろいろ話がありまますさかいな。」

小峰は病院の玄関へ出て、まするの遺骸が寢臺自動車へのせられて、送り出されるまでじつと見送つてゐた。警察へ出す検案書やいろいろな手續きがあるので、それは明日の朝改めてまた來るからと事務所へいひおいて、彼はたつた一人でしよんぼり病院を出た。彼はもうすつかり氣疲れが出て、歩きながら、しきりにしくりしくり泣いてゐた。

もう午前の二時もすぎでゐるので、祇園町には人通りもさうなかつた。時々婢衆が藝妓や舞妓の着換へをもつて、軒づたひにちよこちよこ走つていく後影が軒燈の間にほのめいて、さすがの色街もしいん

と更けてゐた。

花見小路を出ようとすると、角のところから若い女の姿がすうツと浮き上るやうに出て來て、

「小峰はん、小峰はん。」と、人目をしのぶやうに呼ぶ。

とみると、それは思ひもかけない喜久勇であつた。

「お、喜久勇さん、君、家へ歸つたんぢやないの。」

喜久勇はしくしく泣いてゐて、

「私な、こゝであんたはんがお歸りやすの待つてた。」

「そりや氣の毒したなあ。さうと知つてゐりや、僕もつと急いで歸つてくるんだつたのに。君、これからどうするの。」

「あの、な、私、あんたはんに話し度いことがありますにやわ。一緒に歩きまへういな。」

歩くといつても、この深夜では滅多なところへはいけないし、さうかといつてこんな廓のなかをうろろしてゐれば、人目に立つので、小峰はしかたがなしに、ぶらぶら圓山公園の方へ上つていつた。八坂神社の境内は物凄く静まつて、常夜燈の光だけが暗闇にしよんぼりちらつてゐる。石敷の參道を歩くと、却つて足音が氣味がわるいので、二人はわざとそれをよけて歩いていつた。

「なあ、へ、小峰さん、今夜はほんまにえらいことどしたえなあ。私、あんたはんがピストルでお打た

れやしたと聞きましたんで、もう氣失うて、一時間ほどちよつとも知らなんだんとつせ。」

「いや、僕は大丈夫ですよ。ほんとにますゑさんが氣の毒でね。僕、どうしたらいいかと思つて、これには弱つてゐるんですよ。」

「ほんまになあ。さうかて、あんたはんの身代りに死なはつたんどすよつてに、私あの人、羨ましいおすわ。私もほんまに死に度いわ。」

「そんな君、そんなことをいつちや駄目ですよ。もうこれで高安さんもこのまゝ刑務所へ入れられてしまふにきまつてゐるから、あんたも安心していいですね。ほんとにその意味からいふと、ますゑさんといふ人は實に尊い犠牲だつた。」

「さうかて、私、高安さんにピストルでうたれて死んだ方が、よつほど増しやわ。私、生きてゐても、何んも面白いことはおへんし……」と、いひながら、喜久勇は聲を呑んで泣いてゐる。

小峰はいぢらしくなつて、

「ねえ、君、君は今大津にゐるの。」

「ふむ、大津へゐてます。大津のな、花もちふお茶屋はんが、お母あはんの親類にあたりますよつてな。そこへ預つてもらつてますのや。」

「もう長いこといつてるの。」

「ふむ、もう十日ほどになります。」

「そんなら、さうと何故僕のところへ報らせてくれなかつたの。僕、どうしてゐるかと思つてね。」

「まあ、ま、うまいことを、どうえ。私、よう知つてまつせ。あんたはん、あこの家、春千代はんにあんばいしてもらうてやはるのどすてなあ。私がいたりしたら、いかなのどすてなあ。」

それをいはれると、小峰はもう一言もないのであつた。

喜久勇は、春千代のことに對して、何か恨みも云ひ度かつたのだらうし、又これから先のことについても、いろいろ相談もしたかつたのだらうが、喜久勇はあんまり思ひつめてゐるせぬか、それ以上突込んだことが云へなかつた。彼女はただしく泣くばかりであつた。

小峰の方も喜久勇の胸中によく分つてゐながら、春千代といふものがあるために、それ以上のことは云へないのであつた。彼は喜久勇の手を握つてやる勇氣さへ出て來ないので、唯口から出まかせなことばかりいひながら、夜の公園をぶらぶら歩き廻つてゐるより他はないのであつた。

小峰は一時間ばかりぶらぶらついてゐるうちに夜が明けさうになつてきたので、喜久勇を繩手の家へ送つて、自分も大道寺へ歸つていつた。

町の灯

その翌日の新聞には、昨夜のホールでの惨劇が五段ぬきの記事でデカデカと出た。むろん小峰の身分なども細かに書いてあつたので、小峰ももうそれですつかり世間へ對しての面目を失つてしまつた。彼はいづれ近藤先生や大學の仲間もそれをよんでゐるだらうと思ふと、もう全く絶望してしまつた。

その日の午後、警察から呼び出しが来て、再取調べが行はれた。その時には大勝の女将や、喜久勇の父親や、その他の關係者も十人ぢかく呼び出されて、調べ室は人で一杯であつた。

その結果、高安は殺傷罪に問はれることになつて、すぐさま検事局へ送られた。その時の話では、彼の行爲は一時的の精神錯亂であつて、決して病的變質ではないと認められたのであつた。

ますゑの遺骸は、その晩、下立賣の家で通夜をすませると、それから火葬場へ送られ、たつた一夜にして佗びしい骨になつてしまつた。春千代と喜久勇の父親は、二人で金を出し合はせて、不十分ながらも跡の始末をつけてやることにした。母親は四國の徳島に、自分の姪がかたづいてゐるから、そこへひと先づ尋ねていつてみるといふので、それから四五日の後に、家を引拂つて、娘の骨壺を抱いたまゝ、しよんぼり京都を立つていつた。小峰も驛まで見送りにいつたが、泣き濡れたその姿をみると、胸が一杯になつて、慰めてやる言葉も出て來なかつた。

小峰はそれからもう大學へも出ずに、毎日毎日酒ばかり飲んでゐた。酔ふと彼は狂暴になつて、春千代や八重子ともよく云争ひをした。夜半などにふいと飛び起きて、唯一人で戸外へ出ていつたりする

ので、春千代も八重子も氣が氣ではなかつた。

或る日の夕方、小峰は春千代が歸つたあとで、茜色の夕雲を頂いた比叡山を眺めてゐると、急に何にかなしに山へのぼつてみたくなつた。あの頂きには、有名な延暦寺の大伽藍がある。あの根本中堂へでも上つて、心靜かに祈願をこめたら、或は將來自分の歩いていく途も解決がつくかもしれない。さう思ふと彼はもう矢も楯も耐らなかつた。彼はそのまま帽子もかぶらずにぶらりと家を出てしまつた。

その晩は寺の宿院へ泊めてもらふことにした。夜更けてから二本ばかり酒をたふすと、彼は四明ヶ嶽へのぼつてみた。そこから眺めると右手には京都の町々が南京珠をふりこぼしたやうな美しい幾萬の灯影に飾られながら一面にひろがつてみえる。四條の大橋もみえれば、三條の大橋もみえる。あすこが祇園、あすこが京極と一々はつきり指呼される。今頃は丁度あのあたりで、春千代が踊つてゐるのだ。又あの古門前の寂しい大道寺の家では、妹の八重子がどんなに自分の歸りを待ち佗びてゐることであらう。さう思ふと、彼は胸がはりさけるやうな思ひがするのであつた。

左の方をみると、薄白い琵琶湖の湖面のつきるところに、大津の町の灯がちらちら水にうつつてゐる。その寂しい灯影はまるで流離の國にかぎらふ絶望の火のやうであつた。そこにはあの戀しい喜久勇がゐるのである。今頃は自分のことを思ひわづらひながら、彼女はさぞや涙で枕紙をぬらしてゐるであらう。

小峰は春千代と喜久勇の姿を眼の前に思ひ浮べながら、一生懸命になつて考へてみた。彼としてはむしろ喜久勇の方へ傾いていくのが自然であつた。春千代も春千代ではあるが、それは此方から戀したのではなくて、云はゞ自分が受身なのである。しかも彼女には返しきれないやうな恩義と義理が重なつてゐる。喜久勇の方はそんなものがないだけに、思ひはいやまさる譯であつた。小峰は汪然と聲を放つて泣きながら自分ではどうすることも出来ない迷妄に、氣も狂ふばかり苦惱しずにはゐられなかつた。

むしろ小峰の眼には、すぐ下にひろがつてゐる大學の暗い建ものやひろい構内もうつつてゐた。それも彼にとつては、忘れることの出来ない苦悶のひとつであつた。

小峰はしばらくすると、もうどうでもなれといふやうな自暴自棄な氣持ちになつて、そのまゝ眞暗な山道を坂本の方へ向つてどんどん下りだした。彼は自分でも何をしてゐるのかさつぱり意識せずに、やたらに駈けるやうに山を下つていつた。

大津へついたのはもう夜の十二時すぎであつた。花もとといふ茶屋はすぐに分つた。そこは一現をすゝる小さな茶屋なので、小峰は眼をつぶつて上つていつた。中からは金齒を入れた年を老つた仲居が出てきて、二階へ通すには通したが、小峰の身なりがみすぼらしいので、あんまりいゝ顔もしなかつた。

「旦那はん、相方はんは誰れぞ知つとゐやすひとがありまつしやろな。」と、仲居は酸ッばいやうな酒をつぎながら云ふ。

小峰はその時初めて、喜久勇のことを訊いた。と、仲居は眼を丸くして、

「まあ、ま、あんたはんが、小峰はんでつかいな。まあ、私、どうしよう。ちよつと待つてとくれやしや。」と、いつて、彼女はばたばた階下へ下りていつたが、すぐに喜久勇を連れてきた。

喜久勇は座敷へ入るなり、もう泣いてゐた。

「やあ。君、先夜は失敬した。」小峰は我を忘れていつたが、喜久勇も涙をふいて、

「私な、あんまりひよつとやさかい、夢かと思つてましたんどうせ、ほんまに、よう來とくれやした。今日はあんたはん、お一人どつか。」

「むしろひとりさ。僕ね、あんまりくさくさして耐らないんで、叡山へのぼつてね。あすこからこの大津の灯をみたらもう耐らなくなつて、あんたに逢ひに來たんですよ。」

「まあ、ほんまどつか。ほんなら叡山から下りといでやした。えらいことどすえなあ。ほんで、これからどないにおしやすの。」

「僕？ 僕、君に逢へさへすりやいゝと思つて、夢中でやつて來たんですよ。僕ね、この通り、着のみ着のまゝで、とびだしてきたんでね。もう僕、京都へは歸らないつもりなのさ。」

「ま、ほんなら、東へおいにやすのか。」

「いや、東京へなんか、歸れるもんですか。僕はね、もう君と一緒に死んでしまひ度いんですよ。」と、